清水長一郎遺文集（５）

清水長一郎遺文集（5）

目次

一、らく亭の記……1
一、地蔵盆……2
一、三千院……4
一、衣奈祭り……6
一、十七曲り峠……7
一、日高の紙……9
一、キダイの瀧……11
一、西川平吉先生追思……13
一、浜田野花……15
一、ばら……16
一、続・日高郡誌……17
一、石……19
一、貰い風呂……21
一、三重塔奇談……22
一、集書余談……24
一、大仏（おさらぎ）さん……25
一、冬日閑話……28
一、余滴①……29
一、ほくその文字小考……30
一、蛇三話……31
一、高野豆腐……33
一、日高名勝記……34
一、芝口先生逸聞……36
一、田端憲之助翁……37
一、新聞四方山話……40
一、写本……41

一、一人旅……43
一、書画骨董談……44
一、中田宇南という男……46
一、死について……48
一、万葉集と日高①……49
一、御坊の古本屋……50
一、万葉集雑話……52
一、ハゼ……53
一、紀州新聞回想……55
一、岩代の絵馬……56
一、日高地方の絵馬……58
一、和歌山の土馬……59
一、籔椿……60
一、たんほゝ……62
一、蜜柑の花……63
一、故人録①
和田喜久男氏……65
一、故人録②
芝口常楠先生……66
一、故人録③
田端憲之助翁……67
一、夾竹桃……68
一、余滴②……70
一、井上先生追慕抄……71
一、新年随想郷土玩具……78
一、猿と角力を取った話……81
一、余滴③……82
一、余滴④……84
一、碑巡礼余談……85
山路郷めぐり
一、切目川村誌復刻版に寄せて……87

一、湯川直春の碑に就いて……89
一、尾崎光之助氏のことども……96
一、堀内喜市郎先生著……98
「教育に生きる」によせて
一、「先師に学ぶ」を拝読して……100
一、碑巡礼こぼれ噺……101
一、俳人塩路沂風……102
一、鳴鶏三話……107
一、力石……109
一、子孫のために記録の保存が必要……111
祖先の歩みを残そう
一、寒川村誌について……113
一、美浜町入山三宝寺で……114
湯川直光の墓発見
一、法灯国師の自賛画像……115
最晩年の書　妙光寺蔵と瓜二つ
一、新春随想……118
かねは天下のまわりもの
一、新春随想　こま犬……119
一、だいだい……121
一、桃の花……123
一、湯川神社の楠……124
一、御崎神社のうばめ樫……127
一、和佐山の二本松……129
一、日高別院の公孫樹……130
一、上富安の大榎……132
一、森彦太郎著の奇書……134
「奇僧の片影」について
一、上人松……136
一、新春随想　猪のはなし……138
一、新春随想……139
かねは天下のまわりもの②
一、道林寺の石段で……141
一、熊岡の一本松……143

らく亭の記

「紀州新聞」昭和三十八年八月三日掲載

岩波茂雄氏が晩年熱海へ別荘をたてた時、屋敷の中に櫟（くぬぎ）の老木があった。邪魔になるので伐ろうというと「この木を伐る位なら、その前におのれの腕を切れ」と、きびしく大工を叱った。

やがて櫟は別荘の前庭にとり入れられ、秋ごとに団栗が実のった。

「字引でみると櫟は役に立たぬやくざな木とある。おのれのようだ」と、できあがった別荘を惜櫟荘（せきれきそう）と名づけ、自らは惜櫟荘主人と号した。小林勇の岩波茂雄伝にある話である。

櫟で思い出したのだが、御坊市藤井に櫟亭（らくてい）というのがある。もと藤井郵便局長故小池四郎氏の離れ座敷の号である。

小池氏は藤井きっての旧家で、四郎氏の数代前を小池矩平というた。江川組大荘屋を勤め歌人であった瀬見善水の実弟にあたり、瀬見家を出て小池氏を嗣いだ人である。矩平は兄善水が柿園、加納諸平の逸材であったのと異なり、松尾塊亭の指導をうけた俳人であった。

矩平の書斎の前に「いちい樫」の老木があった。矩平はいたくこの木を愛し、書斎を「櫟亭」と称したばかりでなく、兄善水の師、加納諸平に「櫟亭之記」の執筆を乞うた。諸平は詳しく藤井村の由緒・地形・伝承を調べて天保十三年（一八四二年）九月、次の「小池氏櫟亭之記」を書いた。

いにしへの神祭の場には常磐木を植て神かかりし給う坐とし、近きあたりにことといひて、堪へたる水ありけんとおぼしく、おもいめぐらせる頃、この家のあるじ矩平が本よむ窓の名にかけたる、櫟亭の大樹はた家の後に小池の跡とて円らかなる形ありて氏をさえしかよぶと聞きつるは、いといと尊くいといと、あてこちの証にもあるかな。それが中にも櫟は、かつえ許も立ちのぼりて、もとの程二間ばかりもありとか、百年ちかき世よりも同じさまにて、かくいとこもりかに神さびてりとなん老人かたりいつれば、生きそめてよりは、いく代をか重ねけん。大かたのことわりもてさたせんは中々なり。ただ神のめで給ふ御木ともこそ、たたうべけれ、あわれ郡家の前なる槻を、つゝみに作りて崇りありし。松尾の故事なども聞ゆるを、さばかり年久しくなれど、さ枝にも手だにもふれずときくは、遠き祖の高き教によれるなるべし。今より後も家の鎮と、あふぎまもるべく、さてなん何事も、ときわにたらいゆくべくこそ。

加納諸平

今年七月はじめの某日、南海バスの小池恭平常務から「藤井郵便局の後庭に老樹のあるのを知っているか」と、電話があった。「加納諸平の櫟亭記にある樫の木でしょう」と答えると「その樫の木だが台風で弱った上、近年その由緒を知る

人がなく、粗末に扱われている局員川端某が、これをひどく惜しんでいる。一度見に来ないか」と電話をきった。

数日後、私は高野光勇氏と櫟亭を訪れた。さすがの小池家もうちつゞく不幸で本家はとりこわされ、昔日のおもかげはなかった。わずかに遺った壁間に「櫟亭―辛丑春―夢梅僊史」と書いた篇額が掲げられていた。辛丑は天保十二年（一八四一年）にあたるから諸平の「櫟亭之記」の前年である。夢梅僊史のことは私にはわからぬ。

折から見えた小池恭平氏や川端氏、狩谷電気商会主と櫟亭の庭を歩いた。主を失った庭は荒れるに任し廃園の色がこい。松・杉・槇・梅・馬目樫・もち・青木・八ツ手・つゝぢ・那木・くちなしが伸び放題に枝を繁らた中に、かって矩平が愛した「いちい樫」は庭の一隅にあった。

なるほど、数次の台風でその主幹は背丈のところで折れ、中は大きな空洞になっていた。矩平の昔「さ枝にも、手だにもふれず」と讃えた枝葉も、惜し気もなく伐り払われたあとが見られる。樹周、胸高で二米三五・樹令は三百年にも及ぼうか。藤井村が土生村から分かれた頃から、いく代を重ねてきたに違いない、いわば藤井の主である。

岩波茂雄は屋敷内の樫を切ろうと申し出た大工に「俺の腕を切ってからにせよ」と叱った。矩平が亡くなっても「いちい樫」は大事にしてやりたい。

附記＝櫟は俗称「団栗」の木であり「いちい樫」は樫の一種である。両者は全く樹種を異にするが、古来文学上「いちい樫」を櫟と書く習慣がある。矩平が「いちい樫」の故に櫟亭としたのはそのためである。

「紀州新聞」昭和三十八年九月三日掲載

地蔵盆

美浜町和田に浄土宗鎮西派に属する済広寺という寺がある。もとは隣村小池村にあったのだが、永禄年中（一五五八～一五六九）ここに移ったと伝える。

八月二十三日夕、娘が嫁いでいる和田の家を訪ねたところ、今晩済広寺で地蔵盆があるというので、夕食後ぶらりと出かけてみた。月のない暗い夜であった。星が降るように目ばたき、虫がさかんに鳴いていた。

寺にちかくなると、母親に手をひかれて地蔵盆にお詣りする子供たちを、幾組もみかけた。どの子供達もはずんだ足どりであった。道端に自転車や単車が何台もおいてあった。納涼がてらに青年達も集まっているらしい。やがて明るい電灯の光に山門がうかび、本堂の大屋根が夜空に巨大な姿をみせてきた。

山門の前に金魚店が出て、子供達の人気をあつめていた。やせた小さな金魚が箱の中で泳いでいた。気の早い子は、もう幾匹かの金魚をナイロンの袋に入れて大事そうに持っていた。金魚屋の向いが玩具屋で、ビニール製の「ひょっとこ」

や「おかめ」が飾ってあった。私どもが子供の頃のお面は、和紙を何枚も粘り重ねて漆をひいたもので、プーンと膠の匂いがしたものだが、ビニール製では、ひどく味気ないものだナと思いながら山門をくぐった。

すでに地蔵堂の前では十数人の老婆や子供が、和尚について読経をはじめていた。私が期待していた地蔵和讃は、もうすんでいたのか聞かれなかった。

やくざな私は酒間、当世流行の「こまどり姉妹」や「江利チエミ」の歌謡曲を愛唱する如く、西国三十三番の御詠歌や地蔵和讃にも、淡い魅力をおぼえるのである。

……一重つんでは父のため
二重つんでは母のため
三重つんでは古里の
兄弟わがみと回向する
……

と唱えるのを聞くと、訳もなく物悲しくなるのである。

一体わが国の貴族間に地蔵信仰がさかんに流行したのは平安後期で、それが庶民層に取入れられたのは、も少しおそい時期といわれるのだが、数おゝい諸仏のうちでも、地蔵尊ほど庶民に親しまれてきた仏も少ない。峰、谷々の観音様という言葉を聞くが、お地蔵様は峰、谷々どころではない。そこいらの道の辻、橋の袂にと至るところで、私どもの朝夕を見護っておられるのである。実際ちかく刊行される紀伊日高民話伝説集にも、お地蔵さんにまつわる伝説が、二十幾つも集っていてこの仏の人気の程が知られるのである。

ところでお地蔵さんといえば、この附近では、まず有田郡湯浅町勝楽寺の木造地蔵尊の右に出ずるものはない。法量八尺八寸、わが国の木造地蔵菩薩中、その大きさにおいて、第一といわれ、大正六年四月旧国宝の指定をうけ、現代は国の重要文化財になっているのである。

また石像地蔵尊では藤白峠の地蔵峰寺のものを挙げねばならぬ。この地蔵像は台座光背ともに一石造りの巨大なもので、等身大より遙かに大きく、光背裏の元亨三年（一三二三年）の銘により、鎌倉中期の秀作であることが知られる国宝である。

境内の屋台店を一わたり回ってみた。子供が大勢覗きこんでいると思うと「ぶん回し」をしかけて、わらび餅か「ういろう」のようの水菓子を売る店であった。「そうら、もう一つ負けてやる」男は景気よく怒鳴りながら、うす板の容器に、菓子を盛りあげていた。子供のころ二銭銅貨を湯になるほど握って、道成寺の縁日にでかけたことを思い出した。

そのうちレコードの音がして盆踊りがはじまった。十二、三才を頭にした幼女ばかりが小さな輪を描いて踊った。可憐

であった。お師匠らしい若い女性が幼女にまじって、脇見もせずに踊っている姿も好感がもてた。こんな光景をみていると、平和な日の幸福をしみじみと感じる。

いうまでもなく地蔵盆は八月二十四日に、地蔵堂で行われる盆供養であるが、この仏は特に幼童に憐れみを垂れられるとあって、児童の参加がおおく、それだけに一種の可憐さがある。ところが日高地方の平野部では、この愛すべき行事があまり行われないのはどういう訳であろうか。さみしいことである。

拙吟二句あり

夕立に地蔵会の灯ゆらぎけり

地蔵会の子の頬あかるし裸球

三千院

「紀州新聞」昭和三十八年十月三日掲載

もう大分前のことだが、京は洛北、三千院のちかくに一泊したことがある。中井陶光、山中不艸、小山茅外の諸氏に、妙令の一女性であったが、女性の名は省いておく。

その日私たちは早朝車で御坊をたち、途中京都府相楽郡山城町蟹満寺の国宝、釈迦如来座像を拝み、転じて宇治の平等院を訪ね、さらに京都博物館で開催中のエジプト展を見学したのであった。

私たちが京の市街をはなれて、水の美しい高野川ぞいに大原に向かったのは、長い初夏の日ざしも、ようやく西に傾きかけた頃であった。左右の山脚が次第にせまり、巨きな岩が所々で苔にぬれていた。地図をひらくと叡山の裾を走っているようであった。私は車の中で、ふと昨年十月であったか、やはりこの顔ぶれで秋津川奥の奇絶峡に遊んだことを思い出した。

あの時は今日のレデイがいなくて、小谷緑草が加わっていた。秋雨の降る日で午後は富田の草堂寺まで足をのばしたのであった。

やがて車は山峡を通りぬけた。視界がやや広くなった。大原野の里である。藁屋根の民家があちこち散在した中を、一筋の道が遠く走っていた。古い若狭街道で日本海の塩や魚が、このルートを通じて都へ運ばれたのであった。

三千院のちかくには四、五軒の料理旅館がひっそりと並んでいた。私たちはその中の小の山荘というのに宿をとった。桧皮ぶきの小さな門に小の山荘と記し、京都府史蹟として、その由緒を墨書きしていた。京都の然るべき人の別荘であったのを、戦後旅館に改装したということであった。

紅葉のころは忙しドスが、と案内の女中さんがいうた通り、季節外れの今は私達の外に客はなかった。浴後、木立のふかい窓外を眺めながら夕食をとった。下戸ぞろいなので一人で二、三本の銚子をあけると、旅の疲れが出たのか、ひどく酔いがまわった。そのうち、どんな拍子であったか不艸宗匠が、句会をやろうと言い出した。とんだことになったと思うたが、今さら引きさがるのも業腹だから無理をした。

出題「頼政忌」

宇治橋を渡る尼僧や頼政忌

頼政忌扇の芝に陰火燃ゆ

昼間みた宇治橋や扇の芝を十七字に並べただけで、無論句にはなっていない。外に二、三句あったが失念した。

翌早朝、三千院を訪ねた。宿から数十歩の地であった。名も知らぬ小鳥が鳴いていた。このあたりのことは中村直勝博士の「続、京の魅力」に詳しいから、只ここは天台三門跡の一つで、梶井門跡あるいは梨本門跡と称し、応仁乱後、現位置に移ったこと、山門の石垣が城門のそれのように岩丈であったこと、参道の楓の若葉が、トンネルのように続いて美しかったことを記すにとどめる。

庫裡で拝観を乞うと拝観巻をくれただけで案内するでもなく、勝手に歩きまわるにまかしている。京都市内から車で数十分の地だけに、至極のんびりしている。

私たちは庫裡から板敷伝いに老杉を仰ぎながら重要文化財、往生極楽院本堂に詣でた。入母屋造り、こけらぶき、桁行四間、梁間三間という御堂は、簡素でむしろ可愛ゆくさえ感じられる建物であるが、ここに私か久しくあこがれていた、これも重要文化財の桧材、寄木造り、漆箔の弥陀三尊が座しますのである。

回廊から堂に入りかけた私は、思わず呼吸をのんだ。あまりにも近くに、金色、丈六の本尊と観音、勢至の三尊がいましたのである。昭和八年（一九三三年）の修理の際に、勢至菩薩の胎内から発見された僧実照の願文によって、藤原実衡の後室真如尼が久安四年（一一四八）に造立したと知られる三尊は、八百年の長い年月を、かわることなく衆生済度の御手を、さしのべているのであった。

美しく、やさしく、ふくよかな仏像であった。ことに日本風に正座した両菩薩の、はちきれそうな股のあたりの曲線は、極めて人間的で、むしろなまめかしくさえあった。「ひどく現世的だナ」私は傍らの不艸宗匠に、そっとささやいた。本当は「えらい色気のある仏さんやナ」と云いたかったのだが、そんなことを云えば御行儀のよい宗匠は、きっと墳り出すに違いないと遠慮したのである。

正直なところ私は彫刻でも絵画でも、余り取り澄ましているのは趣味にあわぬ。はっきりいえば、どことなく御色気のあるのが好きなのだ。われながら俗物ぶりにあきれもするが、反面、白鳳の天平の貞観のと、きいたふうのことを云うて

いる人々にしても、腹の中は知れたものでないと云う気するのである。

衣奈祭り

「紀州新聞」昭和三十八年十一月三日掲載

今年の秋祭りも殆んど終わった。毎年この季節になると気の合う者同士で、各地の祭礼を見て回るのが、この二、三年の行事にしているが、今年は十月十五日、衣奈八幡神社の祭礼を見てきた。巽三郎・小山豊・高野光勇・読売新聞鍵山記者に私を加えた五人であった。

社伝によれば昔、応神天皇が武内宿禰に抱かれて大引浦に御上陸の後、この浦にお駐りになった。天皇はやがて都へ上られたが、その宮居の跡へ浦人たちが神殿を創建した。この神社の始まりであるという。千七百年も昔のことである。

八幡神社へは午後一時ごろ着いた。

既に神輿は浜の宮の御旅所へ渡御になり、氏下各村の囃子が浜へ出るところであった。列の先頭には今どき珍しいかみしも姿の十三、四才の少年が二人立ち、つゞいて同年輩、同じ装いの少年が四人、横笛を吹奏しながら横隊になって従い、その後へは黒縮緬襷がけの四人少年が小鼓をならしつゝ続き、さらに四人の同じ姿の少年が鉦をたたきながら進んだ。殿(しんが)りは二人の若者によって担われた大太鼓で、これには矢張り黒縮緬襷がけの太鼓打ちの少年一人がつきそい、数歩ごとに大きな身振りをして大太鼓を打ち鳴らした。

少年たちは何れも化粧をつけ美しかった。時々、列に向かって見物の中から声援がかかった。囃子たちは大勢の観衆の中を笛と大太鼓、小太鼓、鉦をならしながら浜の方へ進んだ。一組が通り過ぎると、また次の村の列が通った。流れ囃しというのかも知れぬ。

すかっと晴れ渡った祭日和であった。群集にもまれながら見ていると汗が滲んだ。お旅所の一方は高い崖であった。次の奉納余興、囃子踊りを見ようとする人々が、思い思いに高いところへ上って待ちうけていた。

やがてお旅所の広場へご座が敷かれて、緋縮緬の女装をした八人の踊子が入場した。みんな五、六才の童男で、顔にはあでやかな化粧を施し、白足袋の清らかさが目にしみた。三味線と笛、太鼓の音がして、唄がきこえてきたかと思うと稚子踊りがはじまった。何という美しさ、何という可憐さ、何という哀れさであろうか。八人の稚子は花笠をもち桜をかざして、只もう懸命に踊るのであった。緋縮緬の衣装が秋の日に映えて、絵のようであった。

踊りの唄に耳をすましたが、あたりの雑音で詞は聞きとれぬ。ひどく、のびやかな間拍子の中に、どこか仏教的な哀愁調があった。時々観衆の中から「えゝぞっ」「えゝぞっ」と歓声が飛んだ。

衣奈八幡の氏下は旧白崎、衣奈の各字にわたり、各地区にはそれぞれの稚子踊りがあるというが、今年は衣奈浦の花踊りと笠踊り、文踊りの三種だけが奉納された。

私はこれまでも郡内各地の祭礼を、かなり数多く見てきたが、この祭りの踊りほど美しい余興は初めてであった。近年まで交通の不便な地であったためか、あまり世に知られていないのは惜しい。ラジオやテレビが見逃しているも不思議な位である。

すっかり感心した私は二、三人の人に踊りの名称や由来をきいたが、古く京から伝えられたというほか、はかばかしい答えは得られなかった。

家に帰った私は南紀土俗資料をとり出してみた。昼間ききとれなかった子踊りの歌詞が「衣奈八幡宮稚子踊」のところに幾つか出ていた。またその伝来については大正四年（一九一〇年）、小川仲記編纂の白崎村郷土誌に

―就中、囃子踊之儀、往古管弦の形を移して、元和の頃（一六一五～一六二三）より始まり今に百年におよぶ事、祭礼儀式御尋ねの節、上へも啓達する事なり―

と、享保三年八月（一七一九）衣奈八幡神社々主、登美岩卓の記した文書を収載しているのを見出し、その年代をやや判然することができた。

十七曲り峠

「紀州新聞」昭和三十八年十二月一日掲載

日高町柏から由良町阿戸へ越す十七曲り峠に、道祖神があるというので出かけてみた。

道祖神は道陸神（どうろくじん）とも塞（さえ）の神ともいう。中国では古くから「旅を守る神」あるいは「道を守る神」として祀られていたが、天平時代（七二九～七四九年）に遣唐使などによって、わが国に招来されたものと伝える。道を守るというのは村境や峠や道の辻、橋の袂などで外から来る疫神や悪霊をさえぎり防ぐのである。塞の神といわれる所以である。

また一方では我が国にも古代からあった岩石崇拝や性器崇拝の思想が、道祖神信仰と結びつき、やがてその偉大な生殖の威力は農作物の増産豊饒を祈る、呪術的な性格を帯びるにいった。道祖神に陽石（男性器形の石）や陰石（女性器形の石）が用いられたり、男女二神を並べているのはこのためである。中には互いに肩を抱き手を握りあったり接吻したり、もっと露骨な姿態を示したものさえある。

ところがどうした訳かこの愉快な神様は、関東や東北に多いが関西では殆んど見かけない。殊に和歌山県では皆無といってよい。もっとも今から七、八百年も昔にできた日本法華霊験記や今昔物語には、日高郡南部の里の道祖神の物語があ

り、それには「己に朽かけて男形ばかりありて女形なし」、木製の両性器を道祖神として、奉祀していたことがでているのである。

その外にも日高地方の各地には「塞の神」という地名や、性器を御神体としたもの、性信仰の習俗の遺っているものは三、五にとどまらないが、私の躍起の調査にもかかわらず、道祖神らしいものはついぞ発見されずにきた。そんな折から

「十七曲りに道祖神がある」

と聞いたのである。私が躍りあがったのも無理はない。その人はまた

「もう三、四十年も前のことで記憶はあいまいだが、慥かに二神が並立して肩を抱いていたかと思う」

とつけ加えたものだ。

九月二十四日、私は堀勝・山中三郎・高野光勇・小山豊の諸氏と十七曲り峠を訪ねた。おだやかな秋空はカットグラスのように澄んでいた。狭い峠道には秋草がこぼれるばかりに咲き乱れていた。私たちがお地蔵さんにお詣りすると聞いて、峠の近くの婆さんが道案内にきてくれた。つれあいの爺さんがお地蔵さんの信者で、私たちのために婆さんをよこしてくれたのであった。爺さんは北山某という、みるから健康そうな素朴な感じの方であった。

峠へは牢死の哀話を伝える五郎右衛門池の傍から上る。数十年前までは志賀谷の村々と由良の内を結ぶ要路であったのだが、今は殆んど廃道にちかい。五、六町も進むと道の左右から熊笹や雑木がおおいかぶさって、歩行も困難になった。婆さんが鎌をとって伐りひらく後を私達は歩いた。

お地蔵さんは峠を半分ほど上った道の傍にあった。舟形の一石に二体を並べて刻んでいるのだが、素人目にも道祖神でないことは明かであった。台石の正面には「無仏世界・度衆生・今世後世・能引道」と四行に刻み、側面には「安永四年（一七七五年）巳八月」とあった。百八十年ばかり昔、峠を上下する人々の安穏を祈念して造立されたものである。

お地蔵さんには申訳ないが、道祖神とのみ考えてやってきた私はがっかりした。とに角高野氏にカメラにおさめて貰う。新馬場のお地蔵さんというのだとは婆さんの話であった。

私たちは又峠を上った。峠の頂上にもう一つお地蔵さんがあるという。ひょっとするとそれが道祖神かも知れぬという期待があった。道の両側の繁みは益々深くなった。山の中腹を縫うていた細径が、やっと鞍部へ出たと思うと俄に視界がひらけた。

志賀の谷々から日高平野の西南部が一眸の中にあった。黒々とつづく煙樹浜の松林越しに、御坊の港が鈍く光っていた。峠の西は小じんまりした柏の村であった。北の方に由良湾一帯と重山、その向うに白崎や宮崎の鼻が大きく海に突き出していた。風のない日であったが、時々、老松が颯々と松らいの音を立てた。

「これはよい！」

「素ばらしいハイキングコースだな」
皆の口から思わず感嘆がもれた。
無駄口をきいているうちに第二の石仏の前へ出た。先のお地蔵さんよりも一回り大きいが、お姿は全く同じである。向って右が錫杖をもった地蔵菩薩、左は宝瓶をさげた観音様であった。台石には「十万衆生能引導」「文化七年(一八一〇年)四月□日」「上志賀、常右衛門」とあった。傍らに古い石仏の残欠がつまれていた。文化七年四月に常右衛門の発願で、古い石仏ととりかえたのであろう。
地蔵菩薩と観音様を一石に刻んだ取台も一寸めずらしいが、例のないことでもない。強いて考えると地蔵菩薩は男神、観音菩薩は女神で、道祖神の一種とも云えるが少し無理がある。やはり、ありふれた地蔵様でよい。いや、十七曲り峠のこの美しい景観は、もはや私にとって、小うるさい詮議だてをすっかり放擲させた。

白崎の白き姿を見はるかし　十七曲りこの秋の風
見おろせば由良の港の朝びらき　白帆並み立つ夏の青海
山越えて何か哀しき由良に来ぬ　柏の海の青づける日を
波越えを由良の港の入舟の　白帆にかかる松ヶ枝を見る

大正初年ごろでもあろうか、若かりし田端憲之助氏がこの峠で詠んだという数種を、私はそっと口ずさんでみた。

日高の紙

「紀州新聞」昭和三十九年一月一日掲載

御題「紙」から日高地方の手漉き紙を思いだした。
お盆前やお祭り前、正月前の道成寺駅にゆくと、大きな風呂敷包を負うた男女の姿をみかけることがある。藤田町から紙の行商に出る人々である。藤井の手漉き紙がやんで既に久しいが、その伝統はこんなかたちで今ものこっているのである。郡内は勿論、とおく有田方面から西牟婁、東牟婁地方まで足をのばすという。
明治四十四年(一九一一年)ごろにできた藤田村誌によると、安政五年以前(一八五八)から、藤井や島方面で、楮(こうぞ)を原料として塵紙をつくっていたと伝える。その後、同地の塩路源右衛門は、農業のかたわら大塵紙をすいたが、源右衛門の子源兵衛は元治元年(一八六四)ごろから、塵紙よりやや進歩した蝋燭の芯紙をつくった。当時御坊村を中心に蝋燭の製造が盛んであったためである。塵紙と同じように楮を原料としたが、塵をはなれた白紙の漉きはじめであった。
明治二、三年(一八六九～七〇年)ごろ源兵衛のほかに、製紙を業とするものが二、三人できた。土佐紙や伊予紙にくらべて品質はおちるが

柔らかいので、障子紙や日用に使われたが、その産額は微々たるものであった。

時に同村の小池甚一郎は、かねてから村の産業方面に深い関心をよせていたが、この製紙業に注目した。もともと藤井村は木綿絽糸の産地であったが、明治初年（一八六八年）外国綿糸が輸入されるにおよんで俄かに衰えた。製糸業にかわる産業をと苦慮していた折柄であったので、明治九年（一八七六年）二月、村の指導的地位にあった小池甚一郎が本格的に製紙業にのり出した。

かれはまず藤井紙の販路を開拓するため、紙の寸法を土佐半紙型に改良するよう業者によびかけた。ついでに製紙用の張板が従来、粗末な杉材であったのを土佐で使用しているのと同じ五葉松材の張板にきりかえ、百枚ほどつくって業者に貸しつけた。これではじめて土佐型改良半紙が漉き上った。また同村の瀬戸藤右衛門や瀬戸真十郎らも甚一郎に協力して、製紙用具や、原料を村人に貸与したので、製紙業に従うものがようやく多くなった。

明治九年十一月二十日藤井製紙仕込み惣代、小池甚一郎、藤井村副戸長瀬戸真十郎の両名の連署で、藤井半紙を和歌山県庁の用紙に指定されたい旨を、県令、神山郡廉に上申して採択された。よって小池久兵衛、塩路源兵衛は製紙業者代表として前記二名と請書を提出、以後確実に納品をつゞけた。当時の記録によると、このときの製紙業者十一名、半紙百六十九丸、但し一丸は六貫入りとある。

その後、明治十一年には張板を公孫樹に改め、十三年からは楮皮に雁皮を混合して紙質の改良をはかったり、明治十六年には大阪の物産共進会で入賞する等、順当な発展をつゞけつゝあったが、明治二十二年（一八八九年）の水害で一時絶滅の危機に追いこまれた。製紙用具や原料がことごとく流失した上、日高川が濁流となって、肝心の楮や雁皮をさらせなかったのである。そこで塩素や苛性ソーダの使用を考えたが、うまくゆかず、ようやく河水が清澄につれ復活した。

筆者の少年時代藤井を通ると、各戸の表にすえた大釜で盛んに楮を煮たり、川瀬で寒中でも楮を踏みさらしたり、板塀に紙を張りつけた板が何枚も立てかけている光景をみかけ、子供心にも何か詩情を覚えたものだが、昭和二十年（一九四五年）ごろ、すっかり姿を消したようである。

いま試に藤田村誌から製紙家の戸数と産額をひろうと、明治三十三年（一九〇〇年）十八戸・三五八〇締、明治三十八年三十五戸・六千締、明治四十一年六十三戸・一二、五〇〇締とあり、明治四十一年ごろが藤井手漉き紙の最盛期であったことを知るのである。

このほか日高の紙では山地半紙がある。

紀伊続風土記に云う。

山地荘および寒川荘・下甲斐野川にて製す。その質土佐半紙に類す。

記述が簡単でその起源も産額も知るを得ぬが、その歴史は藤井紙より古いのではないかと思われる。これについて「紀伊郷土」昭和十年（一九三四年）七月号に「龍神紙」と題して

竜神村ではあちこちでよく自家用のかみを製造いたします。私の家でも前に紙をすいたことがあります。自家用の紙は大抵数年分を一度に製造しておきます。自分の家ですかずに、材料をもっていって、知合の家でついでにすいてもらう人もあります。

――――――　中略　――――――

竜神でつくる紙の種類は、たて紙・障子紙・傘紙・松煙障子紙などであます。たて紙は袋に張ってお茶や椎茸を入れる極く粗末な紙です、障子紙は草履の鼻緒に巻くこともあるので、草履紙と申します。傘紙は障子紙のやや厚い紙、松煙障子紙は松煙をとる障子にはる紙で、松のすゝがよくつくのだそうです。楮や三つ叉は野原や畑の畔に生えています。年々切取りますが春にはまたその後より新芽が出ます。

とあるのが、やや消息を伝えている。筆者は原すえという女性である。しかしこの山地紙も二、三年前にその製造をやめたという。

―完―

キダイの瀧

「日高新報」昭和三十九年一月二十・二十一日掲載

日高地方公民舘連絡協議会が昨秋刊行した「紀伊・日高民話伝説集」は、刊行後旬日ならずして売切れになった。この集には五百余編の民話と伝説がおさめられ、現代日高地方に伝えられる此の種のものの、殆んどを網羅し得たと自負したが、やはり後になって幾つかの遺漏のあるのに気づいた。

辰年にちなんだ訳でないが、その中から竜神村の伝説を一つ書いてみる。

○

竜神村小森に村人が「キダイの滝」とよんでいる滝がある。小森は温泉のある湯本から、四里ちかくも奥地へ上った所である。紀伊続風土記に

大熊の熊は、こもりの義にして樹林鬱密せしより此の名あり

――――――　中略　――――――

小森も大熊と同じく茂林さううつの義にして

――――――　下略　――――――

とある位だから、いかに深い山里かが想像されよう。「キダイの滝」は小森の山中キダイ谷にあって高さ十米、水は五条に分れて落ち、幽遠きわまりない名バクであるという。

いまから三百年ちかい昔のことである。ながらく打続いた国内の戦争がようやく息んだとはいえ、まだ世間のどこかには荒々しい気風や、殺伐な空気が残っていた。

そのころ湯本村からはなれた殿垣内に、源氏の流れをくむ、殿野佐衛門という男が住んでいた。左衛門の長男善太夫は父の弟青田次郎太夫の娘、青柳とは許婚の間柄であった。しかし子供のときから兄弟同様に育った従兄妹同士の二人は年ごろになっても、いまさら改まって結婚という感情は湧かなかった。

同じころ殿垣内から四町ばかりの所に、平家の末流、長田源左衛門の家があった。源左衛門には梅香という娘があった。山家育ちにはめずらしく、心やさしい美しい娘であった。

喜太夫は毎日、日高川のほとりに出て天の魚や鮎を釣ったが、漁の帰りがけには、きまって源左衛門の舘の表を通った。時折美しい梅香を見かけることもあった。

喜太夫はいつか梅香のやさしい姿にひかれるようになった。

梅香もまた喜太夫の男らしい面影を忘れかねるようになった。

間もなく若い二人は近くの滝のほとりや、谷川ぞいの細径を肩を並べて歩くようになった。喜太夫と梅香の噂はせまい村中の評判になった。

二人の親はきびしく「御先祖からの仇同士の間がらである、すっぱりと思い切れ」と諭したが、愛し合う二人の心は障害にかえって燃え上がった。

「源氏と平家、人間がつくった遠い昔の垣根が何であろう」二人は日高川をはさんで両岸に並んだ村人が「女夫岩」とよんでいる大きな岩の上で「私たちの心は死んでもかわるまいと」かたく誓いあった。

梅香の父源左衛門は娘の一筋の恋心に動かされ、ある日左衛門に話をもちかけたが、一徹な喜太夫の父は「以ての外」と激怒して喜太夫をはげしく責めたてた。

青柳は花も香もなく、梅香には花も香もあり、我は手折らん

その夜多感な若者喜太夫は反抗的な一種をのこして家を出た。

梅香と喜太夫は月の光をふんで谷川ぞいに細径を歩いた。

滝の音がソウソウときこえた。キダイの淵のちかくまで来ていた。古い因習、家と家との遠い昔の確執の犠牲となった二人は、せめて彼の世で添いとげようと、相抱いて深淵に身を投じた。

その後この淵で二人の亡霊をみかけたとか、若い女のすすり泣きを聞いたという評判がたった。

頑固な左衛門をはじめ源平の末流を固執して、いく百年もの間おなじ護摩山の麓にかくれながら、相憎み呪いあった人々も、心から二人の薄幸な生涯をあわれみ、それが機縁となって手を握りあう日がきた。

ある日村人たちは白木の台に、くさぐさの供物をのせ香をたいて、二人が身を投じた淵にうかべて梅香と喜太夫の冥福を祈った。

「キダイの淵」「キダイの瀧」は喜太夫の淵、木台の滝から転訛したものという。

今も二人が悲恋を語りあった「キダイの滝」の水にうたれると、どのような恋も成就し、両岸に分かれている「女夫岩」は、大晦日の丑満時になると不思議にぴたりよりそうて肌を合すと伝える。

またこの岩の下で梅香と喜太夫の化身、一尾二頭の女夫蛇をみたという古老もある。

西川平吉先生追思

「紀州新聞」昭和三十九年三月十五日掲載

私の弟が日高中学校(元日高高等学校の前身)二年生の時ときいたからもはや四十年ちかい昔になる。

いつの時代でも中学生といえば、そろそろ小生意気になる年ごろである。新学期をむかえて間もない或る日、日高中学校二年生のがき大将どもが、休憩時間中の教室にこっそり忍びこみ、教壇いっぱいに桜の花をまきちらして引きあげた。間もなく始業のベルが鳴って教師があらわれたが、この狼藉ぶりを見ると

「誰だ！こんないたずらをしたのは？」

と、頭から湯気をたてんばかりに怒った。おかげで授業は二、三十分おくれた。作戦が図にあたったわけで、腕白どもが内心やんやと歓声をあげたのはいうまでもない。

これに味をしめた坊主どもは、次の時間にも同じ仕掛けをしておいた。やがて教師がきた。生徒の目はある期待をもって、一斉に若い教師の上に注がれた。教師は文字どおりの落花狼藉に一寸おどろいたようであったが、そのうち桜の花の一片二片を静かに拾いあげると

「むくつけき男ばかりの教室に落花粉々、優にやさしき心かな」

と莞爾として授業をはじめた。これには流石の悪童ども一本参ってしゅんとなった。

「やっぱり西川先生は偉いな」

そのころ中学二年生であった私の弟が感激をこめて、こう語ったのがつい昨日、きょうのように思い出される若き日の西川平吉先生の横顔である。

病弱のため中学校一年生、一学期で退学した私は、いわゆる西川先生の教え子ではないが、先生のお名前は早くからおきゝしていた。そのころ先生は元宮通りの、いまの木材協会事務所の家を、寓居にされていたかと思う。お住居の表を通

ると二階に大きな本箱があり、硝子戸越しに分厚い本がぎっしり並んでいるのが見えた。生意気な文学青年であった私は、それがひどく羨しかったことを覚えている。その後わたしは遊蕩無頼な生活をつゞけた。西川先生も広島へ御転任になった。私が先生からいろいろ御指導をうけ、お心やすくしていたゞいたのは、昭和二十四、五年（一九四九～五〇年）ごろ南紀郷土学会ができてからである。

あるとき先生におきゝしたいことがあって、電話でご都合をお伺いすると、夕飯ごろにやって来いとの御返事であった。日高々等学校校長時代で、先生は西館寄宿舎で自炊生活をしておられた。お約束の時間に出かけると、先生は殺風景な寄宿舎の一室で、しずかに徳富蘇峰の近世日本国民史を読んでおられた。

「これで三回読みかえすのだが面白い、何度読んでも飽きぬ」

と語られた。近世日本国民史は私ところにも五十巻を所蔵するが、書架に並べたまゝで殆んど読んではいない。まったく穴があったら入りたかった。

「いっしょに夕飯を食べようと思ってね、親子どんぶりの材料を用意しておいた」

先生はこう云いながら不器用な手つきで七輪の下をばたばたと煽ぎ、葱を刻んだり、お汁をつくった。

わたしが森彦太郎先生伝を出版したのは昭和二十七年（一九五二年）の秋であった。そのころの私は知友が少かったが、西川先生と山中不艸氏が発起して、当時まだ遺っていた高校西舘の一部で出版記念会を開催してくれた。発起人両氏のほかに田端春三氏、森いく子夫人、その他数氏があつまり、うどんを食べながら四方山噺をした。いまから考えると洵につゝましやかな記念会であったが、私としては初めてのことでもあり、このあたゝかいお心づかいは何時までも忘れがたい。

その後も私はむつかしい文字や文章に出くわすごとに、あるときは直接お目にかゝり、あるときは文章で先生を煩わしたか、その度に先生は噛んでふくめるように御指導下さったものである。

私は昨冬、華岡青洲の書を手に入れた。雄勁な文字で「無名天地如」と書してあるのだが「無名天地如」の意味がどう考えてもはっきりしない。またこれは青洲先生の造語なのか、それとも出典があるのか、私は例によって書状で西川先生の教えを乞うた。そしてその御教示をいたゞかぬうちに今度の悲報であった。もはや「無名天地如」もはや先生から御教示をいただく機会は永久にない。あゝ。

追記＝最終の父の西川先生宛の軸の質問には先生もさど驚いたことだろう。

所蔵の軸を確かめると「無名天地如」とある。

「無名天地如」ではなく「無名天地之始」であり、

先生もさぞ迷惑な便りだったことと思う。

遠縁日展連続入選書道家が、老子・第一章が出典であると後日連絡

を戴いた

浜田野花

「紀州新聞」昭和三十九年四月十五日掲載

三、四年前に物故した郷土研究家、和田喜久男氏に「和田村小字考」と題する著述がある。題名どおり和田の小字名を中心に、村の歴史と民俗、地理を考察した興味深いものである。最近、和田地区の有志の間でこれを出版すべく、よりより協議中であるときいたが、是非実現してもらいたい。

由来、和田の地には一種文化的伝統がある。明治四十年代から昭和二十二、三年ごろまで、日高地方唯一の私学、常磐義塾があったのも和田なら、塾長湯川浄暢師を総師として「日高名勝記」―明治四十一年五月十日発行―の著者、紫星・木村敏之助や前記、和田喜久男(花醒)の諸氏が集まり、明治末年、文学グループを作っていたのも和田である。ここに語ろうとする浜田峰太郎もまたこのグループの有力メンバーの一人であり、和田の人であった。

浜田野花の履歴については未詳の点が多いが、明治四十二年十月二十八日から同四十四年八月三十一日まで和田小学校に代用教員として奉職したことが同校沿革史に見える。浜田は元来文学青年で、日高郡誌―文教誌に次の記事がある。

田舎公論＝日高時事廃刊して紀北新聞未だ現れざるのとき、浜田峰太郎、野花は日高時事の復活を標榜して起ち、新聞紙法により本紙を発行せしが、経営困難のため忽ちにして廃刊せり、これより先、浜田は明治四十二年五月五日文芸雑誌黒潮第一号を発行したるが、その紙上小説「肉」を掲載したるため発売禁止の命に遭い、その後号を重ねるにいたらずして止みしことあり。

明治四十二年といえば田山花袋が小説「蒲団」を発表した二年の後で、わが国の文学界は自然主義が主流をなしていた時期である。早熟な文学青年であった野花は、この影響をつよくうけたに相違ない。小説「肉」が発売禁止処分をうけたのは、文中に「二人は肉の関係が云々……」とあったためときいている。今なら何でもないことである。

その後、野花は新聞記者になったり「さゞえ」の罐詰工場を経営したが長続きせず、大阪に出て間もなく上海に渡った。浜田の渡支の年代も今のところ判然とせぬが、彼の地では上海日報の記者となり後、独立して浜田支那問題研究所をつくり、日支事変前後には軍部とも特殊な関係をもつに至った。かって日高町小池出身の寺井久信氏が日本郵船上海支店長となったとき、遇然浜田と邂逅して、上海通の浜田は寺井のためにつくすところがあった。

いま私の手もとに浜田峰太郎著「中国最近金融史」B六判・四百九十頁・昭和十一年三月十六日・東洋経済新報発行、および「支那資本機構」A五判・三百五十三頁・昭和十二年二月十五日・叢文閣発行の二冊がある。経済のことは私には

全くわからない。おそらくこの二著も永久に頁をくる日はあるまい。ただ郷土の先輩の著書をなつかしむあまり、古書店で見出したのである。野花にはこのほか「転換期支那の全貌」昭和八年七月・ブロック経済研究所発行、「現代支那の政治機構とその構成文子」昭和十一年八月・学芸舎発行、「支那経済の現勢および動向」昭和十一年八月・上海出版社発行等の諸著がある。それにしても往年の文学青年としては、これは又ひどい変貌である。

野花はどちらかといえば小柄な人であった。大変な愛煙家で一本の煙草を吸いきらぬうちに、もう次の一本がつけられていたときいている。彼の令兄や未亡人や、その遺児は今も元気でいる。私はかって彼の畧伝を知るべく関係者を歴訪したことがあるが、そのときのノートを見うしなった。したがって彼の生年も歿年も今のところ不明である。

ばら

「紀州新聞」昭和三十九年五月十五日掲載

日高短歌会・二十日句会、御坊文化団体連絡協議会が合同して五月十日、海草郡野上町動木、野上電鉄社長野上草夫氏邸で「ばら」の鑑賞歌会や句会をすると案内をうけた。

考えてみると私は用もないくせに、方々をうろつきまわっているが、野上方面へはまだ行っていない。それに絶好の行楽季節でもある。仕事に追われて、しばらく疎遠になっている友人たちにも、久しぶりに逢える楽しみもあった。だかあいにくなことに当日は早くから先約があって、とうとうせっかくの機会を逸した。

正直な話、私はもともと「ばら」の花はあまり好きではない。好きでないというよりも肌が合わぬと表現した方が適当かも知れぬ。物の本によると

「ばら」はばら科に属し、もとはヨーロッパ・コーカサス、東洋では中国が原産で、ローマ時代から栽培されたが、わが国では古く源氏物語や枕草子に、薔薇(そうび)という言葉がみえる。東洋種のものが当時すでに渡来して、鑑賞されていたらしい。西洋種のものがわが国に輸入されたのは徳川時代である。現代、世界における「ばら」の種類は約三千種で「ばら協会」は世界いたるところにあり、英国の国花でもある。

とある。

昔から美しい花の代表に牡丹・芍薬をあげ、美人を形容して「立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合の花」ともいうが、牡丹花の雄大華美・芍薬の清艶・白百合や笹百合の可憐さにくらべても「ばら」の高貴な花姿は、優とも決して劣るものではないことは私も異論はない。だがあまりにも美しすぎる。高貴すぎるのである。田舎者の私はそこに何とはなしに、いわれのない反発を感じるのである。

私の尊敬してやまぬ薗悌次郎医伯は、大の「ばら」党で季節になると、きまって

「ばらが咲いたから、いらっしゃい」

と電話をくれる。私は日ざしの明るい薗氏の庭を、医伯の説明をききながら、きょろきょろついてまわり、流石に美しいものだと感嘆し、くんくんと犬のように鼻をならして花の芳香を嗅いでは、その丹精を思うのである。

実際「ばら」つくりの苦心は、並大抵のものではないらしい。これは菊つくりでも同じことで、土をえらび・肥料を施し・芽をつみ・害虫を除き、とうてい私どものような無精者ではできる業ではないのである。

「ああ、いいよ、なにもそうしてまで咲いてもらわなくても」

私には「ばら」つくりの経験はないが、かりに一鉢をまかされたとしたら、きっと、こんな風に途中で癇癪を起こすに違いない。私にはやはり、そんな高貴な名花よりも、埃っぽい田舎道や、日高河原にむんむんとむせかえるような匂を、あたり一ぱいにまきちらして咲いている野茨の方が好きである。好きというのがおかしければ、性にあうと訂正してもよい。

野茨の花は、いくら咲いても見てくれるものはない。それどころでない、うっかり近づこうものなら鋭い刺で誰彼の見さかいもなく突き刺すのである。いわば山野のゴロツキなので、人にうとまれ憎まれて、焼かれたり刈られたりするのだが、性こりもなく芽を出しては花を咲かせる。その生活力のたくましさには全く驚くべきものがある。花を観賞する。そんなしゃれたことは初めから問題にもせず、群りによる草原の不良児の蜂どもに、惜しみもなく花蜜をあたえて悔いぬのである。

くれないの二尺のびたるばらの芽の　針やはらかに春雨の降る

近代短歌に新しい息吹を吹きこんだ病歌人正岡子規が病床についた二年目の、明治三十三年（一九〇〇年）「庭前即景」と題する十首連作中の一首である。この歌に詠まれた子規庵の「ばら」は、どうやら、野茨ではないが、ありふれた、やくざな「ばら」にすぎなかったようである。そういえば数年前嫁いだ私の娘が、まだ高等学校の生徒であったころ、どこからもらって来た三株ばかりの「ばら」が、さんさんと降り注ぐ五月の太陽の下で、子規の歌のように二尺ばかりも芽をのばしている。

続・日高郡誌

「紀州新聞」昭和三十九年六月十四日掲載

さきに「各地の祭りをたずねて」や「日高民謡集」・「紀州日高民話伝説集」を刊行して好評を博した日高地方公民館連絡協議会（会長・要海正夫氏）は、今回かねて計画中であった「続・日高郡誌」の編集にふみ切り、さる六月六日第一回の

編集委員会を開催した。

この日午後一時、日高地方事務所小会議室に協議会からは要海正夫会長と東公事務局長、編集者側からは顧問の芝口常楠先生をはじめ尾浦浩巳（美浜町・御坊商工高等学校教諭）・谷口恒一（日高町・印南中学校教諭）・清水静志（御坊市・日高高校教諭）・山本賢（南部町・南部中学校教諭）・小谷緑草（印南町・印南郵便局長代理）・清水長一郎（川辺町）の各編集委員が集まり、大綱を次のように決めた。

一、名称は続日高郡誌とする。

二、収録記事は日高郡誌が刊行された大正十二年（一九二三年）から、編集完了の日までとする。

三、記事の分類は日高郡誌を踏襲する。

四、編集終了の時期は昭和四十五年（一九七〇年）とする。

五、出版刊行は編集終了後、郡市町村と協議の上の事とする。

六、各委員の分担や編集の具体的方針は、各委員で腹案を作製、八月中に第二回編集委員会を開催して決定する。

多少の記憶ちがいがあるかも知れぬが、以上の如く話し合って散会した。

さて一口に「続・日高郡誌」と云うが、考えてみれは、これは大仕事である。一例をあぐれば先ず郡制の廃止がある。町村合併がある。昭和五年（一九三〇年）の小作争議がある。その他に紀勢鉄道の開通、国道四十二号線、七・一八水害、台風、第二次世界戦争、戦後の社会思想と経済の混乱、農業の機械化、新制教育等々。もっとも変化の少ないと思われる宗教界にさえ創価学会の進出があり、光源寺・滝法寺・尊光寺の焼失がある。まったく郡誌刊行後四十余年間に日高地方も大きく変わったものである。これをどう捉えどう整理するか。単なる資料の羅列であっては誰も読む人はあるまい。飽くまで正確にして、然も興味を失ってはなるまい。けだしこれは容易な業ではない。幸いに委員各氏は少壮気鋭の研究家である。私は各氏のき尾に附して所期の目的を達成したいと考えている。しかし六人や七人の委員がいくら一生懸命になってもその力は知れたものである。どうしても多くの人々の御理解と御協力が必要である。この機会に郡市民各位の御援助をお願いする次第である。

六日の初委員会の席上であった。誰かが「この仕事がすんだら、僕は、ちょうど四十になる」と笑った。まったく七年という歳月は長いようでもあるが短い。うっかりすると瞬く間に過ぎてしまう。油断はできない。

自分のことを持ち出して恐縮であるが、昭和二十九年（一九五四年）「矢田村誌」の編纂にとりかかった時、当時まだ御健在であった田辺市の郷土史家・雑賀貞次郎先生の御助言を頂きに伺った。先生は市町村誌の白眉とも云うべき「田辺町誌」・「田辺市誌」をはじめ「牟婁国碑集」・「南紀雑考」・「南紀熊野の説話」その他いくつかの好著を残された篤学者であるが

「まず一切の余技を放棄して、精力を村誌一本に集中することだね」

とお諭しになった。しかし気の多い私はその間にも、あれこれと下らぬ事にかかずらったものである。今度こそはその轍をふむまい。そしてそれにつけて思い出されるのは、森彦太郎先生の「日高郡誌」編著の御苦労である。

先生が明治四十三年（一九一〇年）暮、時の郡役所から日高郡誌の編纂を依嘱された時は、まだ二十三才の青年教師であった。爾来大正十二年（一九二三年）一月十日、これが公刊の日まで実に十三年の歳月を閲しているのである。この間資料の蒐集には他からの援助もあったのだが、その殆んどは先生の努力によったものであった。堂々一千七百頁、一見しただけでも充分の威圧を感じる。その内容にいたっては断然類書をぬきんじる。しかもそれが白面の一青年教員、森彦太郎氏の努力によるものである。まったく讃嘆の言葉もない。

顧み私達の学力や精力は森先生のそれに比較するさえ不遜のそしりを免れない。だが何とか委員一同が協力の上、不朽の名著「日高郡誌」の名を汚さぬ続編を完成したいものである。

「紀州新聞」昭和三十九年七月十五日掲載

石

六月二十一日、長男と二人で千里の浜に遊んだ。千里の浜は国鉄南部駅から西に約四粁、岩代駅から東へ二粁ばかりに位置する景勝の地である。

千里は土地では「せんり」というが、平安時代から「ちさと」または「ちひろ」の名で知られた歌枕の地である。「せんり」も「ちひろ」も共に、浜の広さを表したものに違いあるまいが、ここに古くから熊野九十九王子社と、その奥の院と伝える千里観音がある。私がこの浜を訪ねたのは外でもない、実はこの浜辺から出る石を捜すためであった。

貝の研究家として聞こえていた故神田耕一郎氏が、まだお元気であった頃だから、かれこれ七、八年も前になる。南紀郷土学会の人々とこの地に遊んだ際、一行中の一人がおもしろい石を拾ったことがある。ちょうど大きさも形も大人の枕よりやや小さく、石の白い地肌の中にもう一つ、ぽつんぽつんと別の石が幾つかまじりこんでいるのが美しかった。

先輩の野田三郎氏に従うと、これは礫石といい、泥土の中の小石が泥土とともに、何十、何百万年もの久しい間強い圧力をうけてできたもので、この辺り一帯に多く産するということであった。地質専攻家にとってはさして珍しいものではなかろうが、私はこれまでついぞ見たことはなかった。第一ながい間千里浜の波にもまれた結果、石は自然な丸みを帯び大きさも手ごろであるし、ひどく羨ましく思ったものである。

その後私の頭のどこかに絶えず、千里浜の礫岩があった。折があったらもう一度石をさがしに行きたいと考えていた。

六月十二日わたしはたまたま巽三郎医伯の書斎で、千里浜産の礫岩をみた。掌にのる程の可愛ゆい小石であるが、医伯

が根気よく磨きあげた為、母岩の中の小石が一際あざやかに、さまざまな色を見せていた。手にとると石の裏に小さな文字で「千里浜のさざれ石」と記してあった。

平安朝の有名な和歌物語「伊勢物語」第七十八話にこんな話がある。

昔多賀幾子という女御の七七日の供養を安祥寺でつとめた。右大将藤原常行はその仏事の帰りに、山科に住む禅師の親王を訪ねた。禅師は造園趣味があって家の庭に池をつくり山を築き樹木を植えてたのしんでいた。禅師は常行の来訪をよろこんで、いろいろと常行をもてなした。そこで常行も禅師の厚遇に応えて、昔紀の国千里の浜から献じられた、おもしろい石を思い出し、供の者に命じて取りよせた。この石はかねがね聞いていた以上に立派な石であったので、そのまま贈るのも風情のないことと考え、人々に歌をよませることにした。常行はこの石に青い苔をつけた上、

あかねども岩にぞかふる色見えぬ　心を見せむよしのなければ

とよんでさしあげた。

原文では「紀国千里の浜にありけるいとおもしろき石奉れりき……」とある。今から千年ばかりも昔の事で、わが国の文献にでた尤も古い石かも知れぬ。

常行が山科の禅師に献じた石はその後転々として今、広島県安佐郡可部町福王寺の宝物となり、「さざれ石」とよばれている。

由来、紀州の地は古谷石・瓜谷石をはじめ那智石・玉の浦石等名石の産地である。いま福王寺に伝わる「さざれ石」が、はたして千里浜産の礫石なのか、それとも千里浜にちかい瓜谷石なのか、一見しない上は誰にも明言はできない。近刊の野口利太郎・大石探石著「京の石・紀州の石」も、この点言葉を濁しているようであるが、巽医伯の所蔵の石に「さざれ石」と書きつけているのは、こんな理由からであろう。

さて私は長男と二人で、広い千里浜のあちこちを、石を求めてさんざん歩きまわった。

「こんな石ならいくらでもある」

巽医伯の言葉にもかかわらず、石はなかなか見つからなかった。やっと探し出したかと思うと形が悪かったり、無闇に大きすぎた。しかしここまで来て空手で帰る訳にもゆかぬ。ようやくのことで一個を得た。

私は用意の風呂敷に大人の頭ほどもある重い石を包み、線路伝いに岩代駅に出た。その石はいま塩分を抜くために、庭において雨にさらしている。それにしてもやくざな石ころを求めて、わざわざ南部くんざりまで行くなどは、何とも間のぬけた話という外はないが、気どった愛石趣味は別として、石をみるのはなかなか楽しいものである。読みさしの本やら書き損いの原稿用紙を取ちらして、手のおき所もない私の机上には、昭和三十四年九月中井千代松氏から貰った御坊市名〔一九五九年〕

田町楠井海岸採集のアモン貝？の化石、野田三郎氏恵贈の田辺市文里産の巻貝と二枚貝の化石、高野光勇氏がくれた川辺町和佐權次穴産の水銀鉱石があって、ともすれば面倒な世の中に癇癖をおこしそうな私を慰めるのである。

貰い風呂

「紀州新聞」昭和三十九年八月十五日掲載

世の中が進んだ近ごろでは、もう余程の山村へでも行かねば見られないだろうが、私の子供のころは、どこの村でも貰い風呂が行なわれた。

気のあった隣近所の二、三軒が組になって、持ち回りで風呂をたてるのである。夕方になると当番の家から、「もう風呂が沸きました」と知らせてくる。「おおきに」と返事をしておいて、夕飯後、提灯を片手に出かけるのである。当番の家には外の人もきているから、先客が風呂からあがるまで座敷に寝そべって、世間噺に花を咲かして待っている。無論ラジオもテレビもない時代だから、ナイター放送など気狂いじみたものはない。静かなものである。

「お先に」そのうち順番が来ると、座敷に着物をぬいで風呂場まで裸のまま小走りにいそぐ。何十年も昔の田舎の事で、風呂場には脱衣場のような気のきいた設備があろう筈はない、流し場に青竹の一本も渡してあればよい方で、男ならそれへ褌をかけるし、女は腰巻きをかけたものである。タイル張りの浴場はまだなかった。どこの家も大きな五右衛門風呂であった。

そのころ私の家が貰い風呂をしていたのは、日高川奥の山村から出稼ぎにきて、そのまま村に住みついたという大工の一家と、もとは造り酒屋であったが、よい身上を呑みつぶして、かっては白崎の糸谷遊廓で嬌名をはせたという女性をひき入れて、二人でひっそり暮らしている老夫婦の一家であった。

老人は＝実際子供の私にはひどく年寄りに見えたが、今から考えるとまだ六十前であった勘定になるが、とにかくその老人は、少し早めに行くと風呂上がりの顔を光らせながら、暗い電灯の下で、若いころはさぞ美人であったと思われる老妻を相手に、ゆっくり晩酌をたのしんでいるのが定まりであった。

二人の間には子供はなく、何時も一匹の猫を飼っていた。もともと老人には三人の子があったのだが、成人して次々と亡ない、本妻にも先立たれた暗い過去があったのだが、そんな不幸の影も、色街からかなりの犠牲をはらって、今の老妻をひかしてきたという情熱のあとも、すっかり昇華されたのか何処にもみえず、まるで悟り澄ました禅僧のような飄逸な面影があった。

冬の寒い夜、五右衛門風呂の中ですっぽり温まっていると、老人は雪駄を鳴らしながらよく湯加減をききにきては焚い

てくれた。今から考えると、衛生的に余り感心のできない貰い風呂が、そのころの農村では当り前のように行なわれたのは、一口に云えば経済の貧しさが原因である。つまり燃料と労力の節約のためであった。その癖少しぬるいといえば、何でもかんでもおし気なく、どんどん燃やしたものである。

私は老人に風呂の下を燃やして貰っては、湯の中でぼんやりしている。麦秋から秋口へかけては農村では小麦藁を用いる家がおおい。小麦藁が燃えてはじける音がパチパチと景気よく聞こえる。設備の悪い焚き口から上がる煙が、もうもうと風呂場の中に立ちこめ、時には煙が灰が頭の上へ降ってくる。いま時こんな非衛生的な風呂場はどこにもあるまいが、思い出となっては懐かしい。

風呂をでたものは、また火鉢を囲んで世間噺をつづける。夏の夜は座敷の火鉢が門の涼み台に移る。扇風機も蚊取線香もまだ普及していなかった。大きな渋団扇でバタバタ煽いで涼をとり、もろんどの木をいぶしては蚊遣火とした。風の具合でどうかすると風遣火の煙が人々の方を襲う。目にしみて涙が出そうになる。まったく原始的な防虫方法であるが、今でももろんどの木の芳香が忘れられない。そのころの風呂仲間はもう殆んど故人になった。さきに書いた大工の家には男の子が一人いた。私より二つの年下で毎年のように川や山で遊んだものだが、彼が小学校二、三年生の冬のある日、彼の一家は不意に夜逃げをしたまま逢っていない。何でも東京近在の川崎市にいると聞いている。健全なればもう五十三、四の筈である。

その外にこれは風呂仲間ではないが、よくこのグループへ世間噺にきた、何とか常之丞いう、まるで剣客のようないかめしい名前の老人もあった。ひどい酒好きでそのためか生涯所帯を持たす、村の地主の家で生涯独身のまま下男奉公をしていた。この老人にうっかり女の話など持ち出そうものなら、老人は言下に「しょっこい」と横をむいた。「しょっこい」は「塩っぽい」の方言であるが、老人の云う「しょっこい」には「塩っぽい」の外にもう一つ、「しつい」或は「しつこい」と云う意味があったように思う。よくよくの女嫌いであったらしい。

お盆がきたせいか日ごろ忘れていた昔の貰い風呂仲間のことを思い出した。だが世の中がこう窮くつになっては、もはやこうしたのんびりした人々は容易に現れまい。

「紀州新聞」昭和三十九年九月十五日掲載

三重塔奇談

道成寺の三重の塔は宝暦十四年(一七六四)に再建されものである。仏教文化の盛んであった紀州でも三重の塔は長田観音と道成寺にみる位で、再建にあたって建築技術の点や資金面の苦労は一方でなく、完成まで前後十年を費やしたと伝え

る。

塔の再建上もっとも大切なのは云うまでもなく中心柱であるが、日高中をさがし回ったが容易に見つからず、やっと真妻高串村、妙見社境内の桧を得てこれに充てた。そこで道成寺ではその御礼として妙見社の社殿を造営寄進した文書が先年発見された。

日高郡切目河高串村妙見尊星の神祠道成寺より改造の縁由は当山再興の塔今年興立し畢ぬ此時にのぞみ良木の桧木諸方を尋ね伺(うかがう)ところに適々当社境内に有て枝葉式内を覆ひ誠に多歳を経るの古木と見えて尋る処の良木に応答せり此故に当社の神主に是を懇望すといえども神の冥助計り難きよしを述べて二度の神饌を定め冥慮を伺ひ奉る所に両度まで施入の神慮下りければ尊星の冥助を疑ひなく信じ急ぎ根取し是を再建の用材にくわえて事終えぬ爰に当社尊神は幾ももとせの昔より御舎垣を此木の下に敷立て鎮座し給うとなん時に宝暦十三癸未(一七六三年)の年神(み)籤に託し彼の一ト木を塔再興の一助に喜捨し給う和光の恵いとたうとく感心し奉るに猶余あり新に神殿を造営せしめて冥助の恩賜を謝し奉るものなり

宝暦十三癸未十一月吉祥日　　道成寺執事

この文書は旧著矢田村誌にものせておいたが、面白い資料なので再録してみた。

さて、この三重の塔を再建した棟梁は私の地方では小熊村の山本藤六と伝えるが、別に御坊・原藤兵衛との記録もあり判然しない。ひょっとすると塔の中心柱にでも書いてはいないかと巽三郎氏と調べたことがある。

二人は小野広海師につれられて、暗い塔内に入って驚いた。外部があのように美しく細かに飾られているのに較べて、二重目以上の内部は、無数の荒々しい角材が前後左右、縦横にがっちり組合されている。塔を「ねぐら」にする鳩や雀の糞が夥しく積んでいる。所々に蛇の抜け殻がかかっている。余り気味がよくない。その中を高串村妙見社から施入した桧の心柱が、まっすぐ通っている。なお注意すると心柱は地盤に固定せず、二層目あたりから太い鉄鎖で吊り下げている。古建築にうとい私は、塔の心柱はしっかりと心礎に固定したものとのみ考えていただけに意外であった。後にいろんなものをみると、もともと塔の心柱は、地中へ埋めたり、心礎へ固定したが近世になって上から吊すようになったものという。

ところで私達は細かく心柱や塔の内部をみたが、塔再建の棟梁の名はどこにもなかった。せまい急な梯子を伝って三重目へ出た。名前はそこにも見当たらぬ。そこから上はもう塔の屋根である。屋根裏の一部が引窓になって、屋上へ出るようになっている。

「屋根へ出てみませんか。露盤に何か書いていますよ」

広海師にそそのかされて路盤の文字をみる気になった。梁に足をかけると割合楽に半身が出た。

にわかに眼界が明るくひらけた。境内の老松の向うに日高平野が見渡され、その尽きるところに紀州灘が蒼く光っていた。

「どうです。読めますか」

下の方で小野師の声がした。気がついて境内に目を移すと庭の石灯籠が小さくみえた。その筈である。塔は総高二十二㍍もある。足ががたがたふるえてきた。冷汗が滲んだ。もう屋上へ出るどころではない。青くなって引窓の框にしがみついた。もう十年ほど前のことである。

集書余談

「紀州新聞」昭和三十九年十月十三日掲載

ちょうど一月ほど前になる。私は勤め先から十日ばかり大阪へ出張した。ここ数年来、三日と家をあけた覚えのない私には珍しいことであった。仕事は朝九時ごろから午後五時までで終わる。映画もパチンコもナイターにも興味がない上、盛り場を飲み歩くには財布が軽かった私は、仕事から解放されると真っすぐ宿へ帰り、新聞をみたり、本を読んだり、寝転んですごした。

土曜日の午後、久しぶりで道頓堀から千日前へ出た。ここには戦前から馴染みの古本屋がある。本屋のおやじとしばらく話こんだ私は、千日前から上六行きの市電に乗った。近鉄上六駅の近くに同郷の柳道成画伯がいる。画伯にあって彼の師であった湯川松堂のことをきくつもりであった。

松堂は印南町印南出身の日本画家で、明治末年から昭和の初めにかけて、一時浪華画壇で盛名をうたわれた。今も印南町東光寺の薬師堂には、彼が少年の頃奉納した絵馬がのこっている。私の手もとには松堂に関する資料の概略は集まったが、猶その人為など晩年の弟子であった柳画伯から、直にきき出したかったのである。

九月とはいえ昼下がりの残暑がきびしかった。電車は空いていたが汗がひとりでに滲んだ。私は十数年前にも画伯を一、二度訪ねている。何でも上六の交差点を東に渡って。路地を二つ三つ曲がった所であった。所番地は控えてきたが地図を忘れたため家をさがすのに一苦労せずばなるまいと考えると、急に彼を訪ねるのが面倒になった。どうしたものかと、ぼんやり窓から町並みを眺めているうちに、古本屋の看板が目についた。

「おや、古本屋がある」私は次の停留所で電車を降りた。

汚い店であった。文学書も美術書も歴史関係の本も雑然と並べてあった。戦時中の粗本もまじっていた。しかしこんな本屋が却っておもしろい。思わぬ収穫があるものだ。私は書棚を、次々とゆっくり見て回った。実は私はここ数年来、日

高人、あるいは日高出身者の著書を集めようと心がけてきた。だが、中々意のように渉らないのである。

一体日高人、または日高出身者の著書はどの位あるのか。確かなことは私にも分からないが、およそ数百冊と見当をつけている。このうち最も量の多いのは何と云っても、美山村寒川出身の作家沖野岩三郎で、小説・童話・随筆・通俗史書など長短百十数冊を数える。次が昨年文化学博士の学位を得た、日高町柏出身の社会学者、井上吉次郎の三十数冊。かわったところでは御坊市藤田町藤井出身の宮崎三郎医学博士の「蛙を教材とした人体解剖？」・「薬の功罪」等がある。

ひと昔まえ、中途半端な文学青年であった私が、沖野岩三郎の小説や津村秀松博士の随筆集をさがすのは、まだしも話がわかるが、宮崎博士の「薬の功罪」や寺井久信著「船荷証券論」に目の色をかえるに至っては、我ながらおかしくもあるが、これには訳がある。

いつであったか美山村寒川に遊んだ際、私は村の小、中学校や公民館に、沖野岩三郎の著書が一冊もないときいた。なるほど公平にみて沖野岩三郎の大正～昭和文学上における足跡は、そう大きなものとは云えまい。だが、それならばこそ、せめて出身地ぐらいにはその著書を揃えておきたい。それが私どもの先人に対する礼儀ではなかろうか。しかし、これは独り寒川だけの話ではない。日高町の公民館や小、中学校に湯川玄洋博士の諸著や玉置韜晃（とうこう）師の著書が、どれだけあるだろうか。美浜町に芦津実全師の「皇朝天台史」や「禅学向上録」・「津梁録」が揃っているだろうか。思えば心細いものである。

「よし、それなら私が集めてみよう」

妙なところへ力瘤を入れる気になったのである。

さて私の眼は、乱雑な古本屋の棚を、一段ずつ舐めるようにみてゆくうちに「観るもの・井上吉次郎著」という、うす汚れた一冊をみ出した。奥書には「昭和十五年（一九四〇年）十月十二日・大阪市東区備後町五丁目二五番地・文友堂書店発行」とある。ちょうど第二次戦争のはじまる前年で、そろ〳〵物資が不自由になり出した頃の発行である。紙質も粗末である。だが、私にはドブの中から金貨を拾い出したよりもうれしいことであった。

「これ、貰うよ」

私は店番のお上さんに、勢いよく声をかけた。

大仏さん

「紀州新聞」昭和三十九年十一月十五日掲載

ここ数年来、十月も半ばをすぎるとその年の文化勲章の受章者をあれこれと予想するのが、私のひそかな楽しみの一つ

となった。
　今年は作家では大仏さんが、その栄誉をうけられた。後になっていうのはおかしいが、ひょっとすると、こんなことになりそうな予感がした。本来ならばもっと早く受賞すべき人である。大衆作家というので少し損をしていたような気がする。
　も早四十年ちかい昔になる。私の周囲に鈴木一雄という文学青年がいた。青年の父は日高町小浦の出身で、苦学の末、当時外国航路の船長であった。ひょろりと背ばかり高い青年であった。私はこの青年から初めて大仏さんの「鞍馬天狗」を借りた。博文舘から出たB-6判の、かなり厚い本であったが、とりつかれたように一晩で読み終わった。
　「怨敵（おんてき）・勇・同士の仇！」
　花吹雪の散る京洛の巷で覆面の快剣士、鞍馬天狗が、勤王浪士の敵・新撰組隊長近藤勇と切り結ぶシーンや、「八丁つぶての某」と名のる女賊が、得意の礫を投げていく度か志士たちの窮地を助けるところに、文字どおり少年の血を沸かし肉を躍らせたのが、つい昨日、今日のように思い出される。
　その後私は今テレビで人気を集めている「赤穂浪士」に夢中になった。「霧笛」・「ふらんす人形」・「ドレフュース事件」・「雪崩」にも感動した。戦後は「帰郷」や「宗方姉妹」・「旅路」が、小説好きの私をよろこばせた。思えば私も大仏さんの長い読者である。
　古い文学評論家の杉山平助は曽って大仏さんを「飛び切り上等の鰹節のような作家である。どこを削っても豊かな味が、こんこんと滲んでくる」言葉はちがっているが、こんな意味の形容をしたことがある。実際、私が知ってからでも四十年近い作家生活の中で発表された夥しい作品のどの一つにも、苦渋のあとらしいものは殆んど見かけない。しかもその作品に登場する人物は、例えば「赤穂浪士」の怪盗・蜘蛛の陣十郎にしても剣士・千坂兵部にしても、呑ん兵衛の堀部安兵衛さえも、一度、大仏さんの筆にかかると、近代的憂愁をおびたインテリめいた人物に見えるのが面白い。ここに大仏さんの衰えぬ人気と、広汎な読者を持つ所以がある。作者のゆたかな天分、並々ならぬ教養は云うまでもないが、よほど頭のよい人に違いない。
　さて私はこの文章で文化勲章受章者、芸術院会員・大仏次郎氏のことを「大仏さん、大仏さん」と、丸で友人扱いにする非人礼を冒してきたが、くりかえして云うように面識こそないが、私は「鞍馬天狗」以来の大仏さんの古い読者である上、大仏氏の厳父が誰でも知っているように、御坊市藤田町藤井の人で、云わば大仏さんは日高第二世と云うことであってみれば、いまさら他人行儀に大仏次郎先生とは云う気がしないのである。
　大仏次郎、本名・野尻清彦、六十九才。横浜市で生まれ横浜市で育ったが、その父は御坊市藤田町藤井の出身である。現在、藤井の野尻姓は数軒ある。もともと野尻氏の祖はその昔、道成寺創建の際、都から派遣された大工が土着したとの

里伝がある位で、藤田町では古い家柄である。
　大仏次郎氏の祖父は野尻源兵衛と称した。源兵衛に政助・半助・豊松・彦兵衛の四子があり、大仏次郎の父政助はその長男である。元来、野尻の家計には秀才型の人物が多い。私は政助氏の四弟、彦兵衛氏の晩年をほんやり記憶しているが、この人は長く藤田町役場の書記兼小使を勤めた。当時の藤田村長は日高地方の最後の国学者ともいうべき、松翠・小池徳太郎であったが、小池村長も村治事務の上では、しばしば彦兵衛書記に質疑したと伝える。
　そうした家系の一員である政助は年少すでに向学の風があり、若山の碩学・倉田績の倉田塾に学んだ。野尻氏は旧家とはいえ富裕ではなかった。三弟・豊松は伝来の田地を売り、長兄・政助の学資を送った。
　政助はその後、日本郵船株式会社に入社して、サラリーマンコースを順調に進み、横浜支店長を最後にやめた。頭もよかったが社交にも長じていたという。政助に三男あり、野尻政英、孝、清彦の順になる。やはり家系は争えない。長男政英は野尻抱影の名で有名な星の研究家。孝は聞き忘れたが某大学の教授であったし、三男清彦が大仏次郎である。秀才三兄弟である。
　大仏さんはこれまで二回、日高の地を訪ねている。第一回は終戦後間もない昭和二十二年（一九四七年）ごろで、この時は道成寺に詣で、旅舘・花屋に一泊した。まだ県会議員の小池丑之助氏が生存のころで、小池氏からの連絡で野尻家の当主・野尻知三郎氏が旅舘に出向いて歓談した。
　次が昭和二十七年で当時大阪朝日新聞にに連載中の小説「旅路」の一シーンに日の御崎をとり入れて貰うべく、地もとの観光関係者が招待したものと聞いている。この時、大仏さんは煙樹浜から日の御崎に遊んだ。案内者の一人であった山中のぼる君などにも、煙樹浜で簡単に物をきいた。地もとの要望に応えて小説「旅路」の終りの方に、煙樹浜や三尾が出てくる。短い時間の間に、よくあれだけ覚えていたものだと、後で関係者が感心しているのをきいたことかある。恐ろしく記憶力の強い人だろうという。
　大仏さんが文壇でも有数の蔵書家であることや、大変な愛猫家である話は余りにも有名だが、ある時、藤井の野尻家当主・知三郎氏の息子さんが大学に進みたいという。ちょうど七・一八水害直後で知三郎氏としてはそれどころではなかった。思いあまって鎌倉の大仏さんを訪ねた。大仏さんは静かに知三郎氏の話をきくと、傍らの息子さんに、
「勉強をしたいかね」
と訊ねた。若い息子は
「ハイ。したいです」
と元気に答えた。大仏さんは微笑しながら、
「しかしね、勉強というものは大変なものだよ」

と、息子を書庫に誘った。そこには洋書をはじめ和漢書が、それこそ万巻の書がギッシリ詰まっていた。
「うーん」
若者は唸ったまま二度と進学を口にしなくなった。

冬日閑話

「紀州新聞」昭和三十九年十二月十五日掲載

今年も押しつまった。
街のたたずまいも、人の気配も慌しい。一年の終わりが十二月であるのは、わかり切っていながら、大晦日を前に目の色をかえる所に、人間の愚かさ、可愛いさ、面白さがある。

のぼせたる女の顔や年の市　草城
ひたむきに歳暮の使い急ぐなり　松浜
掛乞の大街道となりにけり　子規

迎春の仕度に特売場へ急ぐ女の顔は、溢れる人波に紅潮している。その中を歳暮の贈物を抱えた使いが、あたふたと走る。集金鞄を自転車のハンドルにかけた店員が右往左往する。街全体かワーンと唸りをあげて、歳末気分を高潮する。私はそんな狂気じみた雑沓の中を、何のかかわりもなく歩いてみたいのだが、平素のふしだらが祟って、毎年、それどころではなく、歳末がちかづくと人一倍、あわてふためくのである。
確か十一月のある土曜日の午後であった。私は美浜町吉原に田端憲之助翁をお訪ねした。田端翁が今春来、少し健康をそこなわれているときいて、平素の御無沙汰をお詫び旁々、お見舞いした訳である。田端翁は意外にお元気であった。私は請じられるまま無遠慮に、敷き放しになった夜具の傍まで上がり込んで、長い間話し込んだ。
そのとき田端翁は最近「広辞苑」を読み終わった事を語られた。「広辞苑」の収載語数は二十万余ある。それを毎日少しずつ読んで印をつけてゆく。通読するのに六年かかったという。辞典を読むたのしさは、これまでも多くの人から聞いているが、いまの私には、とてもその余裕はない。まったく羨ましい話である。
田端翁はまた近ごろ、万葉集を読み初めたとも云われた。国学院大学を卒業しているが、万葉集を通読していない。母校に対して申し訳ないような気がする。甥が東京で古本屋をしている。それに頼んだところ、岩波の日本古典文庫大系本の万葉集がとどいた。万葉集などは有名な古典だから殆んど研究し尽くされているかと思ったが、まだ不明の点が多いようで、専門学者の新しい成果もみられて興味が深い、とも述べられた。

田端翁のお話ぶりは淡々として水の如くそこには誇張や、てらいは欠けらもない。時々屋外の山茶花の老木に集まる小鳥の影が、日ざしの明るい障子に写った。

田端翁はつづけて毎月十日夜、吉原の「はまゆう短歌会」へ出て、万葉集の一、二首を会員に講義しているとも云われた。私がどんな歌をお撰びになっているのかと伺うと、いま「東歌」をとりあげていると答えられた。また「はまゆう短歌会」の会員の一人、山本啓子夫人の紹介で、山陰・松江の歌誌「湖笛」の客員になったこと、「湖笛」八月号へ「釈超空逸話」と題して、親友であった、超空・折口信夫博士の知らぜざる一面を書いたこと。その掲載誌は先日、見舞いにきた中田宇南氏に贈ったことなど話された。

「無事之富貴」いつ、どこで聞き覚えたのか忘れたが、田端翁と対談中、ふっとこの言葉を思い浮べた。「変ったことのないのが一番富貴というものだ。何にもしない平凡な日々が尊い」言葉の本当の意味が分からないまま、私は私流にこんなに解釈してきた。

アメリカ人は年中いそがしく飛び回るのを誇りとしていると聞いたことがある。私はできるだけ静かにくらしたいと考えている。何にもしないで怠けた日々をおくりたいと思う。しかも実際は朝から晩まで、ロクでもない事で全く寸暇もないのである。思えば我ながら浅ましい。田端翁から格別目的もなく「広辞苑」を通読した話や、月に一晩、万葉集の一、二首を講ずるお話を伺って、日ごろ愛誦している「無事之富貴」が、ひょっくり頭をもち上げたのである。

昨日、今日の暮れの街は、まだ「掛乞の大街道にとなりにけり」までは至らぬが、人々の表情はすでに尋常ではない。私の身辺もやりかけた仕事や、欲ばって買いこんだまま目を通さぬ書が山積みしている。そして今年も暮れてゆく。

未読の書曝し五十路の心急く

畏友、山中不艸宗匠の句である。そう云えば今年も曝書の暇もなかった。

「紀州新聞」昭和三十九年十一月十二日掲載

余滴①

所詮文字も人間の知恵から生まれたもの。従って用字・用語に絶対不変というものはあり得ない。時と共に猫の目のように変わることもある。また変えて然るべきであると思う。

▽一例を挙げると茲二、三年の間に充分が十分となり、それがまた充分に逆戻りしている。理由は十分(じゅうぶん)は時間の十分(じっぷん)に間違われ易いからであろうか

▽それがまたまた最近では大抵の新聞など“じゅうぶん”とかなで書く事がはやっている。協会の用字懇談会で申し合わ

したのであろうから、はやるといっては語弊もあろうが、そういってもさしつかえがないほど、用字・用語にしても一種の流行性をおびていることは確かだ

▽さて、本紙連載の清水長一郎さんの碑（いしぶみ）巡礼を欠かさず拝読していますが、わが旧切目川村最高の誇り、中本康英翁の頌徳碑と、その碑文を草した故西川平吉先生、それに清水先生の讃文と三拍子相俟って我々郷人の敬仰を新にするものであります―と切目川村ほくそ川の人からほくそ川の語源について一文が寄せられていた。

▽清水氏に見せると、新聞に掲載するのも無意義でなかろう！といわれるので、茲に要約するわけだが、ほくそ川の地名について続紀伊風土記にはほくそとは火草（ほくさ）の義であると書いてある。

▽火草というとお灸をすえるもぐさの原草（蓬を乾燥してよく揉み、汚物を除去すると手製でも立派なもぐさが出来る）蓬（よもぎ）のことでないかと思われます。

▽その意義の如く火草川では何だかおかしいので、地名をつける時の当事者達が苦心の末、今のほくそ（木偏に西と火）川の字をはめたのではないかとも思われる。

▽しかしほくそという字は漢字の字引にもなく、私共の若い時分には漢字全盛の時代であったので、ほくそという字について討論会や、工事現場の小憩時などに話題の種となったのであります。

▽由来ほくそ川には広大な共有山林があって猪が沢山棲んでおり、田畑の作物を食い荒らすこと夥しいので、昔は山焼きといって毎年早春に大部分の部落共有林の雑草木を焼き払いました＝中略＝

▽その灰燼や火の粉が落葉や枯葉、燃え立つ噴烟と共に天に冲し折柄の風にあふられてすさまじい程降りしきり「流れもあえぬほくそなりけり」としゃれていたほどの状景が、遂にほくそ川という新字をあてはめた地名が、立派に出現したのではないかというのが、前述の討論会の結末となったことがあります。

▽紀伊続風土記の火草川の意が本当か、ホクソ降り浮く小川の意が正しいか？とこの投書子も断定を避けているが、字引にもない字、その字を説明するのに「木偏に西して火」などと言わねばならぬほくそ川の地名なども随分人泣かせというものであろう

註＝現在では「ほくそ＝梗」パソコンの活字や漢和辞典（学研・漢字源）には収録されている。便利な時節である。

（平成二十五年十二月十日）

ほくその文字小考

「紀州新聞」昭和三十九年十二月二十三日掲載

本紙、八月二十八日附「碑巡礼、第一一五回―中本康英頌徳碑」が端緒となり「ほくそ川」論議が賑やかになった。

もともと「碑巡礼」は限られた字数の中へ、何も彼も盛りこもうとするため、舌たらずの点が多いにもかゝわらず、切目川ほくそ川の読者のように注意して読んで下さると聞いては、筆者の喜びはなんとも云い難い。実は、あの寄書が新聞社にとゞいて間もなく、私は源地理事長から「こう云う投稿があった」と示された。一読して私は甚だ興味を覚えた。と云うのは「ほくそ」の語源についての考察よりも、「由来ほくそ川には広大な共有山林があり、猪が群れをなして作物を荒らすため、山焼と称して毎年早春、部落共有林の雑草木を焼き、その火の粉や煙が天を冲する」と云う、今時一寸見られない、おもしろい年中行事であり、これは活字にしておく価値があると考えたのであった。

私の希望は十一月十二日附の余滴の記事となって達せられた。ところがこの記事が山中不艸氏の興味をひいて、さらに十二月十三日附余滴欄の文章となった。凝り性の山中氏は不艸氏は、いろんな字典を調べて木偏に西して火の字は切目川ほくそ川氏の説の如く見当たらぬが、木偏に酉して火を書いて「ほくそ」と読ませること、また諸橋大漢和字典には、その下に川をつけて(オクソカワ、紀伊国の地名)と解説している事を究められた。

さて、こうなると木偏に西と火で、ほくそと読むのが正しいのか、木偏に酉と火が本当の「ほくそ」かとなってくるが、私の想像では、もともとは後者であったのが、文字に暗い人の多い時代に、いつか前者の如く酉の一点を落して、単純に西と書き誤られたものと考える。その一つの根拠としては「紀伊続風土記」には、ちゃんと酉の字を使っている。

猶、これだけでは心もとないので、机辺にあった慶長十八年六月(一六一三)の、紀伊国検地高目録の写本、ほくそ川の条を検したが、これには残念なことに西の字を書いている。もっともこれは写本のことで、あまり信用できない。例えば財村を射村としたり、熊野村を遊野村としたり、その他にも多くの誤りが発見される。

もう一つ延宝六年(一六七六)日高鑑を見たが、これも残念ながら西になっている。これも誤りには違いなかろうが、森彦太郎先生の校正としては一寸腑に落ちぬ気がする。或は原本の誤りを知りつゝ忠実に原本に従ったのかも知れぬと思われるのは、やはり森先生が編纂・校正に当られた日高郡誌には、正しく木偏に酉と火を用いられているのである。

「紀州新聞」昭和四十年一月一日掲載

蛇三話

○

いつごろともはっきりしない。たぶん享保(一七一六～一七七一年)か明和のころの事であろう。若山藩士の土生惣右衛門が二、三人の同僚と龍神温泉へ入浴に出かけた。

惣右衛門がある朝はやく目をさまして庭を見ると、松の木が一本窓の側にある。確か昨日まではなかったと思うが、いつの間に運んできたのかと眺めているうちに、松の木がするすると動き出して、惣右衛門達の部屋の縁の下を通り、床下にかくれた。さては松の木と思うたのは蛇であったのかと驚いて注意すると、部屋の一部が竹簀子になっていて、そこは蛇の住む所か、大きくどくろを巻いていた。

惣右衛門は胆をつぶして、まだ寝ている同僚を叩きおこして、一同で亭主の所へねじこんだ。亭主は惣右衛門の話を聞くと

ここでは、こんなことは珍しくはございませんが、以前から少しも害をなした事はございません。お気遣いなさるな。と動ずる気配もない。しかし一同はどうも気味が悪く、早々、宿をひきあげた。

○

亡父語けるは、一年御供にて日高郡へ行たりし、何の所にてか古き石垣へ指掛て建たる宿直所有、宿番の夜起きたるに行灯消して有故、人を起して火を立さするに、二、三尺許を頭として大小の蛇、幾つとなく寝たる上にわだかまりて枕元より座中にも並び居る。扨、又上を見れば屋根裏にひしと這い渡り、椽よりぶら下がり有ける。蛇嫌の人々大に迷惑しけるとぞ。何村に有しや、予、幼年の比にて悉く問ざりしや。（原文のまま）

○

これも藩政時代とだけで何時ごろの事か、はっきりしない。

やはり若山藩士の某と云うのが、病気療養のため日高郡のあるお寺に逗留した。まだ残暑のきびしい頃であったが、ある夜ふけて台所の方から何か風の吹くような音がして蚊帳がざわざわ動き、庭の方で水を呑む音が聞こえた。あいにく灯火が消えて様子がわからぬので、寝たふりを続けていると、しばらくして又、風の吹くような音と共に、台所へなにか通りぬける気配がした。

やがて夜が明けて庭をみると、昨夕、水を一杯湛えていた大きな水鉢の水が、一滴もなかった。合点がゆかぬので住職をみかけると、昨夜の不思議な音の話や、手洗い鉢の水が一夜のうちになくなった事を訊ねた。住職は驚いて、「さてさて小僧共がぼんやりして、台所の戸を閉すのを忘れたのに違いない」と前置きして

実はこの寺の台所の二階に、古くから夫婦の蛇が住んでいる。それが小僧どもが戸を明け放しておいたのを幸い、水を呑みに出た際、お客様の部屋を騒がせたのであるが、昔から少しも人を害した事はございません。先住の時代にこの蛇が出て雀の子を取った事がありまして、先住が大変腹をたて蛇に向かい、お前たちは長くこの寺に住みながら、例え小雀と雖も殺生をするとは以ての外である、何処へでもよい、とっとゝ出て行けと叱ったものです。すると夫婦

の蛇はじっと首を垂れて聞いていましたが、その夜の和尚の夢に二匹の蛇があらわれて云うには、和尚さまの昼間のお腹立ては御もっともながら、雀をとったのは私どもではなく、他所から入りこんだ奴でございます。その悪い蛇は私共で成敗致しますから、何卒いままで通りこのお寺において戴きたい、と。不思議な夢をみたものだと先住が翌朝起きると、堂の椽に二尺ばかりの蛇が腹を裂かれて死んでいた。こんな次第で決してお気にする事はございません。もしよかったら一度御覧下さい。

云われるままに台所の二階について行くと、太さ手桶の胴ほどもある蛇が二匹、どくろを巻いていた。住職は「おとなしいものですよ」と側にあった竹箒で、首のあたりを撫でるのであった。

○

この三つの蛇の話は、巳年に因んで「牧苗類草」の中から抜いた。「牧苗類草」は全四冊、八巻。序文に「明和丁亥（一七六七年）仲秋・抱嶺舘」とある。明和丁亥は今から約二百年の昔に当り、著者抱嶺は若山藩か僧籍の人と思うが、まだ確かめていない。主として享和・明和ころの紀州の見聞録を集めたもので、写本として伝えられている。

（完）

高野豆腐

「紀州新聞」昭和四十年一月十五日掲載

大寒にちかい昨日今日はさすがに朝夕の冷えこみがきびしい。わざと火の気を遠ざけた離れで書きものをしていると、夜が更けるにつれて、手先や膝頭にひしひしと冷たさが加わってくる。戸外は深い霜でもあろうか。昔ならこんな夜がつづくと紀北地方では、名物の高野豆腐つくりがはずんだことだろうと妙な聯想をした。

高野豆腐。別に凍豆腐ともいうが、私どもの子供時代には、今よりも、もっと重宝がられて、田舎の祝儀・不祝儀や何かごとには、きまって食膳で幅をきかせたものである。現代市販している高野豆腐はビニール袋にはいり、しゃれた包装をこらして色も白いが、当時のものは黄色味をおびて肌目も粗く、見るから田舎びたしろ物で、重宝がられた割合にうまいものではなかった。

私の遠縁に下村海南などと和歌山中学で同窓であった、清水虎之助という古い医学士があった。あるとき医学士の子が大阪から遊びにきた。田舎の婆さんは腕によりをかけて五目飯をつくった。五十年も昔の田舎では、五目飯が何よりの御馳走であった。ところが大阪からきた孫は食事になると、五目飯の中から、高野豆腐だけを一つ一つより出して、膳の隅にならべた。婆さんは目を丸くした。この子はきっと高野豆腐を知らぬのだと考えた。そこで、

「広、お前、それたべられるのやで」

と注意した。広君は相変わらず高野豆腐をとり出しながら、にこりともせず、

「うまくない」

と答えた。

家の祖母がばあさんから聞き伝えた話だが、広君の「うまくない」の一言が、いかにも高野豆腐の不味さを云い得て面白いので、今に忘れがたい。

私が結婚したのは昭和十二年（一九三七年）である。仲人さんについて見合いにでかけた。やがて昼食になった。ところがその食膳には、私のあまり好きでない高野豆腐の煮付けが並んでいた。今なら何とでも口実をつけて残すのだが、そんな知恵はない。無理に箸をつけた。案外軟らかくて味もよかった。この時の見合いの相手が老妻である。今でも御きげんの時どうかすると、二人の間にこの席の高野豆腐の話が出る。

どうやら高野豆腐の悪口みたいになった。だが、憎まれ口はついても何かの機会に、お椀の中で力んでいる高野豆腐に出くわすと、古い友人に逢うたような懐かしさを覚える。

知ってのとおり豆腐を一寸角に三、四分の厚さに切り、戸外で凍らせた上乾燥させたのが天然の高野豆腐である。別に凍豆腐とも云う所以である。何も彼も自給自足した昔の農家では、以前は寒中によく自家用の高野豆腐をつくった。戸外の気温が摂氏・氷点下五度から九度が、凍結適温といわれる。寒い高野山上や紀北地方が、高野豆腐の名産地になったのは、他にも理由があるがこの気象条件が、大きく物を云うている。

いつの頃であったかある晩、高野山の小僧さんが、戸外へ豆腐を置き忘れた。翌朝豆腐はカチカチに凍っていた。何気なくそれを煮つけた処、得もいわれぬうまさであった。以来たびたび豆腐を凍らせて食べるようになった。

高野豆腐の起源伝説で、この外には鎌倉時代の傑僧覚海尊者を開祖とする説や、有名な応其、木食上人がこれを産業化したとする説もある。何れにしてもその発明の動機は、第一説の如く極めて偶発的であったろうことは、想像にがたくない。

高野豆腐が古くから重宝がられたことは、寛永頃（一六二四～一六四三）刊行の「料理物語」に「氷とうふ」と見え、慶安三年（一六五〇）の「貞徳文集」には、高野山から贈答品に用いられた記録があり、正徳年間（一七一一）の「和漢三才図会」には、早くも紀州名産として登場している事によっても知られている。昨今は味のよいスマートな食品が市場におおい。だが、昔懐かしい高野豆腐も、まんだら捨てたものではない。

「紀州新聞」昭和四十年二月十一日掲載

日高名勝記

私は小さな時から本を見るのが好きであった。小学校三年生の頃、学校に貧しいながらも文庫ができた。その時分のことで子供の詠み物は僅かしかなかった。何でも巖谷小波の世界お伽噺と日本お伽噺があったが、それも全部揃っていたか、どうかは分からない。

子供の読書力も割合あなどれない。それにお伽噺は子供向きで活字も大きかった。たちまち読んでしまった。今でも世界お伽噺中の「世は情け」や「朝星夕星」・「魔法のらんぷ」がなつかしく思い出される。先年と云ってもたしか戦時中であったから、もう二十余年になる。世界お伽噺の復刻版を遇然みかけ、郷愁のあまり幾冊か買い求めた。いまも書棚のどこかに下積みになっている筈である。

世界お伽噺を卒業した私は、そのころの読書好きの少年がたどるように、講談本・人情本と紙の粗末な、活字の細かい豆本を手当たり次第に読んだ。小遣いを無理算段して、少年世界や日本少年・飛行少年などを出版社から送らせた。学校から帰ると発行所から雑誌が届いている。帯封を切る手ももどかしく頁をくる。新しいインクの匂いがプーンと流れる。このよろこびは大人では味わえない。

自分のことばかり書いて気がひけるが、死んだ私の祖母は文盲であったが、賢い人であった。どういうわけか私をひどく可愛いがった。祖母がどこ行くにも腰きん着になって、ついて行ったものだ。祖母は時々御坊の町へ出た。御坊へ出ると田中町にあった「たち久」という仕出屋と、出口の何とか名前は忘れたが、小ぎれいな婆さん達二人でやっていた餅屋(伏見屋)へ寄るのがきまりであった。祖母は「たち久」で油揚すしを買い、餅屋で「あんころ餅」を食べた。

ある時その出口の餅屋で「あんころ餅」を食べている所へ、近くの青年が遊びにきた。孫自慢の祖母はこの青年を相手に、早速わたしの本好きの事を吹聴した。青年は私の祖母の他愛もない自慢話を、どうきいたものか一寸表へ出たと思うと、一冊の本を持ってきて「そんなに本が好きなら、これ上げようか」とくれたのが「日高名勝記」であった。

日高名勝記は今の体裁でいえばB六判と、新書版との大きさの中間ぐらいの大きさで、紙表紙・本文五十七頁・附録十九頁、粗末ではあるが写真版十六頁の外、写真入りの広告が十七枚と広告二十枚がある。編者は美浜町和田の人で紀南新聞の記者、紫星・木村敏之助、明治四十一年(一九〇八年)五月十日、御坊町広文舎の発行となっている。

紫星の伝はまだ不明の点が少なくないが、早熟な文学青年であったということで、そのことは例えば次に掲げる「真妻山」の項で、詩人ラスキンを引き合いに出したりしたあげく、

―― 日高平野の彼方群山を帥(ひき)いて立てる偉麗なる真妻山の秀姿、古人仰いで日高富士と称えし其秀容は云々 ――

とあるのをみても充分うなずける。

それにしても如何に読書ずきとは云え、九つや十の私には難しすぎた。青年には申訳ないが、いつかその本はどこかへ

消えてしまった。後年私が郷土史に感心を抱いてから、またこの本をさがし出したころは、もはや稀覯本になっていった。さいわいに私の志をあわれんだ山野の故森常吉翁の尽力で、三津野川某氏所蔵の一本が恵贈されて、今わたしの書架にある。

正直に云えば日高名勝記の史料的価値は余り高いものではない。その殆んどが紀伊続風土記の内容と同一である。然しその時分はまだ紀伊続風土記は刊行されていない。和歌山県神職会がこれを活字にしたのは、その奥書によると明治四十三年八月十五日である。当時まだ写本として篤学家の間に、わずかに伝えられていたものを、紫星がどうして見たものであろうか。しかも日高名勝記を公刊したのは、紫星がまだ二十才代の青年であった筈である。胸を病んで夭折したが、やはり優れた男であったに違いない。

芝口先生逸聞

「紀州新聞」昭和四十年三月十四日掲載

もはや二十年も三十年もの昔になる。ある年の四月一日早朝、田辺の南方熊楠翁から芝口常楠先生のもとへ

四月一日十時、貴地、白崎における水仙の自生群落地を調査したい。ついては御繁忙中恐縮だが、当日、現地のご案内をお願いしたい。

と云う葉書がとゞいた。俄のことで先生は大急ぎで御坊駅へかけつけた。やっと発車間際の汽車に間にあった。ところが由良駅で降りてみたが、南方翁らしい人はなかった。南方先生は先発されたのかも知れぬ。こう考えると先生は一人で、トットと白崎まで歩いた。だがそこにも南方翁の姿はなかった。

南方翁の葉書は、実はエイフリル・フールに乗じた悪童の悪戯であったものだ。それにしても特色のおゝい南方翁の手跡と、偽葉書の文字は、容易にわかりそうなものだが、先生は初めから疑うことはしなかったのである。芝口先生は、それほど生まじめで善良な方であった。今でこそ先生の純粋なお人柄を偲ぶ好個の逸話となったが、思えば罪なことをする男もいるものだ。

私が先生からいろいろ御指導をいたゞいたのは、確か昭和二十四年（一九四九年）ごろ以降のことゝ記憶するから、先生の晩年の十数年間、先生が学者として、また人間として最も円熟された時期にあたる。いつお伺いしても、きまって詠みものか写本か、書きものに専念されていた。どんなお忙しい時でも、一度として嫌な顔をされたり、荒いお声を出されたことはない。夏でも冬でも自分で座ぶとんと煙草盆を運ばれて、私の座を設けられた温容が懐かしく思い出される。

先生をお訪ねした人は誰でも先生御所蔵の写本の数におどろく。私はせっせと写本をお借りしては写した。先生御所蔵

のものは私も写さねばならぬ。こう念願しながらも、怠惰な私の作業は遅々として進んでいない。まったく先生の御努力と根気は驚嘆の外はない。しかもその写本の一冊一冊はすべて毛筆で克明にお書きの上、要所要所に朱を加え、ていねいに表紙をつけ、和本仕立てに製本されている。もともと先生は非常に器用なたちで、着物のつゞくりもされたし、足袋なども御自分で裁断して縫い上げられ、こういうことに興味もおもちであった。

先生は甘いものは好まれたが、酒も煙草も嗜まれなかった。女学校にお勤めのころは学校から帰られると、直ぐ書斎にこもられ、それが連日、十二時・一時ころに及んだ。ラジオやテレビができてからも、その前へ座られたことは一度もない。研究一筋の昼夜が今度の御病臥までつゞいた。妙な例えだが、洵にローマは一日にしてならずと云う。この努力の集積が、鬱然たる郷土史家・植物研究家、芝口先生を形成したのである。

昭和二十八年（一九五三年）の水害は、日高平野一円を水浸しにした。先生のお宅も身長にちかい浸水であった。階下の先生の書斎では忽ち本棚が倒れ、御蔵書の大半が泥土にまみれた。学者として蔵書を失ったほど打撃はない。私は挨拶の言葉もないまゝ

「先生、もう一度おやりになるんですナ」

と先生の御年令を考え、暗然としながら心にもないお慰めをした。この年、先生は七十才の御老令であった。

先生はひどく落胆されていた。だがいつまでもぼんやりして居られなかった。やがて日を経るにしたがい、泥まみれの本を洗い乾かし、新に表紙をつけ製本し、写本類はその後何年もかかって、また写し直された。いま先生が遺された御蔵書の大半は、こうして先生が水害後御自身で製本し、写し直されたものである。先生の学究としての書籍に対する執念の劇しさと困難を克服された勇気は、何と形容すべきであろうか。

先生は若いころから実に温厚な紳士であられた。殊に晩年、町をお歩きになっているお姿は、飄々呼として仙味さえ帯びておられたが、内には稜々たる気骨を蔵しておられたのである。

「紀州新聞」昭和四十年三月二十四・二十六日掲載

田端憲之助翁

田端憲之助翁の訃をきいた時は呆然とした。芝口先生にお訣れして、まだ半月になっていない。生者必滅とは云え洵に人生無常の感がふかい。

三月十三日午后であったから、ちょうど翁逝去一週間前にあたる。私は翁をお見舞いした。素人目にはなかなかお元気であった。枕元に数枚の歌稿をとり散らしていた。翁が指導されていた「はまゆう短歌会」への出歌の草稿であった。私

は長い間枕頭に座りこんで勝手なことを話した。

翁が歌作をはじめられて間もなく、その一首が博文館から出た佐々木信綱「和歌名所めぐり」におさめられた時のよろこび、青年時代、紀州の各地を歩いた時の詠草を「紀の国遊行記」と題して、謄写版印刷したが、学友武田訃吉が其の扉に

紀の国の南の浜を遊行する　神の姿を思ひこそれ

の一首を寄せた話など、翁独特の低いが太い声で次々とつゞけられた。また近作の

春くれば楽しきことも出てこんと　人はいへども訪れもなし

や

朝の床夜毎に死にてあれかしと　我が願うとは人は思わじ

などを淡々として示された。一週間後に果敢なくなられようとは誰が思おう。

田端翁のことを書き出せば限りがない位おゝい。昭和三十一年（一九五六年）十月二十八日、田端翁のお供をして田中宇南・藤田草宇・それに私の四人で、宮原から蕪坂・藤白峠を越えて海南まで歩いたこと。田端翁は着物にゴム長靴という面白い格好であったこと。其の後また田端翁と私の二人で、和歌山市で開催中の南方熊楠展を見に出かけたこと。二人で昼飯に「うどん屋」へ這入ると、翁は首へかけていた巾着から、お金を出したこと。ある年の御坊祭りに、ひょっくり町で出逢った翁を、無理やりに酒場へお誘いして、私一人よい気げんになって「くだ」をまいたこと。いまにして思えばどれも懐かしい。

私はこれまで随分おゝくの人人に接してきたが、田端翁ほど純粋なお人柄は、初めてゞあった。正直に云えば田端翁より偉い学者はいくらでもある。田端翁より勝れた歌人は掃くほどある。だが翁ほど汚れのない人、心の美しい人は外にあるだろうか。仏さまのような人という言葉があるが、もしそんな人があるとすれば、まさに田端翁のような方のことであろうかと思われる。

私はいま吉原火葬場に翁を送り、翁を偲んでその歌集「少年の悲み」第一輯・第二輯と、翁の試作、謡曲「上人松」をとり出してみた。「少年の悲み」は別に「いぼ虫の歌」という妙な題をつけてあるが、その由来については今はふれまい。とにかく「少年の悲み」は第一集・第二集とも和装・美濃判で御坊・井元印刷所の印刷、第二集は昭和四年（一九二九年）九月二十日発行。第一集の奥書には発行年月日を欠くが、恐らく昭和二・三年ごろと推定される。集載歌数第一集百七十七首、第二集二百十六首、なお私の蔵書は二冊を合冊にし厚表紙をつけ、私が製本したもので、其の見返しに翁が

清水先生雑藁をとりて禎せらる慚愧にたへず

即ち一筆感佩の意を表する次第であります。

昭和二七年（一九五二年）八月

田端憲之助

と墨書きの上、次葉に

かの子らも昔のひとになりはてぬ　青田かすむる夏の朝かぜ　旧懐の情を寄す

の一首をお添えになっている。

謡曲「上人松」試作の年代は明らかでないが、私がお借りしたのは昭和二十九年夏であることから考えて、それに近いころの御作と思われる。題名のとおり吉原海岸の取材した徳本行者の高徳をたゝえた短編である。機会をみて御紹介したい。

（昭四〇・三・二二夜）

二枚の葉書

賀新　一月

病気で入院しています。ロクマク・心・肝いろいろあります。賀状中清水さんの随筆によって、田端さんの感心な点を知ったという人があり、光栄に存じます。

生きがひを何に求めし老夫婦　病の床に相争へり

（エンビツで失礼します）

日高病院内

田端憲之助

田端憲之助翁からこの年賀状をいただいたのは、一月七日のことであった。文中の「清水さんの随筆は、十二月十五日附紀州新聞の火曜随想「冬日閑話」を指している。私はこの短文の中で、中国古代の賢人にもにた、翁の悠々自適のご日常を心から羨望したのであった。末尾のお歌は同病院内の入院患者を詠われたものであろう。世俗を超えた翁の眼には、老いて病み、なお相争わねばならぬ夫婦の愚しさが、しみじみ憐れに映ったに相違ない。

一月二十三日、私はようやく日高病院の田端翁をお見舞いした。ふだんから努めて世間を離れ、お一人でひっそりお暮らしであった翁は、さぞかし心細がっておいでかと想像したが、意外にお元気でもあり、表情も明るかった。唯一のおつき合いであった歌友たちが、相ついで翁をお訪ねしているようであった。御坊近在はもとより、遠く和歌山・大阪あたりからも来てくれてと、およろこびであった。或人はお菓子を、ある人は果物を、また紀州新聞を入れてくれる女のお弟子さん、時間を定めて毎日コーヒーを運んでくれる閨秀歌人等、私が心配するほどのことはなかった。趣味の友、道の友とは有難いものだなと感心したが、誰もがこうはゆくまい。やはり田端翁のお人柄である。自らにしてそなわるお徳の結果である。「徳孤ならず」の言葉は今も生きているのである。

四方山話を続けている処へ、かって田端翁がお勤めであった松原農協の箕尾正夫氏が見えた。私達は取りとめもない雑談の末、一時間ほどで辞去した。

まことある人の見舞いを受くる時　世には楽しきこともあるものか

まことある人の二人を前に据え　四方山語ることの楽しさ

年経れば老いゆくものと今ぞ知る　あだに月日は過したりけり

日高病院

田端憲之助

この葉書には日附はないが、御坊局一月二十四日の消印がある。たぶん箕尾氏や私がお見舞いした日の直ぐ後か、翌日お書きになったものであろう。ボールペンでこの三首だけを記され、外に文字はない。この葉書が田端翁から私への最後のお便りとなった。

（昭四〇・三・二二夜）

新聞四方山話

「サンデー御坊」昭和四十年六月二十七日掲載

ちかくサンデー御坊が発刊されるという。どんな新聞ができるか楽しみである。どういう訳か私は新聞がすきである。家では四十年来、一貫して朝日新聞をとっている、時々、拡張員がきて他紙の購読をすゝめることもあるが、私は頑として応じない。また将来もかえるつもりはない。最近はやんだようだが、ひところ景品や附録で読者を増やすことが流行したが、私達は景品を目あてに新聞をとるのではないから、一度も迷ったことはない。

新聞とひと口にいうが、細かく読むと相当な時間を食う。私はいま家では朝日と読売・紀州・梅洋を読み、職場では毎日と産経に目を通す。随分、乱暴な読み方で、興味のうすい政治記事や社会欄は、よほどのことがないと見出しだけです。スポーツ欄は一行も見ない。それでも必要な個所に掲載紙名と年月日を記入し、鋏を入れてスクラップブックに整理する時間まで勘定すると、たっぷり三時間はかゝる。このいそがしい時代に勿体ない時間の浪費だが、郷土研究などやっていると、欲かせない作業である。新聞記事を鵜呑にするのは危険だが、他日の貴重な資料となる。

殊に私の場合などは地方新聞が役に立つ。勝手な願いだがサンデー御坊も、こういう意味でよい新聞であってほしい。

日高地方で初めて新聞が発行されたのは、明治三十一年（一八九八年）十月二十五日である。菊判三十六頁もある部厚なもので、いまから見ると新聞紙よりも、週刊誌か雑誌の性質が強い。紀南公論という名前であった。私は先年某氏からいたゞいて創立号から六、七号まで愛蔵しているが、恐らく他処にはあるまい。

この紀南公論が幾変転して、戦前派の人々に馴染ふかい紀南新聞が生まれた。現代の新聞にくらべると活字も印刷も甚だお粗末である。編集ぶりものんびりしている。だが、この新聞の文芸欄には、森梢雨（森彦太郎）・高尾弦月（高尾英吉）・井上豊顆（井上豊太郎）・寺井睦月（寺井久信）・片山翠波（片山隆三）の諸氏が活躍して、日高地方の文化史上におゝきな業績をのこした。

私は久しい以前から古い紀南新聞を索めているが、どこにも見あたらない。

昭和十四年（一九三九年）八月三十一日、この新聞が戦争のため廃刊して二十数年になる。この間に戦争があり大水害があり台風があった。私のさがしている紀南新聞は、これらの天地異変でもはや何処にものこっていないのであろうか。

（昭和四十・六・九夜）

註＝和歌山県立文書館の書架には紀南新聞大正十二年（一九二三年）八月～昭和十四年八月のコピーがあり閲覧できる。

写本

「紀州新聞」昭和四十年四月十六日掲載

わかりきった説明になるが、写本とは書き写した本のことであり、写本をするといえば本を書き写すことである。わたしは永年の習慣で新聞がとどくと、第一に新刊書の広告をみる。毎日々々よく、こう後から後へとつづくものだと呆（あ）きれる程、おおくの本が出る。試みに東版出版科学研究所発行の年報によると、昨、昭和三十九年（一九六四年）中には三二、二二九点の本が出版された。これを対前年比で表すと一一三・三％にあたるというのである。勿論この中には一部で何十万部も売り尽くされたベストセラーもあろうし、地方出版のものも加えると、総冊数は大変なものになろう。いつ誰が何に書いてあったかも、すっかり忘れたが、こう次々と本が出ては、本の重量で今に地殻が陥没をおこしはすまいかと、冗談とも本気ともつかぬ随筆のあったのを読んだことがある。

こういう現代の状況下で生活する私たちは、戦時中や昔とちがって読むものには不自由はない。不自由がないどころか、どんな読書家でも、毎日出版される書籍は到底読み切れるものではない。実際わたし等も欲ばって買いこんだまま目を通さぬ本が、大げさに云えば机辺に山積している。それでもなお別のものが見たいと思えば、いつでも本屋さんがとどけてくれるのである。

然しこんな出版洪水の中でも、やっぱりどうしても買えない本が、いくら古本屋を探しても手に入らぬ本が、かなりあるのである。しかもそれが私共の関心をもっている郷土関係のものにおおいから厄介である。所謂、郷土地誌類であり、郷土史料の類である。その信憑性は兎も角として、、日高人に馴染みの深い「湯川実記」や「湯川記」にしても、古くか

ら写本として伝わるのみで、公刊されてはいない。江戸時代たぶんキリシタン取締りのために行なわれたものと想像されるが、時どき藩が神社の御神体を調査の上、報告させた控えが、いまも一部篤志家の間に、写し伝えられている。これなどは事が神社の尊厳に関するため、みだりにその内容を公開すべきでないが、日高地方の分の中には、

神主も、余りの勿体なさに御神体を拝み申したること無之候

というのや、

○ 尺ばかりの衣冠束帯の木像に御座候

というのがあって、この附近の神社の御神体が一目瞭然であるばかりでなく貴重な神社史料的価値をもっている。そしてこれらはすべて一冊ずつ写しては秘蔵されてきたので部数は極めて少なく、どこの本屋にも売ってはいない。面倒でもやはり一字一字書き写すより方法はないのである。

私が郷土史に関心をもって、最初にはじめたのは、先日亡くなられた芝口先生御所蔵の写本を転写することであった。先生は綺麗な文字を書かれた上、製本もお上手であったら、その写本も美しかった。私はせっせと拝借しては次々と写して行った。「紀伊史略」・「麟徳記」・「査魚志」・「中右記」・「桜蔭翁長寿録」等々かぞえあげると切りがない。私はそれらの本を宿直の夜おそくまで写し、昼の休憩時間にまで写した。他人様にはあんな面倒なことを物好きにと、見えるかも知れぬが、当人としてはなかなか楽しいものである。

芝口先生の写本には末尾に、必ず写本した年月日・その本の由緒・著者の経歴が記されている。そのうちで一番おゝいのは、先生が宇井縫蔵氏から借りて写したものである。宇井縫蔵氏は田辺の人で「紀州魚譜」・「紀州植物誌」の著者、田辺高等女学校長？か何かを退職して、大阪千里山に移り悠々自適。その頃から郷土研究に熱心になり、府立大阪図書舘に通っては、同舘所蔵の紀州関係の文献を渉猟の上写本しては、芝口先生に回覧されたのである。また東牟婁郡古座町の郷土研究家・中根七郎氏のものも多い。先生はそれらの人々と互に資料を交換してうつされたのであった。

そのうち私も古書店で手に入れたものや、他所から借り出したものを先生におとゞけした。まだその時分は和田喜久男氏も、御病気とはいえ文字を書いたり、本を読むには故障がなかったので、芝口・和田の二先輩の間へ挟まって、新資料が手に入るごとに三人で、それぞれ回覧写本しあったものであった。和田喜久男氏にお借りして写したものに、「紀の路草」上下二巻等あるが、これは徳川時代の中期に、和歌山在の人が熊野に詣でた時の紀行で、当時の沿道諸村の状況が細述されている。

写本は原本から書き写すのであるから、必ずしも和紙に筆墨で写すに限らない。事実私の写したものには、三・四冊洋紙にペン書したものもあるが、資料的価値は別として、やはり和紙へ筆写したものゝ方が、後になって味わい深いもので、手数はかゝるが筆を用いることに改めた。近ごろまた少し閑をみつけて写本をはじめようかと思うが、その閑がなかなか

得られそうにない。

一人旅

「紀州新聞」昭和四十年五月十五日掲載

季節はずれの寒さがつづいたこの春も、五月に入ると流石に、どこも彼処も青葉になった。猫の額ほどの茅屋の前庭にも、昨日今日は蒸せかえるような若葉の匂いである。二日三か日一人で旅をしたい。毎年新緑の季節がくるごとに思うのだが、さてとなると閑がない。第一ふところの銭が乏しい。

有田郡金屋町からバスで二時間ばかりの所に、清水という小さな町がある。有名な神社仏閣がある訳でなし、温泉が湧くとも聞かぬが、有田川の上流にそうた鄙びた山峡の町らしい。物ずきに電話帳をくると旅館が数軒、怪しげな映画舘の名も出ている。新緑に埋もれたこんな山奥の宿で気ままに寝ころんで過ごしてみたい。

最近はレジャーばやりで団体旅行が多い。今年の一月、国鉄団体旅行で煙草屋さん仲間と伊勢から那智・勝浦と紀伊半島を一周した。伊勢神宮前の大きな食堂で朝食の席についたとき、ひょっくり田中宇南夫妻に出合った。階下の土産物売場では中村兼子さん御夫婦と顔を合わせて驚いた。気難しい中田大人や中村さんまでが気軽く、団体旅行に加わる御時勢だが、わがまま者の私は団体旅行は嫌いである、旅は一人に限る。

毎日、自転車で通勤している私は、めったに汽車にもバスにも乗ることはないが、たまたま汽車を利用する時でも、なるべく顔みしりのない席を選ぶことにしている。知った人のある場所は敬遠する。別に気どる訳ではないが、話しかけられたり返事をするのは面倒臭く神経が疲れる。一人で窓外を眺めたり、隣席の女性の顔を盗み視たり、居眠りしている方が、どれ程のびのびと楽しいか分からぬ。

いつのことであったか和歌山の県立美術館で、紀州陶磁の展覧会が催されたことがあった。有田の男山焼をはじめ、瑞芝焼・御庭焼・高松焼・日高の善明寺焼など紀州陶磁の名品が一堂に集まり、その沈潜した光彩の美は、私をして時のたつのを忘れせしめたが、会場を出て急に思いたって根来寺を訪ねた。無論、紀州陶磁と根来寺には何のつながりもないが、そこが一人旅の気やすさである。団体旅行ではこんな気まぐれは許されない。

根来寺は桜の花がすんでいた。広い境内のあちこちには、まだ未練気な観桜客目あての茶屋や食堂が閉じ残っていたが、もはや酔客の姿はなかった。根来寺(大伝法院)は新義眞言宗の根本道場で、鳥羽天皇の御願所として覚鑁上人が開いた寺である。はじめ高野山に創立されたが、金剛峯寺の僧侶と学徒の紛争から、正応元年(一二八八)ここに移され、一宗の総本山として天正(一五七三～九二年)ごろは僧五千九百、堂塔坊舎二千七百余、寺領七十二万石、外に三万ちかい僧兵を擁し、その勢力は隆盛

を極めたが、天正十三年(一五八五)の兵火で一山焼亡、わずかに多宝塔と大師堂のみがのこった。
　別段さきを急ぐ旅ではない、足にまかして寺内をさまようと、谷あり森あり竹藪あり、東は紀ノ川をへだてゝ、龍門から高野の連峯を一望にする境内の規模は流石に大きい。しかし規模が大きいだけに、一山にただよう荒廃の色はおゝうべくもなく、参拝の人かげは極めて少なかった。
　文明十三年(一四八〇)資材の蒐集に着手、六十七年後の天文十六年(一五四七)に完成した国宝・多宝塔のほとりへ、生い茂る芝草を踏んで近づいてみた。塔とは云え方五間という大塔である。五百年ちかい風雪にさらされた太い柱の処々に、天正兵乱の際の弾丸の痕がのこっていた。この法城を中心に激しい攻防戦を展開した根来の荒法師達も、怒濤のように押しよせた秀吉の将兵も、すべては歴史の彼方に姿を消した。諸行無常、私は塔を仰いで月並みな感傷にふけったのであった。
　寺を辞した私は、ぶらぶら根来の町へ出た。見るからに古めかしい門前町であった。たぶん淡島街道であろうと思われる町はずれの停留所へよった。バスはなかなか来そうもなかった。国鉄の駅まではかなりの道のりがある上、第一タクシー会社さえなかった。
　ねんね根来のうしろの山で　としより来いよの鳩が鳴く
　古くから紀州に伝わる子守歌で、死んだ私の祖母が、よくうたってくれたものである。永い晩春の日もようやく暮れ近くなった根来の村はずれで、私はいつ来るともあてどのないバスを待ちながら、ふと遠い子供のころ祖母の瀬できいた子守唄の一ふしを口誦さんでみた。
　ねんね根来のうしろの山で　としより来いよの鳩が鳴く
……　……

書画骨董談

「紀州新聞」昭和四十年六月十五日掲載

　いつも薄給をかこちながら、書画の骨董のと、大きな口をきくのは自分でもおかしい。やはりこういうものは、くらしに裕りのある人の道楽で、私ども安サラリーマン風情が手を出す筋合いではない。ところが世の中は面白い。郷土研究のまねごとでも、二十年ちかくも続けていると、いつの間にか身辺に妙ながらくたが集まってくる。
　二、三年前であったか古書目録で華岡青洲の書のマクリが目についた。紀州が生んだ世界的医聖・青洲先生のことは余りにも有名すぎるから、ここには書くまい。マクリという言葉だけを説明すると、マクリは文字通りマクリである。一度

襖や軸や額に表具していたものを、何かの都合でマクッて未表装でおいているものである。
私はかねがね紀州の文人や画家、先賢の遺墨に注意を払ってきた。日本的な大雅堂の蕪村の、良寛のとなると論外だが、紀州人の墨跡なら、どんな拍子で手に入らぬでもない。その上、郷土人という親しみもある。事実わたしの乏しい収集品の中にも、野際白雪や坂本皓雪・本居大平・倉田可庵のものが二、三点ある。
そんな訳で古書目録の中で青洲の書を見出した時は、心が躍った。世界の医聖―紀州の一大先覚―何とかして手に入れたいと考えた。
だが如何にせん貧乏書生の私には値段が少し高すぎた。あれこれ思案がきまらぬうちに数日がすぎた。そんな或る日ひょっくり友人Kに出あった。四方山噺の末、青洲の話になった。
「俺が買うよ、頼んでくれ」
友人は事もなげに云い放った。
数日後、書店から手紙がきた。曰く、
青洲先生の書の御注文ありがたい。貴男と同じ日に土佐の医師某からも注文をいただいた。然し考えてみるとこの品は、青洲先生と郷里を同じうする、紀州の貴方にお納めするのが本筋と思うから御送りする。云々。
なかなか良心的な書店である。やがて小包がとどいた。
無名始天地　青洲
見事な文字であった。早速、古書画に明るい薗悌次郎医伯のもとへ自慢に出かけた。薗医伯は、青洲先生晩年の書と思われること。青洲と署名のあるのは割合少ないこと、青洲先生の作品中でも逸品であることを説明された上、何なら多少の口銭でわたしがいたゞいてもとつけ加えたものである。こうなると私は俄にKに渡すのが惜しくなった。そこで
青洲先生の書がとゞいたが、あれはやっぱり僕が貰っておくよ
と電話で断った。
お前、横取りして殺生やナ
その後、時々うらやまれるがそこは親しい間である。かくて青洲先生の半切は竹影堂の表具で、今私の愛蔵品の一つになっている。
また、これも古書目録でみたのだが、福岡市の某書店のものに、本居宣長の和歌の半切があった。宣長はいうまでもなくわが国学者の第一人者、ことに紀州藩とは切っても切れぬ縁がある。私はかって藤田町藤井、塩路源三氏所蔵の屏風に、この大人の短冊のはり交ぜのあったのを拝見して以来、久しく憧れていたものであった。値段が馬鹿に安かったのが不安でもあったが、魅力でもあった。

ところが、これは真赤な偽物であった。素人目にも宣長ともあろう人が、こんな文字を書くものかと分る程、品のない筆であった。

これは、いけませんね

薗医伯は軸を半分もひろげぬうちに、こう宣告した。六百円という安い売値に飛びついたのが悪かった。誰も恨むことはないが忌々しかった。二度とひろげる気もなくなった。私は古新聞にくるんで、勤務先のロッカーの中へ投げこんで、もう幾年かになる。

あるとき某家に善妙寺焼があるから見せてやろうと云うので出かけた。善妙寺焼は御坊市島・善妙寺の六世・玄了が宝暦ごろ（一七五〇～一七六〇）焼いたもので、紀州の陶磁中の白眉であるが、偽物の多いことでも知られている。焼物は古ぼけた箱に収められていた。嘉永何年（一八四八～五四年）かの箱書さえあった。主人の説明では御坊きっての旧家であった某家から出たものということであった。

わたし達は期待と疑惑で品物を見まもった。そして、アッと驚きの声をあげた。何と宝暦ごろの作と云われる此の善妙寺焼には、明らかにローマ字の刻印があるではないか。偽物もこうなると愛嬌がある。

註＝昭和三十九年三月十五日の「西川平吉先生追思」や、ここに出てくる「無名始天地」と、現在拙宅に所蔵の「無名天地之始」は全然別のものらしい。家に所蔵のものは、思文閣の納品書があり、漆塗りの箱に収納されている。今度出したとき、思文閣の納品書の日付を確かめようと思う。

中田宇南という男

「紀州新聞」昭和四十年七月十五日掲載

私は早くから、「師友録」或は「わが師わが友」と題して、わが心の師や親しい友人達を随筆風に、あれこれ書いてみたいと考えているのだが、なかなか思う様にペンが運ばない。余りに身近な人のことは却って書きにくい。しかしそれでは何時までたっても実現しない。思い切って取りかゝってみる。

も早、十年も昔になる。紀州新聞創刊十周年の時、私たち同紙の寄稿家一同が、ある日料亭岡光で御馳走になった。この時私の席から数人を隔てゝ、しきりに微笑をおくってくれる二人があった。一人はいがぐり頭で一寸禅僧の様な感じの男であり、もう一人は眼光のやゝ鋭い長髪の男で、どこか直木三十五に似ていた。やがて宴会が始まり坊主頭の人物が中田宇南で、長髪の男が小谷緑草とわかった。あいにく此の日は別室で歯科医師会があるとかで、中田氏は途中からその方へ出たが、緑草と私はしたゝかに酔っ払い、おそくまで町をうろついた。両氏とはそれ以来の交友である。

その後、私は屡々印南へ出かけては御馳走になり、帰りには酔歩まんさんとして二人に駅まで送って貰うのが例になった。また中田・小谷両夫婦と茅屋で酒を飲んだりもした。

やがて紀州随想で三人共同人になった。諺にも「蓼食う虫もすきずき」とやらで、文章の好みも人各々で異なるが、私は中田宇南のファンである。彼の随想は欠かさず読んでいる。飄々として、とぼけた味わいが何とも云えぬ。勿体ぶった説教や気取のないのも気に入っている。

いつであったか、これも十年、もっと昔になるかも知れぬ。彼は「こほろぎ」と題する随想を、本紙に寄せたことがある。

ほらこほろぎが鳴いているで、内の啓吾は賢い子、二人の姉ちゃん別品さん、て鳴いてるで。

文中の宇南は三人の子に、こう話しかけるのである。自分の子を賢い子の別品さんのと、宇南なればこそ臆面もなく書けたものだ。いさゝかの嫌味もない。全く稀有の人柄である。

あれは大正初年頃であったろうか、高山樗牛が「文は人なり」と盛んに称えたことがある。文は人であるか如何かは姑くおいて、この言葉は中田宇南に於て、ピタリと当てはまる。私も、かなり駄文を弄するが、文章では我ついに及ばずの感がふかい。

中田宇南は実際不思議な男である。茫洋としているから、何の苦労もなく大きくなったのかと想像したが、貧家に生まれ具に生活の辛苦を重ね、重症の結核では屡々死線を彷徨し、苦学力行、歯科医となり、今次の戦争では軍隊生活まで経験している。宇南かって軍隊にいた時、小隊長がしみじみと

中田、わしはお前を見ると、つくづく情けのうなる。

と述懐したと聞いた。この位、要領の悪い、然も善良そのものの男を部下に持てば、誰にしても情のうなるに違いない。全く、よくぞ歯科医になったものである。歯科医以外では恐らく何をしても食えまい。役人や会社員は三日と続くまい。

宇南の親友・小谷緑草曰く。中田宇南は殿様だよ。汽車に一人で乗れないのだ。第一切符が買えない。旅行の時は奥さんが秘書役に必ず同行する。宇南と一日中歩いてもお茶一つのもうとしない。どうや疲れたコーヒーでも飲もうと誘うと、よかろうとついてくる。

中田宇南が歌集「河」を出して、もう三年程になる。河の出版記念会は空前の盛会であった。歌のよさは勿論だがやはり彼の人柄である。殊に女性の人気が素晴らしい。どんな会合でも彼が一度現れると、「わあっ中田先生」と女性はドッと彼の周辺に集まる。宇南は幸福そうに女性群の中で笑っているのである。然し今度という今度は宇南も殿様ではすむまい。女性群の中で笑ってばかりもいられまい。それは盛業中の歯科医をやめて、未知数の針灸治療に転向したからである。

宇南氏から歯科医をやめて針灸をやりたいと聞いたのは二度や三度ではない。だが、まさか実行するとは思わなかった

が、本当に針灸をはじめたのである。飄々として温厚に見えるが、芯の強い男に違いない。針や灸がどれほどのきき目があるのか私には分からない。だが宇南があれ程いう以上、間違いはあるまい。御坊出身の日高昌克は、かって盛業中の耳鼻咽喉医院を弊履の如くすてて画道に志し、やがて独自の画風を確立した。それとこれとは話は違うが、齢(よはい)六十にして人生の再出発をはじめた宇南よ、君の前途に栄光あれ。

死について

「紀州新聞」昭和四十年八月十五日掲載

年度末を控えて仕事に追われていた私は、しばらく芝口先生をお見舞いするのを怠っていた。二月二十八日は日直と宿直に当たっていた。出勤しても仕事がないと思うと、いくらか気持ちに裕りがあった。私は少し早めに家を出て葵羊庵をお訪ねした。

玄関に入ると、何か只ならぬ気配が感じられた。そして嗣子・藤雄氏から先生が昨日来危篤状態であること、主治医から、もはや時間の問題で、今夕ごろが危いと宣告をうけたことなどを聞いた。

先生は深い眠りを続けておられた。枕頭の家族の方々と二つ三つ話を交わし、容態切迫の際は、お知らせ戴くことにして辞去した。暗然たる思いで、ものゝ半町もきたと思うと、藤雄氏が追いかけてこられ、先生が眼をさまされ、話があると云われている旨を伝えられた。引きかえして先生の枕頭にお伺いすると、意識は極めて明瞭であった。低いお声であったが、一語・一語たしかであった。

御家族から、いよいよ最期が近い様子だとお知らせがあり、私が駈けつけたのは其の日の午後六時ごろで、短い二月の日は、すっかり沈んでいた。先生はすでに昏睡状態であったが、やすらかなお顔であった。時々、呼吸が逼迫したり脈拍が結滞したが、苦しそうな表情はどこにもなく、午後九時十分・肉親の方々に見まもられながら、八十三歳の御生涯を終えられた。まったく羨ましいような大往生であった。

どういう訳か不思議に、親しい人の死の間際や、臨終の席に行きあわした事がある。和田喜久男氏の死の前日にも遇然お伺いした。長い持病の上に胃腸障害をおこされた和田さんは、意外にお元気で縁側の机によっておられた。私ども郷土研究グループの噂話や、とりとめのない世間話の末、ご自愛を祈ってお別れした。後で、和田さんは此の日の私の訪問をひどくよろこばれ、「清水さんて、親切な人やナ」と、夫人に述懐されたと聞いた。そして、その翌早朝にわかに逝去された。よく高僧の遷化を「泊然として逝く」と形容するが、和田さんの死こそまったく泊然として逝くという言葉が、ぴたりとあてはまる。

これも十年ばかりの昔になる。仲間の数名と上阿田木神社の神宝を拝観した際のことである。途中の美山村熊野川に久しく病臥中の伯父を見舞うべく、私は仲間より一足はやく出発した。従弟が別段変わりはないようだと病室へ案内した。ところが、どうも様子が尋常でない。

「おいおい、何だかおかしいぜ」

私の声に家族があわてゝ集まった。かくて私が着いて半時間ともたゝぬうちに、伯父は八十いくつで眠るように息を引きとった。これも、おだやかな臨終であった。

今日はお盆のせいか妙に故人のことばかり書いたが、一つは先月十三日の小谷緑草君の随想「死にたくない」に一寸ひっかゝったのである。小谷君はあの随想で私が「八十までも生きるつもりで、死んでも死にきれん」と話したと書いていた。

なるほど私は八十まで生きるつもりであると話したことがある。本当はもっと長生きをした上、芝口先生や和田さんのように、枯木の如く、ぽっくりと死にたい。然し人の寿命ばかりは如何ともし難い。明日にでも命が終わるかも知れないのであって、その時はおとなしく天命に従うべきだと考えている。「死んでも死にきれん」は見苦しい。そんな態度は未練というもので、私は執りたくない。

熱願冷諦という言葉を何かで読んだことがある。事を成しとげるために懸命に働く。だが、どうしても駄目だとわかると「あゝそうですか」と、あっさりあきらめて引きさがるという意味である。私も一度、定命（ていめい）が尽きた際は悪あがきせず、一切を放下して「皆さんさよなら」と笑って死んでゆきたい。以前からこう覚悟をきめ、人にも話してきたが、人一倍煩悩熾んな私である。いざとなると、どんな醜態をさらすか心もとない。しかしそれならそれで亦よかろうではないか。

小谷君にも確かにこう話したつもりだが、何しろ酔余の放談であった。或は間違っていたかも知れぬ。

「紀州新聞」昭和四十年八月二十二日掲載

万葉集と日高 ①

二、三日前の宵であった。突然、村の青年たちが見えて、万葉集と日高地方の話を聞きたいと頼まれた。

失礼な云い方だが、一寸見たところでは、万葉集の如き古典中の古典とは不似合いな顔ぶれなので、諸君はこれまで万葉集を読んだことがあるのか、また、どうして、にわかに古臭い万葉集の話などを聞く気になったのかと尋ねてみた。青年達の説明はこうだ。

最近、青年団の有志で文芸部をつくった。

何か事業をやらねばならない。国道筋を走っているうちに、万葉歌碑が目についた。さしあたり、日高地方の万葉遺蹟めぐりでも初めようではないか。

こんな具合で私の所へやってきたというのである。万葉集は「まんようしゅう」と読む。「まんにょうしう」と気どった読み方をする人もあるが、現代では「まんようしゅう」と読むのが普通である。万の言葉を集めた集となすのと、万世の集となす二説があるが、学者間でもまだ結論は出ていない。今から千二百年ほどの昔、奈良時代の末ごろにできた、わが国でも最も古い歌集、全巻数廿巻、歌の数はかぞえ方によって多少の違いはあるが、長短あわせて約四千五百首にのぼる。もう古いことになるが私が青年のころ、橋田東声という歌人が書いた「万葉傑作選」と題した本があった。万葉集四千五百首の中から、百数十首の傑作を選んだ注釈書で、本の大きさも手ごろであったし、注釈もなかなか親切であった。私はこの本ではじめて万葉集を読んだ。生意気ざかりの年ごろとて一日一首づつ暗記して、全冊を丸暗記してやろうなどと意気込んだが、無論、途中でくじけてしまったし、本も何時の間にか本棚のどこかへ見失った。それでも

千鳥鳴く佐保の河原のさゞれ波　やむ時もなし我が恋うらくは

かくのみにありけるものを妹もあも　千とせの如く頼みたりけり

等々数拾首の歌が、どうかのはずみで、今でもなつかしく思い出されるのである。

「紀州新聞」昭和四十年九月十五日掲載

御坊の古本屋

つい十日ばかり前のことである。仕事からの帰り、本町通りの上手で、新らしい古本屋が目についた。「おや、いつできたのだろう？」私は物好きにも店頭に自転車をとめた。本町文庫と看板があがっていた。中年の男が一人店番をしていた。「いつ開店したの」ときくと、主人は「二ヶ月ほど前」と、ぽつりと答えた。

本棚を一わたり見たが、私の欲しい本はなかった。しかし久しぶりで御坊にも古本屋ができたということは、ひどく私の心を明るくした。

私のあやしい記憶をたどると、かって御坊にも古本屋が二軒あった。一軒は昭和三十七年（一九六二年）に廃業した田端一郎氏の革新堂であり、もう一軒は新薗橋の近くにあった小池某の「ひつじ屋書店」であった。小池某は確か美浜町浜の瀬の人と聞いたことがある。彼は温厚な文学青年で、昭和十一・二年（一九三六・七年）ごろであったか、雑誌「キング」の懸賞小説に応募した「国境の町歌」が入選したのを覚えている。彼はまた一時、道成寺の執事のようなことをした関係で、谷崎潤一郎が道成寺に詣でた際もらったという、この文豪の短冊を大事にもっていた。「ひつじ屋書店」閉鎖の時期や、小池某その後の消息を知り

たいものである。

革新堂の田端氏とはまだ先代が岬通りで風呂屋と、古本屋を兼業していた大正十四・五年代（一九二五・六年）からの知り合いである。私は口髭の美しかった先代を相手に、ろくでもない文学書を売ったり買ったりした。気さくなよいおやじさんであった。

革新堂田端氏はその後、本町通りと内本町通りの角の現位置に進出してきた。学校を出た一郎氏も店を手伝うようになって、本もだんだん充実してきた。一郎氏は時々自転車に古本を積んで、近村の読書家や村役場、学校をまわったりした。

あれは昭和二十三・四年（一九四八・九年）ころの事であったと思うが、敗戦後の筍生活のため、田舎でも蔵書を処分する人が多くなり、革新堂にもめずらしい本が並ぶようになった。ある日わたしは此の店で、「紀伊国名所図会」全二十三巻の美本を手に入れた。また「新宮市誌」や「串本町誌」も買い求めた。銭・金のことをいうのはおかしいが、今から見ると丸で只のような値段であった。昭和八年（一九三三年）四月二十四日、紀勢西線の列車に触れ、多くの人々の愛惜のうちに事故死した崎山信吉の句集「野葡三句集」を見出したのも、やはりこの時分のことであった。

こう書き並べると私の古本漁りは、いつもかなりの成果をあげているように見えるが、そうは問屋が卸さない。これもそのころのことであった。ある日、ぶらりと革新堂を訪ねると、日本古典全集の全巻がずらりと書棚に並んでいた。「ほう、見ごとだな」私は思わず嘆声をもらしながら手に取った。周知のとおりこの叢書は、その校訂の厳密さで知られているが、註釈がないため初学者には少し難しすぎる憾みがある。

どうしたものか、私はとつおいつ思案の末、その日はそのまま帰った。日本古典全集はその後も一、二週間革新堂の棚に並んだままであった。こうなると人間の根性は図々しくなる。「大丈夫、売れはすまい。そのうち買おう」と考えたまま、また数日がすぎた。

そうしたある日、この叢書は突然、革新堂から姿を消した。「しまった」と思ったが後の祭である。未練がましいが買主をきいたところ、先年物故された西川平吉先生が見えて「ほう、これは、これは」とその場で買って行かれたということであった。今私の手もとにはこの叢書のうち、宣長の「玉かつま」や「風土記集」その他、十数冊を蔵するのみである。せめて「吾妻鏡」の全巻だけでも買っておくべきだった。自業自得とは云え心残りである。

随想をここまで書いた私は「そうそう、佐竹粂造先生も、一時古本屋をされたことがある」と気がついた。場所は日吉座通りの西の方で、たしか今の「みかど支店」の筋向かいあたりであった。佐竹先生は郷土洋画界の長老で、今もお元気で秀作を発表しておられるが、書棚に並んでいたのは殆んど、先生御自身の蔵書ではなかったと思われる。

もとより先生は商売などに向くお人柄ではない。書店の経営もほんの少しの間にすぎなかった。私がこの佐竹書店で買ったものに、津田青楓の「青楓随筆」があり、今に愛蔵している。

万葉集雑話

「紀州新聞」昭和四十年十月十五日掲載

いつであったか中村兼子夫人にお会いした時、由良町へも万葉歌碑を建てたいものだと、洩らされたことがある。そう云えば万代歌碑は南部町岩代に二基、御坊市野島にも一基あるのだから、古い歌枕の地由良町にも、ほしいというのは強ち無理な願いではない。

この夏のことであった。村の青年達が突然、万葉集と日高地方の話をききたいと見えたことがある。失礼な云い方だが一寸見たところ、万葉集のような古典中の古典とは、およそ不似合いな顔ぶれなので、どうしてこのような古い歌の話などを聞く気になったのかと尋ねてみた。青年達の説明はこうだ。

最近、青年団の有志で文芸部をつくった。

部員が国道筋を走っているうちに、万葉歌碑が目についた。ひとつ郡市内の万葉遺蹟めぐりをやろうではないかと話がきまった。それで私の所へきたというのである。

もう古いことになるが私が青年時代に、橋田東声という歌人が書いた「傑作集・万葉集評釈」と題した本があった。書名の通り万葉集四千五百首の中から、四百八十六首を撰して、註解と評言を加えたもので、B六判三百九十頁という本の大きさも手ごろであったし、歌学者でない歌人東風の自由な評釈が、若い私の心を捉えた。私はこの著書で初めて万葉集の一部を読んだ。生意気盛りの年ごろのことである。一日一首ずつをおぼえて、一年がかりで全冊を丸暗記してやろうなどと意気ごんだが、勿論、途中でくじけてしまった。それでも面白いものである。何かのはずみに、ふっと

千鳥なく佐保の河原のさざれ浪　やむ時もなし我が恋ふらくは

の相聞歌や、

かくのみにありけるものを萩が花　咲きてありやと問ひし君はも

の挽歌などが思い出されるのである。

さて極めて大雑把な計算であるが、万葉集の中で紀州関係の歌は長短あわせて大体百首を数える。このうちで日高地方を詠んだもの、もしくは日高地方で作られた歌は二十一首であり、町村別に並べると、

由良町　四首　　美浜町　六首　　名田町　一首
印南町　一首　　南部町　九首

となるかと思う。

この表を見ても分る様に歌が作られているのは、すべて海沿いの村々である。いうまでもなく古くから知られていた牟

婁の湯（今の白浜温泉）への街道筋であったためである。もっとも由良町や美浜町は熊野古道からやゝ外れてはいるが、海路が重視されていたのである。

話はかわるが昭和二年（1927年）三月、故森彦太郎先生が「紀州文化読本」を刊行された時、巻末に近刊予告として、「南紀実修女学校校長・森彦太郎著・紀伊に於ける万葉人の足跡・四六判・約三百頁」という広告をのせ、

万葉集に現れたる紀伊の歌の考察である。歌意の（略解）はもとより、作者・作中の人物・史実・地理・博物学にわたり、多数の写真版及び地図を挿んで審に究明せるもの。「紀州文化読本」出版のために被るところの創痍癒ゆるを待って刊行する。と抱負まで述べられておられるが、遂に刊行に至らなかった。かえすがえすも残念である。

また今春長逝された田端憲之助翁も、居村の「浜ゆう短歌会」で万葉集を一、二首ずつ講義された。この方は田端翁の好みからか、東歌の数首を講じられたのみで、紀州関係の歌に及ばぬうちに逝去されたのは惜しいが、いま最後の講義が録音されていて、翁をしのぶ好個の記念となっている。

考えてみると近年の万葉学の進歩は著しいものがある。私ども初学者むきの日比野道男氏による「万葉地理研究・紀伊編、昭和六年六月刊」はすでに稀覯本となっているが、昨年から今年へかけて、犬養孝博士の「万葉の旅」のような手頃な案内書も文庫版と愛蔵版の二種でている。観光ばやりで豪華な温泉旅行もよいが、さわやかな秋風の中を近くの万葉遺跡を探るのも、また別の趣があろう。短歌に興味をもつ人々ばかりでなく、郷土の方々におすゝめしたい。

註＝最近では万葉集の日高地方の歌は二十二首とされている。南部町が十首である。

ハゼ

「紀州新聞」昭和四十年十一月十四日掲載

立冬が数日前にすぎたというのに、どうした加減か割合あたたかい日が続いている。櫨紅葉の美しさを、わが家の小庭で眺めたいとの横着な考えから、二、三年前、家内中の猛反対を押し切って、近くの山から移植した櫨の小木も、まだ青い葉をしげらせたまま紅葉の気配はない。

燃えるような紅葉の見事さは、暖かい関西では味えないときくが、櫨と柿紅葉は例外としてよかろう。戦前には川岸や田畑の隅に、よく櫨の木がのこっていた。子供心にも、まっ赤に紅葉した櫨の葉を眺めては、そこはかとない詩情を感じたものだが、ちかごろはすっかり姿を消した。河川の改修と農地の開墾で犠牲になったのであろうか。

春さきの櫨の新しい小枝をもぐと、うすい樹液が出る。体質にもよるのだろうが皮膚の弱い者は、この樹液にふれると湿疹をおこす。これを私の村では「はぜにかぶれる」というたものである。

「櫨の木のはたを通っても、かぶれるというのに、なんでそんなショウもない木うえるのや」
家族たちは口を揃えて、こう反対した。まったくそのとおりで、ショウもない話には違いないが、とにかく一本だけ植えることにした。なるべく抵抗の少ないように、二、三寸ばかりの小苗をこっそりと運んだ。うっかりすると眼のわるい老母が、雑草と一緒に引き抜く心配があるので、御苦労にも櫨の周囲を竹でかこった。それがもう私の背丈より伸びた。人間でも植物でも、ろくでなしは成長が早いらしい。
随想締切日を目の前に、大慌てにここまで書いたが、櫨の木を、ろくでなしときめつけたのが一寸気になった。昔よんだ本の中に古代の中国や日本では、櫨の実であったか幹であったかを焚きしめて染料をとり、王侯の衣服を染めたとあったのを思いだしたからである。遠い中国や一般とは縁のうすい王侯のことは別としても、つい最近までは私どもの大事な灯火であった蝋燭が、この櫨の実からつくられていたのを忘れていた。
私どもが子供のころ、白馬山の紅葉が散って、そろそろ日高平野に北風が吹き初める季節になると、どこからともなくハゼの実を集める商人がきて、村の川べりのハゼの木に上ってハゼの実をとっていた。櫨商人はいつも黒っぽい筒袖の仕事着を着ていた。木の枝にはハゼの実を入れる竹籠をぶらさげていた。鉛色の冬空を背景に、すっかり葉をおとしたハゼの木の上で働くハゼとりの人は、子供の私には何か奇怪な物語の人物のように映ったものである。
資料を置いた場所が分からぬため引用を省略するが、戦前まで村々でみかけたハゼの木は、決して天然・自然に生えたものではないらしい。おそらく江戸時代のことと思われるが、藩内の産業奨励に熱心な藩主が、地方の篤農家に命じて川岸の荒地や、山野の空地に植栽せしめ、もって蝋燭製造の原料としたのであった。
いま私の手もとに明治十三年（一八八〇年）六月十九日、御坊村から県庁と郡庁に上申した、簡単な「御坊村誌」の写しがある。もと日高郡役所に保存されていたのを何処からかみつけ出し、故芝口常楠先生が写本されていたのを、さらに私が筆写したものであるが、その産物の部に、

綿花　千五百斤質美　　清酒　二百五十石質美　　醤油　百二十石質美
晒葛　六千三百十八〆四百目質美東京へ輸送す　　かせ糸　二万二千六百斤質美大阪へ輸送す

等と並んで
蝋燭　一万四千五百二十貫質美東京へ輸送す
とある。製蠟業は明治初期には、御坊村の重要産業の一つであった訳である。その後ランプが普及し電灯か発明された。最後には西洋蝋燭が出て木蠟は完全に姿を消した。けれども、かっては御坊村の重要産業として羽振りを利かした時代もあったのである。その原料たるはぜの木を「ろくぜなし」よばわりは申訳ない。
私が家内中の総意に背いて櫨の移植を強行したのは、紅葉の美しさもさることながら、自分でも気づかなかったが、少

年時代に見たはぜとり人の奇怪な姿への郷愁が、心のどこかに残っていた為かも知れぬ。

紀州新聞回想

「紀州新聞」昭和四十年十二月二十二日掲載

紀州新聞はこの二十五日で、創刊満二十周年を迎える。心からおよろこび申し上げる。

いつか東公先生も書かれていたが、二十年という歳月は短いようでもあるし、長いようでもあった。私の記憶だけでもこの間には町村合併あり、七・一八水害があった。ジェーン台風があったし、西川事件や、煙樹浜伐採問題があった。勤評実施や知事三選反対で世論が沸いたのも、つい昨日・今日のような気がする。

紀州新聞が創刊された昭和二十年（一九四五年）ごろは、私はまだ大阪の会社に勤めていた。私が郷里に引き揚げてきたのは、昭和二十三年一月であった。その時分の紀州新聞はタブロイド型というのであろうか、いまの四半裁判の小さなものであった。紙もインクも現代とは較べものにならぬ程、貧弱なものであった。むろん社外の寄稿は殆んどなく、わずかに井上豊太郎先生の健筆が時たま紙上を飾り・故・森草枕翁の評論が特別寄稿と、珍重された時代であった。

私はその時分からの読者である。思えば紀州新聞とは長いつきあいになる。古い諺に「蛇は寸にして人を呑む」というのがある。当時の紀州新聞は僅々小型二頁の、いわば小さい蛇であった。だが、そこに何か一本の筋が通っていた。信念があった。主張があった。新しい言葉でいえばバックボーンがあった。寸にして人を呑む気概があった。それが新聞を読んでいる私には、ひしひしと感じられるのであった。

私が紀州新聞へ時々下手な雑文を書き出したのは、この気概にうたれたからであった。私の如きものゝ雑文が紀州新聞発展のために、もしいくらかでも役立てばという考えからであった。たのまれもしないのに、まったく物ずきな話である。

私は時々、原稿をもって新聞社を訪ねた。あわて者の私の朝はわりあい早い。八時半の始業をたいてい八時には出社する。その途中で新聞社へよるのだが、現地さんも浜脇さんもきまってもう仕事をしている。率先垂範と口でいうのはやさしいが、よほど仕事に愛情がなければ続くことではない。

源地さん（源地氏とか理事長とか社長とか書くべきであろうが、それでは感じが出ない、敢えてこう呼ばして貰う）には、随分したしく願っている。いつもお世話になりっぱなしである。酒盃の間いろんな話もおききした。だが十月二十八日、二十九日の余滴の記事のお話は、これまで、おくびにも出されたことはなかっただけに感動した。この創業の辛苦があってこそ、今日の繁栄があったのである。思えば風雪幾山河のけわしい道であった。生意気をいうが、一層のご精進をお祈りする。

話が妙に堅くなった。今日は紀州新聞の思い出を、あれこれ書くつもりであった。もう七、八年にもなろうか、一夕、源地さんにご馳走になったことがある。座に長身白皙（はくせき）の見馴れぬ男があった。富安太郎であると紹介された。彼はその少し前から紀州新聞へ寄稿をはじめていた。体つきに似ず恐ろしく酒の強い男であった。雄弁ではなかったが、話のおもしろい男であった。

彼はその後も三文随想と人を食った題名でさかんに時事評論めいた随想を連載した。数日前スクラップブックを整理していると、三文随筆の切抜きが出てきた。取り出して読みかえしたが中々おもしろい。時事評論などは一流の評論家のものでも、時が経つと色があせてくるが、彼のものは今でも結構読ませる力を持っている。

その夜であったか、二回目であったか三回目であったかも忘れた。やはり三人で痛飯したことがある。みんなご機嫌になって二次会に出かけ、富安太郎が飄々としてワルツを踊り、私はどこかのバーへオーバーを忘れて帰り、翌朝泡をくったことがある。

彼は一年ほど三文随筆を書きまくったあげく、いま郷里の中辺路町栗栖川に帰り、本名・岩見敏二で司法代書をしている。妙に忘れがたい寄稿家である。

岩代の絵馬

「日高新報」昭和四十一年一月一日掲載

午年にちなんで絵馬のことを書こう。絵馬というのは、宮や寺に奉納する絵の額のことである。必ずしも馬の絵には限らぬが、古くは馬を描くのが本当であった。それで絵馬と云う名が出たようである。

絵馬の起源について近刊、中村直勝「大和のやしろ」―丹生川上下社―の条ロ

淳仁天皇天平宝宇七年（七六三）旱であったので黒毛馬を奉ったこと。光仁天皇宝亀六年（七七五）霖雨であったので白毛馬を奉ったことが続日本書紀に見える。爾来、降雨を祈る時は黒毛を、止雨のときは白毛を奉ることを恒例とされた。霊験著しかったことは古書に散見する。王朝時代を通じて、大きな祭事であった。

奈良に都があったときならまだしも、平安の京になってからは、降雨・止雨を祈るときに、官幣と共に献馬しても、それを社頭まで曳くのは大変な難儀である。神祇官で献馬を預かった官吏は、官庁を出ると直ぐ、待ち構えておる伯楽に売却して、金銭に代え、それを社頭に進めたこともあった。その間いろいろの物語が生まれている。

後には馬の絵をもってこれに代え、その絵を社頭に掲げておくことになった。だから格式ある絵馬は、白馬・黒馬の二面揃えて懸けてあったともあり

柳田国男監修「民俗学辞典」絵馬の項には、

古く神社に馬を奉納する代わりに板馬を献じ、さらに簡単に絵の馬を以てかえたのが絵馬だという通説には疑問の点が多い。絵馬には馬以外の板絵が多い点から見ても、エマの語が普及する以前にこの習俗があったわけである。絵馬は本来祈願のために奉納されたものである。目とか手足とか身体の悪い所を描いて、神仏にここをなおしてくださいと注意を喚起するのが本旨であった。したがって牛馬の絵を描いたのも、その安全を祈願するものであった。―中略―ただし絵馬の中でも著名な画家などの手になった額絵馬と称するものは、小絵馬とちがって全く社寺に対する奉サイ（奉斎）の意より出たものである。

とある。

中村・柳田両博士の絵馬起源説はともかくとして、私どもが子供のころは、どこの神社でも絵馬の三枚や五枚は懸かっていたが、最近はすっかり姿をひそめた。日高地方で私の知っているのは、御坊市北吉田の八幡神社にかなり大きいのが一枚、印南町松原の松原神社に拾数枚、南部川村西本庄の須賀神社に、有名な熊代繁里が奉納した三十六歌仙があるが、これは絵馬というには若干の疑問が残る。

ある席でこんな話をしたところ、絵馬なら西岩代八幡神社に、今もかなり残っていると教えられた。岩代は現代の南部町の一部になっているが、もとの岩代村である。この岩代は国鉄岩代駅を中心にして、東・西岩代にわかれ、西にも東にも八幡社があるが、絵馬ののこっているのは西岩代八幡神社の方である。

西岩代八幡神社は岩代駅から西北、約一㎞ばかりの丘上にあった。社伝によると中古、東岩代八幡社から勧請したものと云い、明治時代は徴兵のがれの八幡社として知られていた。高い石段を昇ると、掃除のゆきとどいた参道に出た。浅い雑木林では、名も知らぬ小鳥が鳴いていた。やがて長床の前へ達する。絵馬はこの長床一ぱいに懸けられていた。なるほど沢山の絵馬であった。

こころみに数えてみると八十一枚あった。あまり古いものは見当たらない。明治十五年（一八八二年）奉納とあるのが最も古いようであった。明治三十年代のものが多かった。大正時代のものもあった。絵柄は馬をえがいたものが四枚、武者絵が十四枚、あとは風景もあれば風俗画ようなものもあり、写真もまじっていた。奉納者はやはり近在のものが大部分であるが、中には

松原村吉原　三十一才男
切目村西之地　湯川　庄助
切目川村古井　船永　為義
南部町埴田　土井　嘉平

というようなものもあった。

村々の宮寺から絵馬が影をひそめた今も、この宮のみ多くの絵馬を伝えている理由は、よくわからないが、まず明治時代にこの神社にあった、徴兵のがれの信仰をみのがす訳にはゆかぬ。明治政府の懸命の強兵策にかかわらず、国民感情の奥には、徴兵忌否の思想があった。兵役をいとう国民はひそかに絵馬を奉納して、徴兵のがれを祈願したのであった。

もう一つ、これはずっと時代は古くなるが、平安時代後期の今昔物語に、南部の絵馬の話が出ている。当時から南部や岩代地方では、祀前に絵馬を奉納する習俗があり、この伝統が今も西岩代八幡にのこったのであろうか。後考をまちたい。

「梅洋新聞」昭和四十五年七月十四日掲載

随筆　みなべ集

日高地方の絵馬

もう五、六年前の正月に、私は御坊の新聞へ西岩代八幡神社を中心に、日高地方に現存する絵馬について書いたことがある。したがって、本稿はいささか、二番煎じの感をまぬがれないが、御坊の新聞は南部地方で、あまり読まれていないようなので、一、二の補筆を加えて、もう一度くりかえしてみる。さて絵馬の起源については専門家の間において、いくつかの説が唱えられているが、ここでは簡単に、

古く祈願のために神社に馬を奉納したのが代わりに板馬を献ずることになり、さらに省略されて、馬の絵を以てかえるにいたった。

という通説だけを紹介しておく。

ところで私たちが子供のころは、どこの神社にでも、三枚や五枚の絵馬がかかっていたが、最近はすっかり姿をひそめた。私の知ってる範囲では、御坊市吉田の吉田八幡神社に、かなり大きいのが一枚と、印南町松原の真妻神社に拾数枚ある。また先年、南部川村西本庄の須賀神社に詣でた際、幕末の南部が生んだ有名な国学者、熊代繁里が奉納した和歌を繁里自身が書いた十六歌仙の絵馬であった。当時は神社の長床にかけたままであったため、美しい文字の跡も消えそうで、惜しいことに思ったが、現代は大事に保存されていると聞いた。当地方残存絵馬中の逸品である。他に年代の古いものでは、道成寺の本堂に掲げられている一枚で、それには、

所願成就必令満足　慶安五壬辰夫（一六五二年）　薗村西田庄太郎

その他の文字があって、まさに勇走せんと逸りたつ駿馬の姿を描き、画風も尋常でない。慶安五年は今から約三百五十

年の昔になる。郡内最古の絵馬であろう。

さらに、その数において最も多いのは西岩代八幡神社のそれで、昭和四十一年（一九六六年）秋私がここに参詣した時、長床に八一枚掲げられているのをみた。明治十五年（一八八二年）奉納とあるのが古い部で、明治三十年代が多く、大正時代のものもあった。絵柄について言えば、馬を描いたものが四枚、武者絵が十四枚、あとは風景画風のもの、風俗画風のものもあり、写真も混じっていた。奉納者の住所はやはり南部町内が大多数で、中には松原村（現美浜町）、切目村、切目川村と今の印南町の人物もあった。

当社はどういういわれか明治時代から明治時代から徴兵のがれの信仰を集めていた。明治以来の政府の懸命の強兵政策にもかかわらず、国民感情の奥底には、徴兵忌否の思想が流れていた。兵役をいとう偽らぬ庶民の悲願は、ひそかに当社への絵馬の奉納となってあらわれたのであった。さればこの神社に伝えられている絵馬は、単なる希少価値だけでなく、明治、大正政府の富国強兵政策の裏面資料として、甚だ興味ぶかいものがある。

しかし、当社における絵馬の保存状態は、必ずしも良好でなく、額の損じたものや、文字や絵の消えかかったものが大分目についた。中には長床の床上に散乱したものもあった。いまのうちに関係者の配慮をお願いしたい。

和歌山の土馬

「紀州新聞」昭和四十一年一月一日掲載

午年にちなんで、わたしくの愛蔵している和歌山の土馬を語ろう。土馬というのは文字どおり土をこねて馬の形につくり素焼きにしたものである。もう少し説明を加えると

まだ徳川幕府の力がさかんな頃である。紀州候の御浜御殿の鬼門が、戦災前の和歌山市東長町の正住寺にあたっていた。そこで縁起をかついだ藩邸は、この寺の境内に鬼門天をまつり、寺詣りの男女に開放したところ、霊験あらたかなりと評判が高く、特に子供の腫物になやむ親たちの祈願がおおかった。

いつごろからともはっきりしないが、鬼門天祠の前に古くから、小さな土馬が供えられるようになった。小児の腫物に苦しむ親たちは土馬を借りて帰り、「クサ食え、クサ食え」と唱えながら、腫物の上を撫でて禁圧（まじない）をするのである。腫物の俗言「クサ」と、馬の食糧「草」を洒落あわしているところは、下手な落し噺めくが、病者は案外大まじめであったと思われる。こうして祈願の末、全治すると、さきに借りた土馬のほに、お礼馬を一個そえて奉納した。その風習は明治四十年（一九〇七年）代、製作者の老人が亡くなるまでつづいた。

また正住寺のほかに、市内さんご寺境内の信尾稲荷にもこの風が生じ、やがて本家の正住寺をしのぐ程有名になっ

た。その後市内吹上にも土馬を奉納する所ができた。やはり「クサ食え」の民間信仰に由来するものであった。

武井武雄著「日本郷土玩具」＝昭和五年刊（一九三〇年）＝の記事を、わたし流に抄出したのである。

つまり土馬は江戸時代から明治末年にかけての和歌山の庶民信仰の所産であった。それが大正半ばごろ郷土玩具の流行にしたがい、紀州の代表的郷土玩具として、にわかに珍重されるに至ったが、もともと玩具としてつくられたものでないことは、同じ和歌山近在の栗林八幡宮境内、日吉山王神社の瓦猿や、同市、津名天神その他の瓦牛と軌を一にしている。

久しく訪ねぬため今はどうなっているか知らぬが、復旧後の和歌山城天守閣第一層に、紀州の郷土玩具を展示した一室があった。お馴染の御坊天神や鯛ちん、田辺の「土めんこ」、和歌山の瓦猿にまじって数十個の土馬が並んでいた。

土馬はいずれも丈け五・六糎ぐらいの小さなもので、素焼きあるため地肌は赤茶けているが、長く祠前に奉納されていたので、垢をつけてうす汚れている。名も知らぬ裏長屋の老爺が、たばこ銭かせぎに土をこねて焼いたものだけに、極めて粗末なしろ物であるが、そこにまた名工作品には見られぬ味わいがあり魅力がある。大げさにいえば埴輪がもつ、あの大らかさと悲しさである。

私は一目みて、すっかり土馬に魅せられた。何とかして手に入れたいと考えたが、金銭で買えるしろ物ではない。無論、骨董屋は相手にすまい。古道具屋にも、こんな馬鹿げた物はないにきまっている。知りあいの古本屋にも話したが

「昔は、ごろごろしていましたがね」

と気のない返事であった。こうなると一層執着が増す。私はその後も土馬を見るだけが目的で、二度も三度も天守閣への険しい道を通った。

そんなある日であった。和歌山の田中敬忠先生から小さな小包がとどいた。紙函をあけると、可愛ゆい土馬が二個、綿にくるまれてねむっていた。私は思わず「アッ」とよろこびの声をあげた。和歌山城ではじめて土馬をみて、数年後のことであった。田中先生にたのまれて御坊天神をお世話したお礼に土馬がほしいと希望しておいたのだが、こう早速とどけてくれるとは思わなかっただけに、私の感激は大きかった。

土馬　二個、田中敬忠先生恵贈
昭和三十八年（一九六三年）十一月八日

土馬をおさめた紙函の裏に、私はそわそわしながら書きつけたものだ。

今年は午の正月である。久しぶりで土馬を机辺にかざって、正月餅の一つも供えてやるつもりである。

「紀州新聞」昭和四十一年二月二十二日掲載

籔椿

わが家の椿が、二、三輪の花を持ち、前の厚ぽったい葉かげから、見せはじめた。

昨年十二月初旬、由良町へ出かけた際、江の駒から吹井へ向かう途中で、この冬はじめての椿の花をみかけた。「ほう、もう椿の花が咲いている」この花というと目のない私は、用を終えての帰り、わざわざ車をとめて貰い、その一枝二枝を、こっそり折りとったことであったが、あれから数えて三月半になる。私も随分スローモーションだが、わが家の椿も主人の性に習い、ひどくのんびり構えたものである。

もう大分前になるが町の書店に、豪華な椿の写真集がきたことがある。少し値段がはっていたため、店頭で立ち見をしただけにとゞめたが、このように高価な本が出版されるほど、椿の愛好者はおゝいのである。特に近年は世界的に、わけてもアメリカあたりの椿ブームは、大変なものと聞いている。ちょっと憎まれ口めくが万事はで好みのアメリカ人に、渋い椿の花の味わいが、どこまでわかっているのだろうかと気になる。

ものの本によると椿の種類は頗るおゝく、ざっと百二、三十種にも上るという。人にはそれぞれの好みもあろうが、私は籔椿というか、山椿というか本当の名前は知らぬが、とにかく薮かげや川岸に咲く、一重の赤い椿が好きである。飾り気のない溢れるばかりの野趣が、強く私を引きつける。人工を加えた八重咲や斑入りの花は、一向ありがたくない。

私どもが椿というと、すぐ伊豆の大島を連想するように、この植物はもともと暖地性のものらしい。だから南国であるわが郷土にも、昔は椿の自生群落がおゝかった形跡がある。というのは西牟婁郡に椿温泉があり、美山村には椿山と書いて「つばやま」という所があり、御坊市にも椿の地名がのこっている。何れも椿の自生群落地の名残かとおもわれる。

御坊の大御堂、正しくは本願寺日高別院は、天文九年(一五四〇)日高地方の覇者湯川直光が、石山本願寺の法主証如上人の好意に応えて、いまの美浜町吉原松見寺の地に草創したものである。ところがその後、例の秀吉の紀州攻略で一切が焼亡し、天正十四年(一五八六)戦いやんで、郡内の僧俗が心をあわせ、これを薗浦椿原の地に復旧すると伝える。椿原すなわち現在の御坊市椿地区にあたる。椿地区の名が文献にみえる初めである。日高川はそのころ美浜町大和紡績の下手の、俗称、切れ戸で海に注いでいたという。されば椿地区あたりは日高川岸の原野で野生の椿がおおく、おのずから椿原の地名が生じたものと考えられる。

それから四百年がたった。その間に日高川の流路も変わった。昔の川筋には何時か人家がたち並んだ。かって地名の起因ともなった椿の木などは、どこにも見あたらぬ。然しそれはここばかりではない。私どもが物心ついてからでも椿の木は随分少なくなった。

一つは近年の土木工事で伐り払われたのだが、もう一つは、昔はこの実を集めて椿油をつくったのだが、最近はそんな面倒な作業を継ぐ人が後を絶ち、各地の椿の木は堀りおこされたのである。

わが家の隣りに金蔵寺という浄土眞宗の寺がある。子供のころは毎日この寺の境内で遊んだ。寺の表に古い白椿の木があった。季節には無数の花をつけ、樹下は落花で散り敷いた。私たちは落ち椿の花を糸にとおしたり、ままごと遊びの御馳走にしたものであったが、数年前この木におびただしい毛虫が発生してあっという間にすっかり葉を食いつくした。以来樹勢とみに衰え、昔のおもかげは見るべくもない。そのかみ樹下で共に遊び呆けた悪戯仲間も、ある者は死に、ある者は町に去った。ひとり変わらぬのは椿の老樹のみと云いたいが、それも前述の始末である。まことに人生無常の感がふかいと云えば、少し大袈裟に聞こえようか。

椿ファンの私は、椿の花の期間中は、一日としてこの花を机辺から絶やしたことはない。一、二輪の山椿は、何か私の心にやすらぎを与えるのである。おかげで御坊周辺の椿の所在地は殆んどおぼえこんだ。西山山麓の小池付近、富安川の岸べ、印南町山口の川ぞい、要害山への道の椿。じっと目をとじると、今年も咲きつづけているであろう、村々の山椿の風情が、自ら瞼の裏にうかんでくるのである。

「紀州新聞」昭和四十一年三月十日掲載

たんぽゝ

世間には随分気の早い人がいるものだが、植物の世界にも人間に負けず気ぜわしいのがある。

「おや、えらい早いことやないか。気ィつけんとあかんで。今晩あたりまた霜やで」

日溜まりの畦道で目についた「たんぽゝ」の花にこう話しかけたのは、たしか二月の七、八日ごろであった。もう、かれこれ三十日にもなる。

机辺の「日本の季節＝植物編」を参考にすると、「たんぽゝ」の花は、紀伊半島・四国・九州の南部では二月のうちに咲きはじめる。―とあり、同書の図表には紀伊半島におけるこの花の開花日を、二月二十八日としている。そうすると二月初旬に見かけた花は、「たんぽゝ」仲間でもよほど慌て者と云わねばならぬ。

考えてみると「たんぽゝ」の花は、まったくありふれた花である。そこいらの野道を、ものゝ二、三町も歩けば幾らでも目につく上、とりたてゝ云う程の美しさをもたぬ土臭い芸のない花にすぎぬ。だが、それだけに生活力は恐ろしく強い。路傍で少々人に踏まれようが、牛馬に食われようが頓着することではない。季節が来れば性こりもなく芽を出し、人がほめようがほめまいか、おかまいなく余り見栄えのせぬ花を咲かせるのである。いわば野草の代表のごとき存在である。またしてもこじつけになるが、私はこの花の、そうした庶民精神が好きである。

私の叔父の一人が和歌浦に住んでいた。若いころ呉服商売をしたというが余りパッとせず、私の知った時分は夫婦で和

歌浦検番の事務員をしていた。久しく往来が絶えていたが、紀勢線ができてからは時々遊びにくるようになった。叔父は私の家へくると、きまって二、三本の酒をたのしみ、無駄噺に小半日をおくった。

叔父夫婦には子がなかった。親類から女の子を貰って育てゝいた。末子という名前であった。叔父はそのうち貰い子をつれてくるようになった。年令の割に大柄な、はでな顔だちの子であった。叔父は二口めに「末子、末子」とよんで、これこそ猫かわいがりに大事にしていた。「たんぽゝ」や「れんげ」の花盛りであったから、三月の末か四月ごろであったに違いない。私の家へきた末子は日高川の堤に咲いた「たんぽゝ」の花や「れんけ」を見て、大はしゃぎにはしゃぎ、両手に持ちきれぬ程の花束をつくった。料理屋と旅館街に育った彼女には、よ程めずらしかったようである。友達のお土産にすると大事にもって帰った。

そのうち何年かたって叔父夫婦は相ついで世を去った。孤児になった末子は、土地柄でちかくの旅館の仲居になった。間もなく同じ旅館の板前と満州へ奔ったときいたまゝ消息を断った。日支事変が大分進んだころであった。戦争が長びくにつれ何かの拍子に

「末子、どうしたいるかナ」

と、かって日高川の堤で、春の花を両手一杯に摘んで喜んだ彼女を思いうかべ、家族と気づかったが、彼女からは何の便りもないまゝ三、四年がすぎた、

昭和十八年（一九四三年）の早春であった。教員をしている山妻の弟が、満州へ視察旅行に出かけた。奉天から新京へ向かう列車の中であった。若い日本女性が一行に話しかけた。内地の視察団を見て郷愁をおぼえたのであろう。和歌山県人と知ると婦人は驚いて、「実は私も和歌山の者で、日高郡の矢田村へは子供のころ、よく遊びに行った」と語った。「何でも日高川にちかい清水という家であった」ともつゞけた。「それなら私の姉の嫁ぎ先だ。……」この婦人が和歌浦の末子だったことは断るまでもない。まったく奇遇であった。一行は末子に誘われて食事を共にした。勘定は彼女が支払ったという。

末子が私どもの周辺、すくなくとも私どもの縁者の前に姿を見せたのは、これが最後であった。間もなく日本の敗戦と、すさまじい混乱がきた。叔父があれだけ可愛がった末子の消息は今にいたるも分からない。大陸で果てたのか、或は満人と結婚したのか、それとも案外、無事に引揚げて、内地のどこかで平和にくらしているのか。「たんぽゝ」の季節がくるごとに、私は幼い日の末子を思い出し、例えどのような境遇にあろうとも、この花の如く逞しく生きつづけてほしいものと祈るのである。

蜜柑の花

「紀州新聞」昭和四十一年五月二十二日掲載

ところによっては、もう少し盛りをすぎたが、南紀の村々はいま蜜柑の花にすっぽり包まれている。国道を通うバスも紀勢線の列車も、蜜柑の白い花から花の間を、縫うようにして走りつゞけている。

昔大阪商船の紀州航路が、唯一の交通機関として幅をきかしていたころ、五月半ばに船が紀南の港に入ると、さわやかな初夏の風にのって、強烈な蜜柑の花の香が、ほのかにデッキまで匂ってきたという。少し大袈裟な気もするが、それ程この花の香は強く、かつ刺激的である。

私の住む川辺町は、県下でも有数の夏みかんの産地である。栽培の歴史も古い。夏柑が日高地方に入ったのは、大体、明治二十年代（一八八七～九六年）ときいている。明治二十四・五年ごろ既に湯川町小松原には、小面積ながら夏柑畑があったという。その二・三年後入野の花田米吉なる人が、六・七畝歩の田に夏蜜柑を植えた。しかし小松原の夏柑も花田米吉の夏柑も、植栽後の管理が不充分で、成功をみずに終った。それからまた十年ほどおくれて同じ入野の人古田幸吉が、五畝歩ばかりの田に夏蜜柑を植えたところ順調に生育し、やがて入野一円にひろまった。古老の話によると大正年間（一九一二～二六年）、はやくも入野夏蜜柑の名声は大阪市場を圧したという。こうしてその後は年とともに生産量が増加し、大正十三年ごろには入野の生産業者が共同して機帆船を仕立て、大阪市場に直送するという、当時としては思い切ったことも決行した。

現代、夏蜜柑といえば日高を連想するほど、日高地方の重要な特産物となっているが、その発祥地は川辺町入野であり、古田翁はその先覚者である。果樹連あたりが音頭をとって翁の頌功碑の一つぐらい建てゝほしいものである。

数日前であった。ある席で雑談した際、一人の男が、有田でも日高でも、これほど蜜柑の花が咲きほこっているのに、どうして蜜柑の花見がないのだろうかと云い出した。なる程そう云えば桜の花見は古くから楽しまれてきたし、二月の寒空にも梅見がある。が蜜柑の花見はついぞきいたことがない。寒からず暑からず、気候は申し分ない上、蜜柑畑はどこでも手入れが行きとどいて、歌を詠み句を吟じ、酒を酌む場所ぐらいは幾らでもある。まったくおかしい話である。

ある日わたしは猫の額ほどの、わが家の蜜柑畑へ降りてみた。私の子供のころ近所に五郎右衛門という、いかめしい名前だが面白い老人がいた。三人の子供が次々と早逝して、婆さんと二人きりでくらしていた。老人の職業は精米業であった。大きな水車が回ると、何十と並んだ杵がコットンコットン上下して、臼の中の米が白んでゆく、すこぶる悠長な精米所であったが、老人の没後、精米所は取りこわされた。わが家の蜜柑畑はその水車小屋の跡である。

蜜柑の花は、ちょうど盛りであった。つやつやした暗緑色の葉の先に、今年の若葉が浅緑に光り、その若葉の梢にも昨年の古い葉の間にも、白い五弁のこまかい花が、すき間もなく咲いている。この花特有の強い刺激的な香りと、若葉の匂いがむんむん立ちこめて、頭の奥がジーンとなりそうである。

「あんまり見てやらかったが、よく咲いたな……」

主の私は遊びほうけて、一向手入れらしい手入れをしてやらなかった手前、一寸照れながら無数の蜜柑の花・花・花に声をかけた。そうしてこの分なら、夏柑の花どもは、ずぼらな私のことなど期待せずに、せっせと実をつけるに違いないと、やゝ安心した。それ程蜜柑の花は、律気者という感じを与える。

「だが然し蜜柑君……」

私は、むらがり咲いている花の一つをとって、また話しかけた。

「お前さんもこうして手にしてみれば、満更でもないじゃないか、顔かたちも結構かわゆい……」

「けれども正直なところ、少しお色気がなさすぎるナ。律気すぎるよ。そりゃ人は律気でなければならぬ。いま世間に一番かけているのは律気さなんだが、それにしても律気であるというのは、何とも糞おもしろくもない退屈なことか」

「つまり、お前さんが桜や梅や牡丹やバラのように、花見なんぞと人気の出ないのは、まったく律気すぎるせいなんだ」

私は掌の中の蜜柑の花を、、足もとの草の中にすてながら、人間にもこんなのがあるなと考えてみた。

故人録①

和田喜久男氏

「紀州新聞」昭和四十一年七月十七日掲載

荻生徂徠（おぎゅうそらい）は常に煎豆を噛みながら故人を罵倒した。徂徠が噛んだのは倹約のためであろうし、古人を罵ったのは確かに今人を罵るよりも安全であったからに違いない。

何しろ青年時代に読んだのだから記憶が違っているかも知れぬが、大正文壇の鬼才芥川龍之介の随筆集「侏儒の言葉」の中からひいた。不思議なことに私は和田喜久男氏を追想するごとに、きまって芥川のこの言葉を思い出すのである。一つは和田氏の風貌が江戸時代の儒者荻生徂徠と通じる所があったのと、晩年の和田氏は健康を害し、煎豆こそ噛まなかったが、常に古人、今人を痛罵してやまなかったせいかも知れぬ。

順序として私はここで和田氏が痛罵した人物の氏名と、その言葉を記すべきであろうが、それでは無用の摩擦を生ずる恐れがあるのみならず、悪口は必ずしも憎悪によるものでなく、しばしば親愛の逆語として用いられることのあるを知る故に、割愛することにした。

さて私が和田喜久男氏の知遇を得たのは、その晩年の十年ほどの間で、その頃は健康を損ねて何時訪ねても大抵、家で書見をしていたが、四回ばかり例外がある。第一回は二人で川辺町和佐・光源寺の鐘の拓本をとりに行った。まだ今の鐘

楼の改築ができず、鐘は地上に置かれていたから都合がよかった。その日の和田氏はなか〳〵お元気で、和服の袖を襷でからげ、盛んにタンポをふるわれた姿が今も瞼の裏にある。

第二回目は海南市黒江の某家所蔵の青木勘兵衛の古文書をみに行った。この文書は日高郡誌にも所載されていたと思うが、かって三浦周行博士がみて偽物と断じたという、曰く付きのものであるが、偽物か否か和田氏自身、自分の眼でみたいというのであった。二人は汽車に乗り海南駅前で簡単な昼食をとり、車で走った。

第三回目は印南町名杭の観音像をみる為で、この時は芝口常楠先生もご一緒であった。風の強い日で三人は切目川ぞいに名杭まで歩き、帰りは切目川の堤の斜面で持参の弁当を食べた。

もう一度は昭和二十九年（一九五四年）か三十年ごろであったか、私が旧矢田村誌の資料収集中、白馬山頂、堂床にまつられていたという佛像を、川辺町千津川に調査したときで、和田喜久男氏の外に芝口常楠先生、それに巽三郎氏に、わざわざ田辺から駈けつけられた佐山伝右衛門氏もおられた。病弱であったとは云え、まだ和田氏はそれ位お元気であったのだが、先ず佐山氏歿し和田氏逝き、ついで芝口先生も後を追われた。わずか十数年の間である。

故人録②

芝口常楠先生

「紀州新聞」昭和四十一年七月十九日掲載

日記帳を取り出してみると、昨年の三月二日は妙にうすら寒い日で、おまけに午後からは雨であった。私たちが細かい雨にぬれながら、芝口先生の柩を火葬場にお送りした日である。つい昨日・今日のような気がするが、もう一年半ちかくなる。

考えてみると先生には随分お世話になったばかりでなく、いろいろなものをいたゞいている。その一つに川勝政太郎編・史述美術資料ノートというのがある。年表の外に建築述語や神社形式・仏造術語・銘記用語例・石造美術その他を簡記したものである。現代ではもっと完全なものも出ているが、小型本で携帯に便利な上、使いなれているので今に愛用している。何しろ出勤の往き帰りをはじめ、どこへ行くにも離したことがないため、もはや表紙もとれているが、やはりすてがたい愛着がある。

もう一つ大正十年（一九二一年）十一月十六日、森彦太郎先生が編纂の上、自ら鉄筆をとって謄写版印刷をされた日高郡沿海地方人物史蹟名勝天然記念物略誌という、頗る長い題名の小冊がある。最近どういう風の吹きまわしか、時々勤め先きまで見えて、

郷土の史跡などを訊く人がある。私は元来もの覚えのよくない方で、自宅なら一応の参考書を引出して答えられもするが、勤め先ではそれもかなわぬ。さりとて日高郡誌や紀伊続風土記を事務机の脇におく訳にもゆきかねる。そんな時に前記の一冊は甚だ重宝である。わずか三十六頁の小冊ながら三段組、七五項目に及び、郡市内の主要な史跡・人物は殆んど網羅されている。小冊であるため机の引出におさめて格別場所をふさぐことはない。なおありがたいことに私が先生からいただいた分は、器用な先生がていねいに厚紙で和装仕立に製本までして下さっている。この本の成立由来を書き出すと長くなるから省略するが、現代では郡市内で私の所蔵本以外に残ってはいまい。

最後に、これは先生の没後嗣子藤雄氏に無理におゆずりを願ったものであるが、昨年だったか物故された高野山の学僧水原尭栄師著、高野山金石図説、上中下補遺四冊帙入がある。高野山に存在する夥しい古石塔の銘文を、一々調査の上記録したもので、ときどき古書目録でみかけるが、かなり高価な稀覯本である。また相当腰を入れて取組まねばならぬ内容であるため、いまだに机辺においたまゝである。しかし先生は私のような積ん読族ではなかった。驚くべきことには全巻細かく眼をとおされた上、殆んど各頁にわたって丹念に書き入れが施されているのである。私は時々先生書き入れの高野山金石図説をとり出して、わが怠惰心に鞭を加えることにしている。

「紀州新聞」昭和四十一年七月二十日掲載

故人録③

田端憲之助翁

昭和四十年（一九六五年）春、おゝくの人の愛惜のうちに長逝された田端憲之助翁を、村人はひそかに吉原の仙人とよんでいた。それほど田端翁は純粋なお人柄であったし、その生活も浮世ばなれしたものであった。あるとき翁は、

世間にはよく俳句を作り歌も詠むという器用な人もいるが、あれは恋人を二人もっているようで嫌いですね

と私に話されたことがある。田端翁のご性格がうかゞわれる。

歌人であり国文学者であり、また優れた民俗学者であった折口信夫博士とは、国学院在学時代から信仰のあったことはよく知られているが、その折口博士が、かって田端憲之助の一番弟子と書いている。それ程の学識も田端翁は、ついぞ素振りにみせたことはなく、隣人は常に「憲さん、憲さん」と親しんだものである。

たしか大正十二年（一九二三年）であったと思うが、翁は一度家庭をもたれたが、いくばくもなく解消、以来独身をとおされたについて、口さがなき人々の間で、さまざまな憶測が行われた。華やかな宴会がはて、いよいよ新郎新婦が寝室に入る時がきた。

新郎の田端さんはおごそかに
　どうぞ御婦人は別室でおやすみ下さい
と花嫁に宣言したものである。これが結婚解消の原因であったというのであるが、無論つくり話である。それにしてもこんな伝説がまことしやかに信じられるくらい、田端翁には俗人ばなれした所が、若い時分からあった。
　昭和三十七年（一九六二年）田端翁は永年勤めた松原共済組合を退職されたので、その手続きに御坊職業安定所を訪ねた。係員は
　また勤め口があれば働きますか
ときいた。働く意思があって、失業した場合は失業保険が受けられるのである。田端さんは無論そのことを知っていた。だが、
　いゝえ、もう働く気はありません
と、きっぱり言い切ったのである。
　それでは保険金は貰えませんよ。
　貰えなくてもかまいません、私はもう老人です。これ以上働く気はありません。
係員もよくできた人であった。
　そうですか。それじゃまた気が変わって勤めようと思ったとき来て下さい。保険金の請求期間は半年ほどありますから。
と告げた。万事がこの調子だから退職の際も格別貯えという程のものはなかったし、退職金にしても知れたものであった。田端さんは後に周囲のすすめもあり、結局失業保険の給付をうけたが、とにかく初めは当然受けてよい保険金さえ辞退したものである。
　係員をごまかして一日でも一銭でも余分に、保険金を貧ろうとする人の多い世の中で、田端翁の言動は宝石のように光っている。

夾竹桃

「紀州新聞」昭和四十一年八月十七日掲載

　立秋の声をきいて、もう半月ちかくになるのに、相かわらずきびしい残暑がつゞいている。朝から面倒な報告書の作成に取組んでいた私は、思い切り大きな伸びを一つして窓外に眼をうつした。そこには―詳しく書けば市役所と私の勤めている専売公社の庭なのだが―火のような夾竹桃の花が、梢いっぱいに咲きさかっていた。

さすがにこの花は、熱い印度の国が原産地といわれるだけあって、うちつゞく干天にも炎暑にも、びくともすることではない。さんさんと降り注ぐ八月半ばの、昼さがりの太陽の光と熱を体ごと浴びて、生の歓びにふるえ身もだえし、陶酔しているのである。享保年間（一七一六～三六年）とあるから、もはや二百数十年にもなる。中国を経てわが国に渡来したと伝えるが、いまではすっかり日本の風土に溶けこんで、最近はどこの庭先でもよくみかけるようになった。

昭和二十何年であったか、一度はっきりお伺いしたのだが思い出せない。とにかく昭和二十年代であったのは間違いない。成人式の日であった。御坊市でこの年成人の日を迎えた若者達を祝福して、記念植樹をしようと話がきまったが、何しろ急々のことではあり金はないし、適当な木が手に入らず苦しんだ。それを耳にされた井上豊太郎先生は

「よしそれなら俺の家の夾竹桃はどうだ」

と一株を提供された。それが今では樹高数米・樹周も叢生して数米にも余る市役所の夾竹桃なのである。

私の同僚の一人に植木好きの男がいる。好きこそ物の上手なれの諺どおり、この男の手にかゝると大抵の草木は、すくすくと成長する。先年、高野山旅行を共にした時も、移植のむつかしい石楠花を土産にして、見事に花を咲かせて一同を驚嘆さした経歴がある。この男が数年前、ひそかに市役所から夾竹桃の一枝を持ち帰り、公社の庭に挿木した。それが先程わたしがみた夾竹桃である。云うてみれば市役所の夾竹桃が井上先生邸の子供とすれば、専売公社の分は、さしずめ市役所の長男、井上先生居の孫筋に当たる訳である。

何月の随想欄であったか、優しく美しくしおらしく、然も芯の強い花にこそ私は心を惹かれると書いたが、夾竹桃の花にはどうひいき目にみても、そんなところは微塵もない。そのかわり芯の強さ、いや芯でない葉にも梢にも幹にも、少々の逆境にも屈せぬ根性のようなものが感じられ、火を思わせる花からは沸々とたぎり立つ情熱が、放射線の如く見る人の心にぶっつかってくる。人間の好みなども思えば勝手なものである。優しい花の好きな反面、夾竹桃の烈しさにも、やはり捨てがたい愛着をおぼえるから不思議という外はない。

冷ややかに水をたたえてかくあれば　人は知らじし火を噴きし山のあとども

おかしいことに、毎年夾竹桃の美しい季節になると、私はきまって一度や二度は、昔読んだ生田長江の、字あまりの一首を思い出す。多分夾竹桃の炎にも似た鮮烈な花の色から、はげしい火山の噴煙や人間の情熱、そのあとの静けさと、連想が連想を生む結果であろう。そして思いは更に伸展して一昔まえ、市役所へ夾竹桃を贈られた井上豊太郎先生も、確かにどこかこの花と相通じるところがありそうだと、とめ度もなく拡がってゆくのである。

実際、私はこれまで先生の社会悪への痛烈な爆発を、何回かこの眼でみてきた。しかし世間は案外に先生の一面だけを知って、その反面を理解していないような気がする。例えば十指に近い既刊書の内処女出版「紀伊郷土文献詳細」一冊をとってみても、その郷土研究の上にもたらした功績は、関係者以外には殆んど知られていない。尋常の勉強や努力だけで

はできることではない。明敏な頭脳と何よりも学問に対する火の玉のような情熱―それが私をして夾竹桃の花から井上先生を思い出させたのである―が必要なのである。

すでに記したように、先生の旧居から移された市役所の夾竹桃も、また縁つづきの公社のそれも、折からの残暑の中で樹勢ますます旺盛、花の色いよいよ鮮烈を加えつつある。先生のおすこやか鳴らんことを祈る。

余滴②

「紀州新聞」昭和四十二年一月五日掲載

正月二日間を無為徒食して三日目、清水長一郎氏と中津村の八軒道(やげんどう)地蔵に赴いた(ここではあえて参拝とはいわない。その理由は後文で判明する)。高津尾の西原でバスを降りた。このあたり旧県道を背にする形になっていて、いっこうになじめない。舗装もされている。旧県道の橋を渡り、日高高校中津分校のそばを通り、しばらく行くと、男が三人畑を掘っている。

▽道をたずねると「これが八軒道への入り口で、八軒道へは四キロあまり」と教えてくれるが、どうもニヤ〳〵笑っているように思われるのは「なにを物ずきな」という肚かもしれない。簡単な川ぞいの道が続く、一方は山だ。谷水のしきりに落ちるところがあって、小さな枯木が樹氷のような姿になっている。

▽出合橋という橋のところに、道路竣工記念碑と、官行造林頌徳碑がコンクリートの台石に並んで立っている。道路竣工記念碑は昭和三年(一九二八年)建立、官行造林頌徳碑は新しく、岡田村長が片山秀松・坂口信吉両氏の徳をしのんで、建てたもの。

▽傍らに乗用車と小型貨物車が駐車してあるが、人の姿は見えぬ。中年の婦人が奥の方からやって来た。四キロ余りの行程で、行き逢ったのはこの婦人と郵便配達人の二人だけ。八軒道の部落は人家が五戸、二つの谷川の合流点に散在していた。この二つの谷川の川岸が頑丈にブロックで堅められているのは、過ぐる七・一八水害の名残りに相違なく、頑丈に復旧されているだけに水害の被害の激しさが想像される。

▽茶色の日本犬とスピッツが二人の子供と遊んでいて、茶色の方が奇妙な訪問者に猛烈にほえる。若い主婦に道をきくと、山への入り口へがややこしいからとて、わざわざ案内に立って地蔵さんのことを話してくれる。

▽「この地蔵さんの祀られたのは約百年前らしい。四月二十二日が会式で、遠近から参拝者があるが、山の上では参拝に大儀だから麓に降りてもらうべく伺いを立てたところ降りないとのご託宣があった。以前は野天に立たせられていたが、部落の者が小屋を作り、毎月二十二日に打ちそろって参拝している。南部町の人がサクラメントに移住するにあたり、この地蔵に参拝し、彼地でも毎朝遙拝していた。事業に成功して数年前に帰国し、七十何才であったがお礼まいりをさ

れた。というようなことを話してくれる。

▽新しく拡幅されたという林道の中途で主婦に別れ登りはじめる。例の二匹の犬はわれわれの後になり前になりしながついてくる。高さ三百㍍というこの峠の二百㍍ばかり登った頃には二人ともかなり疲れ、しかも行く手にけわしい尾根がある。わざわざ案内してくれた主婦の親切がなければ、ここから引返したい気もする。勇を鼓して急坂を突破すると道はゆるくなり、霜柱が立っている。頂上をきわめると、有田側は昼なお暗い杉の植林で、台風に倒れた木が幾株か目につく。

▽ところで、地蔵さんの祠はいくら探しても見当たらない。探しくたびれて弁当を開き遠い山の切れ目に見ゆる海、または、峯の彼方に薄紫に霞んで僅かに見える峯を「あれは真妻山か、あれが矢筈だろうか」と話し合ったことだった。

▽この部落はテレビは付近の山頂に共同アンテナを設備していた。耕地は一町歩たらず、山林の広面積は巴川製紙の分収林になっていて、ここにも大資本の根か及んでおり、乏しい田圃の何枚かにイチゴが栽培されて有利作物に対する農家の意欲を見せていた。

井上先生追慕抄

「紀州新聞」昭和四十三年二月十三・十四・十五・十六日掲載

井上豊太郎先生が七十六年にわたる、その起伏の多い生涯を閉じられたのは、昨年の師走も押しつまった、三十日の午後十一時であったから、も早一ケ月あまりになる。

考えてみると、生前は先生ほど毀誉褒貶（きよほうへん）の極端な人はなかった。これは先生の没後、本紙の源地理事長からお聞きしたことなのだが、先生が昨秋九月半ばごろ病床に就かれるまで、紀州・日高の両紙に、三日にあげず発表された多方面な随想や時事評論に対し、「おまえところは井上新聞か」という苦情や、「井上先生の学識には敬服する」という讃辞が、相ついで寄せられたとの話である。古い諺をひき出すが、「蓼食う虫もすきずき」である。先生の真価は、やがて時日と世間が評価するであろうが、私はやっぱり先生は偉い人であったと思う。

先生には周知のとおり「紹介紀伊郷土文献拾遺」をはじめ「天誅組紀州落顛末」・「伊達千広三つの山踏み」・「和歌山心学資料小叢」・「和歌山法制資料小叢」・「丹生津姫之命」・「念佛大行者徳本上人伝」の刊本や「小竹八幡神社御沿革」・「加納諸平伝」等の未刊書がある。多忙な弁護士として活躍された余力をさいて、仮にもこれだけの著述を遺された人である。尋常一様の人物である筈はない。

私は昨年四月、田辺市へ転勤以来やゝ疎遠になったが、それまでは先生の所謂・起雲閣と私の勤め先が直ぐお近くであった関係もあって、実にしげしげとお伺いしたものである。ひょっとすると先生を中心に集うた人々の中で私などが先生の晩年、もっとも親しくしていただいた一人ではないかと思う。そんな訳で井上先生については様々な思い出が去来する。いずれ機会を得て井上豊太郎伝や井上豊太郎年賦を書くつもりであるが、とりあえず、その時々の先生の面影を辿ってみたい。

① 湯川和城の軸

湯川和城師といえば湯川町財部・好浄寺の住職で、由良町衣奈・西教寺の藤田真龍師と共に、日高地方で近代の名僧と仰がれた高僧であった。好浄寺は惜しいことに近年廃寺となったが、「沖縄の最後」の著者古川成美氏の祖父に当たられる方といえば、読者は直ぐ成程とご理解下さるかと思う。

和城師は浄土眞宗の高徳であったばかりでなく漢学に秀で、日高地方最後の漢学者といわれ、また書にもすぐれ南画も巧であった。

あれは何時のことであったか、どういう用向きであったか、すっかり記憶を失ったが、とにかく私ども若い者が三・四人で、起雲閣に先生をお訪ねした際のことである。いろいろ話がはずんだ末、先生は、すっと立ち上がる奥の方から一本の軸を持ってきて、同席していた古川成美氏に

「この軸をあなたに上げる。あなたのおじいさんが書いたものだ」

と壁間に掛けられた。もう古いことなので細かい点は失念したが、何でも二・三本の竹を描いた半切りであったのを覚えている。万事につつましい古川氏も、さすがに歓びの色を面にかがやかし、

「それでは戴きます」

と感激のうちに受取られたのが今も眼にうかぶ。

私はその後この地方の書画愛好の方々の家蔵を、しばしば見せていただく機会を得たが、湯川和城師の遺作には一度も巡り合わせていない。古川氏が先生から贈られた竹図は、恐らく和城師遺作としては稀有なものに相違ない。

私などは欲が深いから、なかなかこういう真似はできない。わずかばかりのつまらぬ物を、多分、死ぬ日まで持ちつゞけてゆくことであろう。私は先生と古川氏の竹図の授受を側で眺めながら、心が洗われるような爽やかな気持ちになったのを今も思い出す。

② 「墨苑清賞」

「墨苑清賞」は南部の人、鈴木梅仙が明治十九年（一八八六年）十月二十七日、刊行した和装四十頁足らずの、現代で云えばＢ６判

ぐらいの墨に関する随想である。

今年は明治百年に当たるのを記念して、各方面でいろいろの企画が行われている。現に朝日新聞はその和歌山版で一月以降、「紀の国一〇〇人」を掲載し、サンケイ新聞は同じ和歌山版に「明治百年、紀州人像」の連載をつづけている。鈴木梅仙はいずれそのうち両紙の、それぞれの欄に取りあげられるに違いないが、梅仙こそは、その八十三年の長い生涯を製墨一筋に生き、ついに墨の本場中国の唐墨にまさる梅仙墨を完成した人である。

私は妙な性分で、何ごとによらず名利を外に、ひたむきな歩みを続けた人々に強く心がひかれる。一度、梅仙の梅仙墨製造にかけた生涯を知ると、その詳しい生涯を辿ってみたくなり、資料を漁り梅仙翁を知る人々を訪ねて聞書をまとめ、去る昭和三十七年（一九六二年）四月十八日から二十九日まで九回に亘り、「日高先賢伝・鈴木梅仙」と題して本紙に連載したことがある。

当時、南部町立石に梅仙翁の嗣子・静雨・鈴木謙次郎翁が、九十歳ちかいお歳で、まだ御健在であった。私は謙次郎老を数回訪ね、先考の追憶談をお聞きしたり遺品を見せていただいた。そんな或る日のことであった。謙次郎老が和綴じの四十頁そこそこの小冊を示されたのが、前述の「墨苑清賞」であった。この小冊は全文が漢文で書かれたものであるが、奥書の裏に

この書は私が古書店で求めたものであるが、聞けば梅仙翁の嗣子謙次郎老も所蔵されていない由である。長い年月をかけて探した末、ようやく手に入れた此の書を手離すのはあたかも愛娘を嫁がせるに似た愛着を覚えるが謹呈する。どうぞ永く愛蔵されたい。

井上　豊太郎

静雨・鈴木　謙次郎様

家が取りちらしているため写しを参照することはできないが、とにかくこう云う意味の献呈の言葉が記されていた。以来、私も此の書を入手すべく、目にふれる限りの古書目録を注意しているが、ついぞ見たことはない。何しろ発行後八十五年も経ている上、部数も少なかっただろうし、僅々数十頁の小冊子である。恐らく今後も入手の望みは至難に違いない。このような稀覯本を愛娘を嫁がせるように惜しみつつも、そう簡単に人に呉れられるものではない。

③ 森彦太郎先生伝の序文

自分のことを書いて少し面はゆいが、私は昭和二十七年（一九五二年）の秋、財団法人常磐義塾の後援で、森彦太郎先生伝B五判百五十九頁を刊行した。

私はこの書を成すに当たって森先生の著作は勿論、その遺稿から書簡の類を一通り読み、生前の先生と御親交のあっ

た人々を歴訪して、その追憶談をお伺いして資料とした。自然、井上豊太郎先生にもお目にかかる機会が多かったが、いよいよ原稿ができ上がって印刷にとりかかろうという間際になって、井上先生から

「俺が序文を書いてやる」との申出を受けた。

これは私一人の勝手な好みに過ぎないが、もともと私は本の序文というのを余り好まない。一読して全冊の内容の概要を正確に把握させる様なものは別として、やたらに知名の士の名を列ねた、お義理だけで書いた空々しい序文などは、見ただけでうんざりする。したがって私の森彦太郎先生伝の場合も、先生の最もよき理解者で且つ親交のあったお一人だけにお願いする心算であった。然し井上先生の御厚意がよく分っているだけに無下にお断りすることもならず、「お願いします」ということで引下がった。

やがて序文が完成した。例によって先生一流の長文で、森先生のこと常磐義塾のこと、郷土研究のことあれこれと述べられたものであったが、その中に常磐義塾の解散措置を難じた数行があった。常磐義塾解散措置を非難することは、とりも直さず同塾の塾長であった森先生を非難することになり、森彦太郎先生伝の序文としては、ふさわしくなかった。

私はこの序文を出版費の出資者であると同時に、最後の同塾理事長でもあった田端春三翁にお見せした。田端翁は先生の序文を一読すると、いきなり、

「井上君は馬鹿だね」

と、噛んで吐き出すように云われた。翁は性格の烈しい頭の鋭い方であった。はっきり云えば森先生の伝記の序文に、わざわざ人の徳を損なうような文章を寄せる方がおかしい。少なくとも場所柄をわきまえぬ非常識な徒と云われても仕方あるまい。田端翁の言葉のとおりである。

私は田端・井上両先輩の間に立って困惑した。翁の言葉どおり井上先生にお伝えすれば、先生が怒られるのは火を見るよりも明らかである。と云って原文のままでは田端翁は承諾される筈はない。不穏当と思われるカ所を無断削除してはとも考えたが、そんな誤魔化しのきく先生ではない。とつおいつ思案の末、これはやはり正攻法でゆくべきであると判断し、ある日先生をお訪ねして、田端翁の意向をお伝えした。はたして先生は烈火のように怒った。

「田端春三、県下の山林王として何程のことがあろう、私の序文に文句を付けるとは著作権侵害ではないか」

私は黙って先生の態度を見ていた。その内先生もやゝ落ちつかれたか、

「これじゃ君も中にはさまって迷惑だろう。よし序文はやめにしよう」

と、私の眼前で十枚余の序文の原稿をびりびりと裂き捨てた。

「井上君は馬鹿だね」と憤られた田端春三翁も、「田端春三、何するものぞ」と怒られた先生も、もはや恩讐を超えた世界にゆかれた。ありふれた感慨ながら、まことに諸行無常の感がふかい。

④ 熊代繁里の短冊

今から二十年ほど前、私が郷土史に関心を寄せはじめた頃は、神田耕一郎・高尾英吉・和田喜久男・片山隆三・田端憲之助・芝口常楠等々、多くの先学がお元気で、不審な点は何でもおききすることができた。然し二十年の間に、これらの優れた指導者は一人、二人と相ついで世を去り、最後には井上豊太郎先生まで失うにいたった。

郷土研究などという古くさいことを続けていると、いろいろ自分の未熟さを痛感させられる機会に遭遇するが、わけても古文書の読解に苦しむことが多い。以前は写本などで行詰ると、すぐ芝口先生や田端憲之助翁、井上先生にお伺いしたものだが、今は誰にも教を乞う術はない。

こんなことがあった。ある時、もと湯川町公民舘長をつとめられた財部の酒井耕次郎氏から、熊代繁里翁の短冊をいただいた。熊代繁里は幕末から明治初年へかけての、南部町が生んだすぐれた国学者であり歌人であり、藩政にも貢献したが数々の著作がある。ところがおはずかしい話であるが、短冊の文字がどうしても読み下せないのである。二・三日手もとへ置いて苦心してみたがなかなか進まない。そこで井上先生の門をたたいた。

「そこへ、置いておくか」

先生は無造作に短冊を一瞥されたまゝ他の話に移った。数日後またお訪ねした。短冊の解読はもうでき上がっていた。その歌は「名所にうかれ」と題して、

吹阿起のは馬まつ蔭のま利こ山　かひあ留乎久にに君ぞ都ま得し

と読むのであった。何ごとにも徹底した先生は別の短冊に、右のとおり墨書しその裏面に

この短冊熊代繁里の書きしものに相違なし、歌は「名所にうかれ」と題しているかと思える。

「吹く秋の浜松蔭のまりこ山甲斐ある奥に君ぞ妻得し」とよむのかとおもう。自分より稍目下の人の妻帯を若干ひやかし気味も含めて、祝言のべし歌と思われる。そのおくさんの名が「まりこ」と云いしものと想像されます。その実家が山峡の奥の方なりしとおもえる。奥様の名の「まりこ」より東海道五十三次のうちの鞠子(まりこ)の駅をおもいうかべ、ここを土台にしてよまれたり。甲斐あるいは、その妻人が「甲斐性」のある働き手のよい奥様という意也。吹く秋は(風)が省略されおるが、之も「福秋」の意も含み、この「この幸福の秋に」の心なるべし。面白き歌也。縁談のことゆえ、かかる含みある縁語を用いたり。これをみれば繁里も中中達者也。

昭和三十三年十月五日小竹八幡宮祭日

南紀楽天荘主人　井上　豊太郎(花押)

と懇切周到な解説を書かれていた。こういう点になると全く、余人の及ぶべくもない素養の深さが自ら滲み出てくるの

である。

⑤ もう怒鳴られない

一月十三日附の本紙に、小谷緑草君が「もう怒鳴られない」の副題のもとに、井上先生を偲ぶ切々たる哀悼の辞をかかげられていたが、実際井上先生はよく大きな声で怒鳴られた。

あれは確か昭和三十四年（一九五九年）の秋であった。南部町西岩代の光照寺で、有馬皇子の千三百年祭を厳修した時のことであった。御坊からも歌人や句会の人々、それに郷土研究仲間が大勢出席した。岩代駅で汽車から降りると、野道づたいに近道をとる組と、国道ぞいに本道を行く組と二通りができた。井上先生は岩代駅頭に道案内標が出ていない。これでは他郡市から来た人々は、とまどうに違いないと叱言を云われたが、私はさして気にも止めなかった。そのうち井上先生は野道づたいの一組を顧みながら

「私は本道を行く」

と遠い国道をとっとと歩きはじめた。

式場に当てられた光照寺には、すでに地もとの人々や関係者が集まって混雑していた。私はぼんやりと境内に佇っていた。突然、門の方で大きな喚き声がきこえた。余り烈しい声なので、会場の人人は一斉にふり返った。井上先生が何ごとか怒鳴っているのであった。物すごい怒りようであった。当日、祭典の後で講演する筈であった、その資料であろう、両手に提げていた大きな風呂敷包みの本を地にぶちまけて、文字どおり地団駄を踏まんばかりの勢いであった。その剣幕が余りに甚だしいので、瞬間、境内の人々も度胆をぬかれるし、私もポカンと眺めるばかりであった。

折よくそこへ一行から少しおくれた山中不艸宗匠が来合せて、二言・三言なだめはじめたので、先生の怒りは漸くおさまった。駅頭に道案内がなかった、他郡市からの参列者が途惑う。これは日高地方文化関係者の不名誉ではないか。これが先生の怒りの理由であった。

それにしても主催者側も当日は多忙を極めていた。道案内を忘れたとしても無理はなかった。責任者をよんで、ひそかに注意すれば済む話であった。先生の振舞はいささか大人気ない感を免れない。

いつであったか小谷緑草君と鉢の木で井上先生に御馳走になったことがある。ひょっとすると本紙の源地理事長もおられたかと思ったが、これは確かでない。

酒がまわって銘々が勝手なことを喋りはじめた。そのうち緑草君が井上先生に苦言を呈するのだと力みはじめた。先生が家庭的に必ずしも幸福とは云えないのは、先生にも一半の責任がある。もっと家庭を大事にすべきであると云うのである。私は緑草君に、やめておくようにと私語するのだが、彼はなかなか聞こうとしない。とうとう口を切った。

先生はだまって聞いておられたが、ぷいと横を向いた。小谷君も向きなおして後をつづけた。先生は今度は後へ一膝退られた。小谷君がまた追いかけた。

「おい、もうやめろよ」

私は側から声をかけたが、彼はなかなかひるまない。今度は先生が席を移した。甚だ迷惑そうに苦笑いしている。小谷君がまた横に迫った。結局この時は先生得意の怒声はなく、終始苦笑で対処された。

思うに此の日は井上先生の招待で、小谷君が正客であったので、正客に対しての礼を守られたものと考えられる。気の短い先生としては、余程の辛抱であったと今も忘れがたい。怒鳴られるのを承知で、敢えて忠告にのり出した小谷君も小谷君なら、人一倍怒りっぽい性格を、じっと堪えられた先生も先生である。どちらも心底は律気な古い型の日本人なのだ。

⑥ 幼稚園の太鼓

井上先生の告別式がすんだ数日後、ご遺族が先生の遺品を整理されるのをお手伝いした。

「こんな所に、卒業証書があった」

同席していた小山豊氏が押入の奥から、巻物仕立にした卒業証書の一巻をさがし出した。一見粗雑そうに見えて、極めて緻密で几帳面であった先生は、卒業証書や修業証書、賞状の類を小学校一年から大学卒業に至るまで一枚残らず保存されていた。

そのうち、小学校一年生の時の分と、中央大学卒業時の褒状を、次に掲げる。

証

吉之助長男

一年生　井上　豊太郎

明治二十四年（一八九一年）十一月生

一　修身書　壱冊

本定期試験優等ニ付頭書の通賞与ス

明治三十二年（一八九九年）三月廿五日

真妻村立　皆瀬小学校　印

専門部法科第三学級

井上　豊太郎
右積年勤勉今回ノ卒業試験ニ於テ
学業優胆ノ成績ヲ見ハスヲ
以テ特ニ褒章ス
大正六年七月六日（一九一七年）
中央大学学長
法学博士　奥田義人　印

先生はよく中央大学首席卒業を呼称し、わざわざ封筒や名刺にまで印刷して、それが一部の人々から毛嫌いされる一つの理由ともなったが、先生にして見ればやはりそれだけの根拠はあった訳である。また、そうした証書類を納められた箱の中から、御坊幼稚園の感謝状が一通出てきた。めずらしいものなので写しておいたが、それには、

感　謝　状
太鼓　一個　台共
右今般貴殿子息三千子殿タエ子恒和殿
保育感謝ノ為メ御寄贈相成正ニ受領申
候付テハ永ク園児ノ友トシテ愛用可仕
茲ニ深ク感謝ノ意ヲ表シ候
昭和十八年八月十二日（一九四三年）
私立　御坊幼稚園
井上豊太郎殿

とある。小谷君の言葉ではないが、普段の先生は余り家庭を顧みず、子女に対しても無関心のように見受けられたが、本当はひどく子煩悩であったのだ。三児の幼稚園卒業を記念して、曽て子等が教えを受けた幼稚園へ、太鼓を贈っているのである。贈り物が太鼓という愉快な品物であることからでも、子等の卒業を全身でよろこばれている先生のお姿が思いうかび、不覚にも目頭の熱くなるのをおぼえる。先生はやはり明治人なのだ。

新年随想　郷土玩具

「紀州新聞」昭和四十三年一月一日掲載

干支でいうと、今年は戊申の年にあたる。歴史年表をとり出すまでもなく、前回の申年が昭和三十一年（一九五六年）であったことを、私はわすれていない。というのはその年の本紙元旦号に山中不艸氏が、郷土玩具、和歌山の瓦猿に関する興味ゆたかな随想を載せていたのを、今もおぼえているからである。

紀ノ川に近い和歌山市栗林八幡宮境内に鎮座する日吉山王神社へ、起源は明らかでないが古くから、安産と子授けを願う人々が参詣し、祠前に奉納されている瓦猿を一つ借りうけて帰り、祈願がかなえられたとき、さきに借りうけた瓦猿のほかに、もう一コをそえてお礼まいりする習わしがあった。瓦猿は神社附近の瓦屋が内職に、瓦そのままの方法で焼いたもので、下腹部のところに両手で抱いた桃をもった立姿をし、大きさは様々あるが、丈十二・三センぐらいのものが最もおおい。中には両頬と桃にわずかに朱の淡彩を加えたものもある。いたずら者の猿が桃を後生大事にもった、真面目くさった顔が甚だユーモラスで、みていると思わずおかしさがこみあげてくる。

もともと土俗信仰の所産で玩具ではないが、大正初年頃（一九一二年頃）郷土玩具趣味が流行するにしたがい、好事家の間に紀州の郷土玩具としてにわかにもてはやされるに至った。

私がこの瓦猿の存在を知ったのは、もう十四・五年も昔になる。ものずきにわざわざ和歌山まで出かけた。祠の傍らの奉納所には、大小の瓦猿が山のように並んでいた。その時手に入れたのが今も机上にある。故芝口常楠先生も、これは両頬と桃を赤く塗ったものを愛蔵しておられたが、先生の没後ゆずりうけて、現代わたしの手許にある。

×　　×

紀伊続風土記をみると、和歌山市外六十谷、大同寺の握り仏の話が出ている。

元来、大同寺は大同年間（八〇六―八〇九）伝教大師の開基後、慈覚大師が相続し、文治年中（一一八五～九〇年）後鳥羽上皇の勅願寺となったが、天正十三年（一五八五年）の兵火で焼亡した。延宝年中（一六七三―一六八〇）和歌浦、雲蓋院四代の憲海権僧正が本堂を再建したと伝えるからその由緒は古い。握り仏について同書にいう。

土仏塚と云ふあり。慈覚大師当寺にて如法経修行のとき泥を握り、八万四千体の大日如来を作れりといふ。その証たしかならす、その形五・六分より一・二寸に至る。初めは山中に散在せり。今は小堂に安置す。天和（一六八一―一六八三）の記には薬師堂の側の土中に小さき土仏埋れり、掘れば多く出づ。伝教の握り仏いふ。梵字すわりありとあり。

また武井武雄著「日本郷土玩具―西の部」には

六十谷の握り仏は土を握ったそのままの形を仏像と見做したもので、土俗品として珍品には相違ないが、玩具品とは断じて謂われない。

とある。全く武井武雄説のとおりなのなのだが、世相の変遷は是非もない。これも第一次の郷土玩具ブーム時代から収集

家の垂涎するところなり、現に私の収集品中にも芝口先生遺愛のものがあり、所伝のように表に大日如来の梵字が記されている。ゆくゆくは小さな御厨子でも作って安置せずばなるまい。

×　×

このほか郷土玩具となると御坊天神や鯛ちん・鯛抱き人形・紙雛など日高人に親しまれるが、余りに知られすぎて今さら誌すまでもあるまい。同じ傾向のものでは少し子供じみて大きな声で云いにくいが、姉さま人形がほしい。桧の丸箸を半分ほどに切って、その先きに土でねり固めた小さな顔をつけた人形である。粗末ながら目も鼻も墨で描き、黒い布片で髪もつくってあった。道成寺の二十七日をはじめ近在の縁日には板店に必らず並べてあった。たしか一銭か二銭ぐらいであったと記憶する。

女の子は一年に一度の縁日に買って帰ると、大事に着物を着せかえて遊んだが、もうどこの縁日でも見かけない。これなども妙に郷愁をおぼえる。

×　×

いま私がしきりに求めているものに「田辺の土めんこ」がある。「土めんこ」はめずらしいものではなかった。私たちが幼童のころ、女児の「おはじき遊び」用に、どこの家庭にも転っていた。土をこねて一ヂセンばかりの大きさにうすく延ばし、低温で焼いただけの簡単なものであったが、気がついた時分には、もう田舎の一文菓子屋にも売っていないし、家々のおもちゃ箱からも、すっかり姿を消していた。

時々、展覧会で見かける「田辺の土めんこ」は、御坊周辺で昔なじんだものとは、少しちがっているような気がする。表に人面や花模様を粗末であるがあしらっているし、大きさもやや大ぶりである。さすがに郷土玩具愛好者の間で「田辺のめんこ」と珍重される値うちはある。

昨年夏ごろであった、私は闘鶏神社境内で、遇然これを手に入れた。ところが少し腑におちぬ点があって、同地の研究家に見せたところやはり違っていた。正月に神社から出す宝恵籠を飾る恵美須・大黒の面であった。がっかりした。どこか物持ちのよい旧家の、戸棚の奥にでも残っていそうなものだが、それがなかなか出て来ない。

×　×

最近はデパートの玩具部や、田舎でもちょっと気のきいた玩具店には、ゼンマイ仕掛けや電気応用の精巧な玩具がいくらでもある。わざわざ泥をこねたり、紙や木でつくった郷土玩具を興（おこした）がったりするのは、時代おくれも甚しいが、これにはこれで鍼力（ぶりき）製やプラスチック製のそれには見られぬ味わいがある。土の香というか人間的な温か味である。古くさいと笑われても私は「姉さま人形」や「土めんこ」を忘れがたい。

猿と角力を取った話

「日高新報」昭和四十三年一月一日掲載

寛政（一七八九―一八〇〇）のころ、新宮に源次という男があった。若い時分は宮角力で鳴らしたことのある屈きょうな男であった。源次が中年になった或る年の九月十九日の朝、山に入って薪をつくった。荷ができたので帰ろうとすると

「親父珍しいな」

と声をかける者がある。誰かと顔をあげると、背丈け七尺ばかりの大猿と、五尺ばかりの猿が立っている。七尺ばかりの大猿は

「親父おれを知っているか」

と話しかけた。源次はもとより心あたりはないから

「知らぬ」

と答えると

「親父が夜おそく木の本へ行った時、有馬の松原で上から石を投げたのは俺だ」

と云う。それから思いあたる節があった。大猿はまた続けて

「親父が若い時、毎年六月に芝で角力を取ったが、俺はそのたびなぎの木の上から見物して面白かった。今日は久しぶりで、ここで角力を取って見せてくれ」

と云うかと思うと五尺の猿が躍り出て

「親父、俺が相手だ」

と挑んできた。

源次は小癪な猿めと斧を腰にしたまま立ち向かうと、大猿は

「親父、それはあぶない」

と斧をぬきとり、柄を右手に持ち刃を左手に持って座った。さて源次は二番まで立ち向うたが組みつく間もなく投げられた。おのれと気色ばんでかかると、また三間ばかり腋へ投げ飛ばされた。七尺猿は一勝負ごとに

「面白い、面白い」

と大喜びで

「親父も年をとったものだ。これからは必ず若気を出すなよ」

と云い乍ら斧を返し薪を負わしてくれたが、振りかえってみると、もう猿の姿はなかった。
源次もさすがに気抜けしたようになり家に帰ると、はやくも日暮れちかくになっていた。
猿が人間の言葉を話し角力を取るなど、まったく不思議と云うほかはない。
そこで翌二十日、貝根政右衛門なる人に事の次第を語った。政右衛門はその夜、宇井菊珠にこれを伝え、菊珠は「懐旧談」へ書き留めたのが今も残っていると云う。
なお宇井菊珠は新宮市誌によると、いみなは令塑・寛斎と号し、新宮にて鬱翠塾を経営、慶応二年（一八六六年）八月歿、享年六十九才。著作に「ありたき抄」・「老の寝覚」・「懐旧談」等がある。因みにこの話は雑賀貞次郎氏の「南紀熊野の説話」から得た。

余滴③

「紀州新聞」昭和四十三年一月五・六日掲載

正月二日田辺から南部まで歩いた。同行は清水長一郎・小谷緑草の両氏。昨年の正月二日に八軒道（やけんど）の地蔵に赴いたので、今年もやろうと清水氏の発案でこの行となったもの。だいたい余滴氏は文協あるこう会に参加しても、ただ漫然とあるくことにしている。筆記具は一切持たず、ぽかんとあるくことにしているし、今回の行にしてもポケットにあるのは〝新生〟とマッチとちり紙、ハンカチだけ。そこへいくと清水氏は貧欲無類で、道中の寺社から、面白い石造物を探してやろうと執念を燃やしているし、小谷氏も古いことを調べる段にかけては清水氏に劣らないのである。「あるくまえにコーヒーを飲もう」と清水氏の案内で某喫茶店に入ると、早朝サービスのゆで卵が一つずつついてくる。余滴氏は喫茶店には十年ごぶさたしても痛痒を感じない人間だから、御坊の喫茶店に、このようなサービスをするところがあるのやらないのやら知らないが、この一個のザービス卵に感心した。

▽会津橋を渡って上野山城跡へ登って行くと、中腹に宗祇庵と額のかかった青年会場があり、その前に宗祇の記念碑がある。宗祇は連歌の始祖であることくらいのことは余滴氏も知っているから、「なるほどねエ」と妙な感心をしながら登ると、頂上に八立稲神社があるが、〝八立稲〟をなんと読むのか、博覧の小谷・清水両氏も知らぬらしい。余滴氏はもちろん知らない。―このあたり住宅の好適地で、「ここでは坪単価いくらぐらいするんだろう」と小谷氏はひどく興味をわかせている。

▽有刺鉄線をはりめぐらせた空地へ三人それぞれ放水して、坂道をくだってくると、そこに出立王子があって〝出立〟はでだちと読むのか、いでたちと読むのか問題になったが、「いでたちと読む方がよかろうなア」との小谷氏の結論に余

滴氏も賛成したい。

▽国道四十二号線を芳養に向かう。田辺運送の本社があり、明洋中学の校舎が左手にある。田辺運送の労働組合が殆んど一年中赤旗を振って争議をしているのが話題になる。労組も会社もご苦労なことである。―織るように走る自動車は、助手席に必ず女性がいる。旧道を通って芳養の部落を抜けると前方に泊城のあった山が迫り、国道はその山にトンネルを掘ってあるが、三人は古い迂回路に入り、城跡に登る。(余滴氏は登らなかったが)―ここはかって小谷氏が本紙に連載した湯川戦記における大屋合戦のあった場所でもある。亀山(御坊市湯川町)の居城を捨てて敗走した湯川勢が、この泊城を頼り抵抗を試みたところである。

▽湯川一党が成算あって秀吉の南征軍に抗したのかということは、後代の者の疑問とするところだ。湯川一党にくらべると、はるかに強大な勢力を持つ伊達政宗が、秀吉から小田原攻めに参加を命じられたとき、簡単には出かけなかった。正宗(政?)には政宗としての野望があり、易々として秀吉の命にしたがう気になれない。まかりまちがえば秀吉と一戦をまじえよう肚はあるのだ。そこで秀吉からの命令が到着したとき「どうしたものだろう」と臣下に相談したところ、片倉小十郎が「秀吉は既に天下を取っている。天下の兵は飯の上のハエみたいで、到底追っ払いきれない」と言った。つまり、こちらが負けないにしても秀吉を負かすことは至難だから、長いものには巻かれておけというわけで、政宗は小十郎の言にしたがった。このような政宗の事例に徴して、微々たる勢力しかない湯川一党が秀吉軍を拒むのは完全に勝算はない筈だ。にもかかわらずあえて抵抗したのは、相手を知らなかったのか、それとも湯川一党としての意地によるものだろうか。小谷緑草氏は「意地だろう」という。

▽大屋部落は戸数が三十もあろうか、静かな漁師部落のようで、浜は騎馬武者の百騎もとても戦う余地はない。浜が侵蝕されたのであろうか。夜はここから対岸の白浜あたりの灯が美しいという。つぎの堺は南部町の内である。堺から道はゆるい坂となり、これより海岸側の山が何億円とかで都会人に買われたとか買われるとかいう小谷氏の話だ。道をそれて小さなたたずまいの日吉神社というのと寺院により、いよいよ埴田に入る。旧熊野街道というのを行くと、家々はしっくり落ちついた感じである。ここは藩政時代に埴田鍛冶という野鍛冶(クワやナタ・カマなどをつくる)の盛んなところで、職人は紀州藩の外にまで稼ぎに行った。これには藩が援助策を講じたらしいが、それだけに出稼ぎ地の人間になってしまうべからずというような法規もあったらしく、小谷氏好みの時代小説の材料になりそうだ。ここでは青年会場の傍らに灯明台がある。石を積み上げた二㍍余。この灯明台へ毎晩灯明をあげに行った当時の青年が現存するとか。

▽鹿島神社の境内を抜け南部高校前から、Tという小料理屋の二階へコンベア式に、小谷氏に導かれ、ハイキングよりもここでの一杯にウエートが置かれた結果になり、小谷氏に散在させてしまった。ところで、ここの女将はなかなか面白い人物だそうで、小谷氏が局長を勤める南部郵便局へ、この女将が殴り込みをかけた話は、小谷氏の才筆によって、や

がて本紙に紹介されることになるかもしれない。

余滴④

「紀州新聞」昭和四十二年十二月十二日掲載

下平川でバスを降りると、竜神村甲斐ノ村の五味さんが佇っていた。このハイキングに参加しようと出かけて来てくれたのである。この人は夏のハイキングにも参加した。五味氏を加えて婦人三名、男性六人の御坊文協あるく会第八回ハイキングが、平川～蛇尾～中津川～千津川～北吉田～御坊への第一歩を踏み出した。大雑把に言って、きょうのコースは白馬山脈南麓の枝尾根を横断することになっている。早速山峡へと入って行く。あるきながらT夫人は「公民舘主催の真妻山登りにも参加しました。しんどかったけと大滝川～真妻コースよりは楽だった」と言う。「それでも、真妻山登りにも〝死んでしまう〟との悲鳴を発した」と同行のS夫人が冷やかす。このT・S両夫人と大原医院の看護婦さん(?)のトリオはあるく会ハイキングの常連になってしまって、この三人の顔が見えないことには、意気があがらない。そのトリオが今回も参加してくれたので、例によって天衣無縫な彼女らの笑い声が山の峡間に反響する。

▽小さな山田が段々にかさなっている。もちろん稲作しかできない田だ。稲の刈り取りが早かったらしく、切り株から出た芽が籾だけの穂を出している。径にはホソの実が落ちている。

▽S夫人は植物採集にすこぶる熱心で、いつのハイキングにも移植ゴテとビニールの袋を持参してくるが、今日も例によって道中に発見するリンドウやシュンランを堀り取っているし、実の美しいカシュウや野ブドウ(?)の枝を折り取り、カシュウの針に刺されては悲鳴をあげたりしている。

▽東蛇尾で大きな石仏が目についた。石仏となると食指を動かすのが本紙〝碑巡礼〟の清水長一郎氏で、早速寺西氏に撮影を依頼する。この石仏は舟形の石に浮き彫りにしたもので道標を兼ねており、台座は別にして一㍍余りの大きなものである。撮影には供えられた花は邪魔だというので花筒から抜いたが、さて撮影が終ってから、花を元どおりに筒に挿したかどうか。清水氏の碑マニアぶりは西蛇尾の寺でも現れて、墓地内のあちこちから三個の板碑を一ヶ所に集めて撮影していた。しかも、寺西氏の撮影が頼りなく思われたからか「きょうの写真が駄目なら、出直してくる」という。本紙連載の碑巡礼には、筆者清水氏がこれほどの意気込みであることを改めて知っていただきたい。

▽中津川では御坊の中川藤吉家で開墾している広面積な現場を見た。そしてこの開墾地に何をつくるのだろうかが話題になった。中津川という土地はおもしろい。人家のあるあたりが段丘みたいになっている。これなんか野田三郎氏あたりから説明してもらえれば一段と興味がわくことだろう。見わたす限りが夏柑畠に開墾されていて、どの家もふところの

あたたかさを現しているように思われた。人家の立派さは千津川でも見られた。千津川にはずっと昔に一度行ったことがあるが、面目はまるで一変している。つまり中津川も千津川も夏柑によって恵まれた土地というべきか。また北吉田ではいわゆる旧家と、夏柑成金らしい家の対照がはっきり現われていた。これは戦後において夏柑が寒村に裕福さをもたらしたといえるであろうが、さて夏柑の有利作物性がいつまでつづくか。あるいは夏柑の有利作物性を持続させるために、農家はどのような手を打つべきか、慎重な検討が必要にも考えられる。

▽千津川から北吉田にかけてしきりに道路改修工事が行われている。この道路は県道玄子～小松原線で、将来は白馬山麓道路の一環となるのであろうか。きょうわれわれが通ってきた蛇尾～中津川～千津川を結んで、県道川原河～御坊線よりも北に白馬山の麓を縫って、農免道路が開通した時のことを実感に近い感覚を持って想像することができたのも、このハイキングによって私が得た大きな収穫であった。

碑巡礼余談山地郷めぐり

「紀州新聞」昭和四十二年八月四・五日掲載

七月二十三日、竜神村公民舘と寒川道典氏のご厚意で、久しい懸案であった、昔のいわゆる山地郷、三山地方面の碑巡礼をした。碑巡礼をはじめて大分たって、東公教育事務所長から、この地方の古碑の話をきいていたが、何しろ遠距離ではあるし広い村なので、バスの乗りつぎや歩いたのでは一日や二日で埒はあかない。つい延び延びになっていたのである。

この日、朝七時五分、道成寺駅前からバスに乗った。いつもの癖でバスの右側の日高川の見える座席についた。乗客はまばらであった。打谷峠を越えて早藤にかかるあたりから、日高川が右手に望まれ、清らかな流れの中で、鮎を追う釣師の姿が涼し気に目に入った。船津・高津尾の河原にはいくつかキャンプの黄色い天幕が張られていた。

川原河で小憩後バスは再び川ぞいに、一筋道を上って行った。熊野川・滝頭・椿山・串本と河流とともに県道も大きくカーブをつづける。山脚に点在した部落の間が次第に遠くなった。やがてバスは五味で河を渡って寒川の渓谷には入った。九時四十分寒川に着いた。まっすぐ寒川道典氏邸をお訪ねする。いかにも旧家らしい落ちついた構えである。寒川へはこれまでも山百合の花のころや、紅葉の美しい秋祭りのころと数回きたことがある。寒川神社へも安楽寺へもお詣りしているし、下長志の沖野岩三郎先生旧家跡も訪ねているが、いつ来ても物しずかなたたずまいである。寒川邸で道典氏と四方山話、沖野先生の短歌の軸を見る。

信濃なる浅間の山に住むわれも　わすれざりけり故郷の山

沖野　岩三郎

いくつか拝見した軸のうちで、この歌が、もっとも私の心にのこった。晩年ほとんど失明にちかい状態になって、軽井沢の山荘に起居された先生の脳裏に去来するのは、この歌のごとく、幼児をすごした寒川の山河であったに違いない。郷人の乞いに応じて与えられた一首だが哀れがふかい。

十一時すぎ寒川氏が愛車に運転手をつけて用意をととのえてくれた。再び寒川の渓谷を下る。小家・管・芝垣内と小さな集落をいくつか過ぎる。このあたりも或るときはバスで、あるときは自転車を踏んで、何度となく通ったところである。甲斐ノ川小学校で待ちうけてくれていた竜神村公民舘の、糸川景二君と落ち合う。今度の山路郷めぐりで村の公民舘長古久保泉氏に、石碑の所在など照会したところ、古久保館長は会合のため出られないがと、同村の文化財地図や一覧表を送ってくれた上、当日、糸川景二君を案内のため差向けられたのである。私ごとき者にこのご厚意である、まったく勿体ない。

福井で清川在住の林貞助翁が「わしも一緒に行ってやる」と迎えてくれた。久しぶりでお目にかかったのだが、二・三年前お逢いした時分と、ちっとも変わられていない。思わず「おいくつですか」と聞くと「数えで八十」と答えられた。足腰もしゃんとしていられるし耳も目もよい。うらやましい。車中で昼食がわりのパンをかじりながら話がはずむ。寒川道典氏邸でも話題になったが、目下進行中で刊行の日も近い寒川村誌の話。ついこの間も京都大学の一行を案内して、雨中を八斗蒔峠まで行った思出など興味あふれるばかりである。

やがて私たちの車は下柳瀬から大きな峠を上りはじめた。二十八年（一九五三年）の水害以前は日高川の左岸を走って柿坂峠を越えたのだが、水害後この新道がつくられたのである。車窓からはるかの眼下に、いま走ってきた福井・柳瀬の人家が小さく見えた。眺めはすこぶるよい、そのかわり一歩あやまれば車も人も、木端みじんとなる。目もくらむばかりである。

この春、開通したばかりの虎が峰新道の、赤い山肌が右手に現れだしたころから坂は下りとなる。数十年前、故芝口常楠先生が蒔かれた「せんだん」の木を仰ぎながら、安井小学校の前を過ぎて、一路、上宮代まで上る。ここに椎茸の恩人常蔵翁の墓石がある。

上宮代から車をひきかえし、第二の訪問地東へ向かう。車の左手に鶴ガ城が見えたと思うと西へ着いた。奥地にはめずらしいくらい堂々たる上山路橋を渡る。御坊市の稲葉岩太郎氏が架橋したもので、この春、竜神・護摩山・高野山と、いわゆるスカイライン走破をした際、稲葉氏や角松治郎氏と車で渡ったことを思い出す。日高川と奈良県、十津川に源を発する丹生の川の合流点の中州に、鬱然と生いしげる丹生神社の社がある。ここに応永（一三九四～一四二八年）ごろの祝文が今も伝えられるというが先をいそぐので、またの機会にして東の中心部まで行った。なるほど、東公教育事務所長のお話の三ツ石溝記念碑があった。暑いところへしゃがんで碑文を書きとめる。

つづいて大応寺を訪ねた。本堂は近年の再建であるが、屋根はトタン葺きである。初めは瓦葺きにしていたが、冬期の

寒冷で割れるものが多く改めたという。和尚は不在であった。地図に書いてもらった古碑の所在が、なかなかわからなかった。寺の墓地をさがしたり、糸川君があちこち聞いてくれた。そのうち私たちが、さがしている碑の近くまで、これから出かけるという村人が案内にたってくれた。

私は前々から竜神街道をバスで通るごとに、この附近の比較的ゆたかにして、もの静かなたたずまいに少なからずひかれてきた。街道筋から一寸這入っているだけに、ゆっくり滞在して故老たちの話をきけば、案外、古い民俗的なものが遺っていそうな気がしてならないのであるが、今は望むべくもない。案内の老翁に「水田はどの位あるだろうか」と、きくと、「約八十町歩」と答えた。丹生の川や、さらにその枝川の両岸に展けた水田には、すくすくと稲毛が伸びていた。村の背後がこの地方の豪族、玉置氏の古城趾で今は深い緑につつまれている。前は日高川がせまって、要害の地である。その上、竜神街道も十津川に越す丹生の川街道の咽喉部をおさえた形である。

私は野道を歩きながら古代の東村を想像してみた。丹生神社の鎮座といい、丹生の川の地名は、古くこの地方に水銀を産したのを示すものではないか。鶴ガ城の玉置氏と川辺町和佐手取城の玉置は一族である。川辺町和佐にも丹生神社があったし、水銀鉱山がある。玉置一族は水銀鉱山を支配する豪族ではなかったか。

私たちは、また道を転じて、丹生の川をさかのぼり殿原まで走った。B二九墜落供養の碑を見るためであった。東から六キロの山中である。途中、車を運転してきた外人夫妻に出あったほか、ほとんど車を見なかった。この道は遠く奈良県吉野に通じる。さきの外人は十津川から下ってきたのかもしれぬ。小学校の前で車を降りた。殿原分校である。なかなかキチンとした学校のように感じた。ここに小谷緑草君のお嬢さんが勤めておられる。余ほど声をかけたかったが、御坊行きの最終バスに、もういくらも時間がない。そのまま橋を渡って枝川の道のない河原をわけて行った。かなかな蝉がしきりに林の中で鳴いていた。

これで予定の地をすっかり回った。竜神村役場に保管されている「上山路村誌」を、時間の都合で見られなかったのだけ心残りであったが、やむを得ない。それにしても暑中の一日を、ことにせっかくの日曜日を、私のために丸つぶしにして、案内して下さった糸川景二君にはお礼の言葉もない。また寒川道典氏が愛車をご提供下さったこと、竜神村公民舘の文化財地図や文化財一覧表の作成、その他数々のご厚意は胆に銘じてありがたかった。謹んで御礼を申し上げます。

（昭和四十二年七月二十六日）

切目川村郷土史復刻版によせて

「紀州新聞」昭和四十二年七月二十五日掲載

さきに本紙が報道していたように、滝本惣太郎翁が、今回、切目川村郷土誌を謄写版印刷に附して、復刻刊行された。

私が滝本翁に初めてお逢いしたのは、年月は定かでないが、たしかに故芝口常楠先生のお宅であったと記憶する。ある日、先生の書斎でいろいろお伺いしていると、品のよい老紳士がみえた。よほど先生とは親しい間柄らしく、二人の老翁は心から楽しげに、あれこれと語られたのを覚えている。この老紳士が滝本惣太郎翁であった。

瀧本翁はその後、旧切目川村に残っている古い記録を調べて、こつこつ御自分で謄写印刷の上、村内の人々や地方史に興味をもつ希望者に頒布され、私もその都度いただいている。昭和三十七年（一九六二年）春、日高地方公民館連絡協議会が、紀伊日高民話伝説集の編集にかかった時、翁も委員に選ばれて切目川地方に語り継がれている民話伝説を、熱心に収集の上報告されたし、編集委員会にも遠いところを欠かさず出席された。また昭和四十年二月二十八日、芝口常楠氏が長逝された際も、いち早く駆けつけられ、霊前で慟哭されたのを思い出す。お二人は和歌山師範時代からの長い親友であられたのだ。

さて切目川村郷土誌のことだが、これも本紙既報のごとく田辺の人、小川仲記氏が編纂したものである。小川氏の経歴については、まだ不明な点がおおいが匪石と号し、戦前、御坊で勢力のあった紀南新聞の記者で、晩年新聞社を退社後、切目川村郷土誌のほかに白崎村郷土誌・丹生村郷土誌等、いずれも未刊ではあるが編纂している。滝本翁のご調査では小川氏は大正六年（一九一七年）三月十三日長逝、法名は法空実道誠顕居士、墓は田辺市上芳養の善徳寺にあるという。

あれは昭和二十四年（一九四九年）であったと思うが、私は雑賀貞次郎氏の田辺町誌を読んで小川仲記氏の前記、三村誌のあることを知った。その後、芝口先生をお訪ねした時このことが話題に上り、是非この村誌を一読したいものだと話したところ、先生は、「それなら幸い切目川村長を知っている。借覧を頼んでみよう」ということになった。滝本翁が芝口先生の形見として、ご遺族からおくられた切目川村誌は、実はこんな経緯で先生の許に届けられたのを、先生が丹念に読んで間違いを訂し筆写されたものである。私も以前から切目川村郷土誌を持っているが、これは芝口先生の写本から更に転写したもので、この時、同じ芝口本から故・和田喜久男氏も写している。

話は少し脇道に入るが、紀州の代表的地誌「紀伊続風土記」を読むと、「寛文雑記」という本の名があちこちに出てくる。例えば寛文雑記にこうあるとか、寛文記に曰くという類である。寛文雑記はその書名の示すように、寛文年間（一六六一―一六七二）徳川頼宣の命で、紀州一国の名勝旧跡はもとより神社仏閣から村々の産業・人情習俗・山河地塘・豪族の興亡にいたるまで調査記録したもので、その史料的な価値は極めて高い。自然、紀伊続風土記の読者としてみれば、風土記がひいている寛文雑記まで遡りたくなるのが人情である。ところが同書はもう遺っていないのである。私がこの本の所在について紀州文献の権威であった和歌山の、故・山口華城氏に教えを乞うたのに対し、山口氏から

寛文雑記は極めて稀少な存在で、私（山口氏）も嘗て一部をもっていたが、和歌山空襲のおり防空壕内で焼失した。もはやどこにも遺っていないと思う。

というお返事をいただいている。

こんな例は他にいくらもある。書名だけあって本がないのである。どんな立派な本でも部数が少ないと、長い間に災害や不注意で亡んでしまうのである。切目川郷土誌にしてもその例にもれぬ。現に原本は町村合併の際、行方不明になったままであるという。まったく危ないところであった。だが今度は滝本翁のご努力で復刻されたから、もう大丈夫である。心配はない。

またしても脱線を重ねるが白崎村郷土誌や丹生村郷土誌にしても、原本と私たちほんの二・三人が写しているにすぎぬ。同じ危険にさらされている。この機会に関係者のご一考をお願いしたい。

謄写版本・切目川村郷土誌はA五判総頁数一五四・表紙は薄藍色の厚紙を用いてある。内容は当時の切目川村長・中本康英氏の序文にはじまり、目次・本文・最後に芝口先生の写本の次第を記した小文まで忠実に複写してある。印刷も謄写版とはいえタイプ活字なので、文字は鮮明で美しい。また別紙で滝本惣太郎翁が、本書を刊行するにいたった経緯を加えているのも行届いている。

戦後は地方史の研究も大きく進歩した。切目川郷土誌も現代から見ると、なお不備と思われる点がないではない。そのかわり今日では、いくら手をつくしても得られない資料が、数おおくおさめられている。すでに亡び去った民俗資料もある。仔細に味読すれば得るところがおおい。利用価値はすこぶる大きく、これを復刻した文化的意義は量り難い。

一口に一五四頁というが、原稿用紙にすれば相当な量となろう。それを一桝一桝埋めてゆく労力は並大抵ではない。そのうえ印刷所への交渉もあれば面倒な校正もある。経済的な負担だけでも容易であるまい。しかもそれらのすべてを、失礼な云い方になるが八十の老翁が、やりとげられたのである。敬服のほかはない。滝本氏はつづいて町村合併までの切目村郷土誌の続編を、編纂の計画をもっておられる。その精力的な意欲は若い者がはずかしい。せっかくのご精進をお祈りする。

私は世事にうといから当地のことは知らぬが、他郡市では最近、市町村会議員等の永年勤続の表彰や、高価な記念品贈呈の記事をしばしば新聞紙上で散見する。欲得をはなれて公共に尽くされたのだから、それはそれでよかろう。非難するつもりはない。だが、滝本翁のように一人で黙々と、酬いられることのない仕事をなしとげた人にも、世間はもっと考慮すべきではなかろうか。

（昭和四十二・七・十九夜）

湯川直春の碑に就いて

「紀州新聞」昭和四十二年六月十四・十五

十六・十七・十八日掲載

一

湯川直春といえば、日高地方の人なら大抵一度や二度は、きいたことがあるに違いない。直春は天正十三年春（一五八五）秀吉軍の来攻をうけるまで、数代にわたり亀山城に拠り、南紀に威武をうたわれた湯川氏の勇将である。直春の死は一般に天正十四年と伝えられてきた。もはや三数十年もの昔になる。にもかかわらず彼の名は、今に日高地方の多くの人々の間に語り継がれているのは、その悲劇的な最期に対する郷土人の哀悼がいかに深く、かつ大きかったかを、示すものと云えよう。

直春の死について紀州の代表的地誌、紀伊続風土記の誌すところに従うと、

天正十三年三月、根来寺と太田城を陥入れた秀吉軍は、仙石権兵衛・尾藤久右衛門を将として南紀に兵を進めた。直春の伯父湯川安芸守は、直春にその敵すべからざるを説いて降伏の上、湯川家を全うせんことを諭したが直春はきかず、諸将を小松原の舘に集めて軍議中、はやくも秀吉の麾下三千余騎が海陸から迫った。直春は直ちに亀山城と小松原舘に火を放ち焚死の様をよそおい、芳養の泊城に入り、さらに近露に奔って近露六郎・山本主膳等、牟婁の土豪と連合して秀吉軍と戦った。熊野地方は山 高 しくして谷が深い。地理不案内の秀吉勢は、はかばかしい戦果を得ず和を講じた。天正十四年二月秀吉は直春の旧領を認めた。直春は一族三百余人を率いて山本主膳等を従え、紀伊国主になった大和大納言秀長に謁すべく大和郡山に出た。しかし秀長は言を左右にして数ヵ月間これに応じず、七月十六日、直春を旅舎で毒害し、主膳を浴室で謀殺した。直春、法名を光岸浄照という。直春の後を湯川丹波守と称し浪人となったが、安芸守浅野氏に三千石で仕え、宮島奉行となった

とある。また、ほぼ時代を同じうして出た「紀伊国名所図会」の記事も、殆んど前記「紀伊続風土記」の記述を踏襲して、かわるところがない。「紀伊続風土記」は天保十年（一八三九）、三十三年の日子を費やして完成したものであり、「紀伊国名所図会」後編は、嘉永四年（一八五一）の刊本である。

降って大正十二年（一九二三年）発行の森彦太郎先生著「日高郡誌」も直春の最期を、

―豊臣氏遂に湯川・山本等の本領安堵を約して和を求め、漸く軍を収むることを得たり。斯くて翌天正十四年計を設けて直春・主膳を誘殺し、全く其の地を奪ふ

と記し、昭和五年（一九三〇）に出た雑賀貞次郎翁の「田辺町誌」にも

―豊臣勢は地理に暗く山谷の地奔に馴れぬこととて、流石に手の下し様なく、本知安堵を条件として和議することに

なり、戦は中止せられた。併し之は豊臣方の謀略だった。翌十四年二月、湯川直春・山本主膳等、紀伊の領主大和大納言秀長に謁し、本知安堵の令を受くることになった。之は誘きだされたのだ。所領を追われた湯川・山本の郎党、旧功高恩の侍達は蘇生の思ひで、三百余人期せずして集り、郡山に着いて旅宿に滞在し謁見の日、本知安堵の令を待ったが何の沙汰もない。領地を離れた浪人のこととて、費用に乏しいから長く滞在にならず、附き従ふ人々は次第に郷里へ帰ったが、かくて従者の少くなったのを見計ひ、豊臣方は七月直春を毒殺し、山本主膳も亦藤堂佐渡守の許で打たれた。(入浴中に討たる。年二十五才)附き従う一族も或は討たれ、或は傷ついて遁れた。―

とある。

二

周知の通り日高郡誌の著者も田辺町誌を書いた雑賀翁も、共に傑れた郷土史家であった。湯川直春の最期についても、博く文献を渉猟するは勿論、口碑伝承の類まで調査の上、執筆したのに相違ないが、その根本的な資料として用いたのは、やはり前記「紀伊続風土記」中の湯川関係の記事であったと思われる。そうすると今度は「紀伊続風土記」の湯川一族の興亡は、一体何に拠ったかという疑問が生じる。これについて「紀伊続風土記」の完成と殆んど時を同じうする、その姉妹書ともいうべき「紀伊国名所図会」湯川氏畧伝の条に

湯川氏は政春・直光・直春三世より以前の名伝はらず。湯川実記或は落城記といえる書あれども、近世の書と見えて信用しがたき事多し。されど又他の記すべき事なければ、暫く其書を引用す。

と記しているのである。無論「紀伊続風土記」と「紀伊国名所図会」とでは、同一に語ることは出来ないが、こと湯川一族に関する限りでは、「紀伊続風土記」の編者も、「湯川実記」や「落城記」を資料として用いたものと思われる。

さて、湯川直春の最期について小見を述べるつもりの文章が、思わず前置ばかり長くなったが、順序として私はここで「湯川実記」や「湯川記」にふれてみたい。

「湯川実記」或は「湯川記」は、古くから日高地方に写本として伝えられてきた。「落城記」も恐らく同じこととおもわれるが、この方は私は未見である。前記の二書は内容に於て殆んどかわりはなく、共に筆者も著作年代も詳らかでない。しかし其の文体などから考えると、多分、徳川中期以降の成立として大過あるまい。そして其の資料的価値という点になると、既に「紀伊国名所図会」の編者の指摘のごとく、信用しがたい箇所がおおく、まず虚実相半ばするという所であろう。ともあれ「湯川実記」の中から、直春の死に関する記事を引用すると、

天正十四年(一五八六年)二月本知安堵あるべき旨に付直春郡山へ参らるると聞こえしかば―

と書き出して、郡誌や田辺町誌に記している如く、一族郎党三百余と山本主膳を引具し郡山に出向いた事、秀長が言を構

えて会わなかったこと、家来達も滞在費に困りいつとはなしに帰国し、直春も心細く思ったことを叙して、

直春も何となる事やらんと行く末心細く思はれける。

とある。次いで、いきなり

山本主膳は城をば図書に預けおき……

と主膳の話になって、主膳が二十五才で風呂場で討たれた前後に移っている。考えてみると文章の続き具合が少しおかしい。或は転々と筆写されているうち、一部を脱落したのかも知れぬ。そして直春の死については

湯川十二代中務少輔直春討死の日は、天正十四年五月二十日也。毎月二十日日高薗御坊に祥月命日入念。仏とむらふ。

尤も直春の画像納れる此御坊……

とあって、湯川実記には討死とみえるが、毒害云々の文字はどこにもない。なおついでにいうが薗坊舎で毎月二十日直春の命日ゆえ回向を行うとあるが、これは明らかに直春の父直光の命日と混同している。また直春の画像は直光の画像の間違いである。わずか数行の記事にもこれだけの誤りが目につく。「紀伊国名所図会」の編者に、「近世の書と見えて信用しがたき事多し」と、きめつけられてもしかたあるまい。さて、今度は「湯川記」を抄出すると

天正十四年二月本知安堵可有由にて直春大和国郡山にて日数ヲおくり給ひしが、同年七月に毒害せられ給ひけり。

と、はっきり毒害としている。

以上、くりかえし述べたように、「湯川記」や「湯川実記」の史料的価値は、あまり高く評価できないにしても、徳川中期以降ひろく写本として日高人に愛読され、また「紀伊続風土記」・「紀伊国名所図会」をはじめ、大正年間の「日高郡誌」、昭和に入っての「田辺町誌」等の諸書も、おおく前記二書を祖述したため、いつの間にか日高人の間に、湯川直春は天正兵乱の際、大和郡山で毒害せられたと信じこむに至った。蓋し無理のないことである。

三

だが、それは本当だろうか。考えてみると少し、おかしいではないかと、これまで誰もが信じてきた直春毒害説に、疑問を投げかけた人が出てきた。宇井縫蔵氏であった。

宇井氏は田辺に住み、久しく同地の女学校で教鞭を執った。もともと植物や生物を専攻し、特に紀州の魚類に詳しく、「紀州植物誌」・「紀州魚譜」その他の著書がある。退職後は大阪府下に閑居して紀州史の研究に没頭、「南紀史叢考」・「続南紀史叢考」八冊を謄写印刷して知友におくったが、直春の最期についての疑問は、まず昭和十四年（一九三九年）六月十日発行の「南紀史叢考」誌上に「田辺地方における天正兵乱の再検討」と題して掲げられた。少し長いが引用してみる。

最後に天正十四年七月、湯川中務大輔直春、山本主膳頭康忠等が、郡山へ誘致、謀殺せられたという劇的場面にもメ

スを加えねばならぬ事になってくる。湯川彦右衛門覚書に、「紀伊国中太閤へ一味仕リ湯川敵ニ仕候付、湯川モ日高郡小松原ノ城ヲ明ケ、直春モ熊野ノ奥三バン（近露のこと）ト云所へ立退候。（中略）下早（下芳養のこと）ニハ林左京進ト申者ヲ常ニ指置候。太閤方ヨリハ青木民部少輔・仙石権兵衛其外ノ大名分ノ衆、舟ニテ下早へ上候時、湯川三番ヨリ押寄合戦仕候。（中略）―扨直春モ其砌無程病気ニテ相果被申候」とあり、これによって下芳養合戦のアウトラインも判るし、明らかに直春病気とあれば毒殺云々の疑念をさしはさむ余地は少しもない。想うに直春の病死は下芳養敗戦後いく程もない時分のことで、主将を失える湯川勢は意気沮喪して降参したものであろう。なお同書に「太閤紀伊国へ御入候テ以後、直春ノ子太郎五郎幼少ニテ居申候ヲ、太閤ヨリ被召出、知行三千五百石被下候。太郎五郎後ニ湯川丹波守ト申候、太閤ノ弟大和大納言へ御付被成候」とあるをみても、直春毒殺説否定の傍証となろう。何となれば、これは降参である故、その遺児がかかる恩命に浴したものと見る事が出来るので、若し毒殺であったならば仇敵とつけねらはるべき危険分子を、側近く召抱えるといふことはあり得ないと思ふ。

一方山本主膳頭の最期はどうなったかを調べて見ると、それは藤堂家覚書に、「湯川はかうさんいたし候。山本は和泉様武略を以て御うちはたし……云々」とあれば、これも和睦の翌年郡山までいって討たれたとする事は不当であって、やはり天正十三年（一五八五年）四・五月頃に、市の瀬附近の合戦にて敗北せられたものと見るべきであろう。

宇井氏はさらに同書中に「湯川記を読む」と題して、「紀州地士覚」―元禄（一六八八―七〇四年）ごろ成立―湯川の条

「日高郡湯川居城は小松原。領地は日高郡土生村より下の浦里并海士郡の内衣奈由良筋、有田郡広辺にて御座候。秀吉公当国入来の時引受可申覚悟仕候へ共一戦にも不及、室郡近露村迄退下申候、近露迄退候刻も合戦御座候由、其後室郡より手勢を遣、日高郡南部辺にて節々合戦御座候へ共、後は曖（あつかい）に罷成、和州秀長公へ罷出三千石取罷在候処、大姉御陣の時、西方に罷仕候ニ付、夫より浪人仕、浅野紀伊守殿へ七百石にして在附申候。名者湯川丹波守と申者候。只今広島にて相果候て知行減り其子跡立候由」

とあるのを引いて、

―丹波の守の父直春が降参したとも、毒害せられたとも書いてなく、和睦したのも大和大納言に仕へたのも丹波守のようになっているから、私の推断通り直春の病死後降参したとするのが妥当な見方であろう。

と病死説をくりかえしている。同氏はまた続いて昭和十五年（一九四〇年）十月二十五日発行の「続南紀史叢考・草案第三集」の中で「山本主膳頭の最期について」と題し「藤堂家覚書」の

紀伊国一揆大将山本のなにがし、湯川直春と申す者以上二人にて御座候。大納言殿より討手は青木紀伊守・伊藤下野・杉若越後・和泉様右之衆、度々の御働に候得共、二・三年の間敵ささゑ居申候うちに湯川はかうさんいたし候、山本は和泉様武略をもって御うちはたし……云々

を掲げ湯川を降参したものとしている。「湯川記」や「湯川実記」の半フィクション物にくらべると、「湯川彦右衛門覚書」・「藤堂家文書」の方が、はるかに史料的価値の高いことは云うまでもない。確かに宇井氏の所説は筋が通っている。以来、郷土研究家仲間では、直春の病死・湯川降参が通説となった。されば昭和二十七年（一九五二年）五月十五日刊行の「田辺市誌」では、さきの「田辺町誌」直春毒殺説を、

湯川は帰順したとみるべく現に直春の子丹波守は羽柴秀長に召し抱えられその被官の多くもそれぞれ仕官の途についている……」

と訂正することを、著者雑賀貞次郎翁は忘れていない。

四

ところで此処に不思議に思われるのは、例え秀吉の軍門に降ったとは云え、直春ほどの人物の死没の日が確かでなく、その墓碑は勿論、供養塔がどこにも遺っていないことである。直春の父、直光の墓も久しく不明であったが、これは昭和十五年、故和田喜久男氏によって、湯川町小松原・法林寺の境内で発見された。

直光は周知のとおり永禄五年（一五六二）五月二十日、畠山高政に従って河内教興寺―大阪府南河内郡高安村に在陣中、宿敵三好勢の猛襲をうけ、根来衆徒と共に紀州勢三千が防戦したが及ばず、湯川一族郎党七十三人、その他貴志・白樫・富田・飯沼・龍神・目良・山際・神保・安宅の豪族五十余人、根来衆二百余人と相ついで壮烈な戦士を遂げたのだが、その宝篋印塔は流石に紀南の覇者にふさわしく、総高三尺六寸に及ぶ堂々たるものである。また塔の基礎の中央には

源詳岩宗吉大禪定門神儀

とあり、その左右に

永禄五年（一五六二年）壬戌五月二十日

とあるのが今でも読まれるのである。

「直春の墓いずこ？」私は機会あるごとに、この悲運の覇者の墓をさがした。一向にそれらしき墓を見出せぬうちに、二十年ちかい歳月が過ぎた。いま日記を取出してみると昭和四十一年（一九六六年）四月四日となっているが、この日午後当時御坊市役所産経課にいた山中不艸君が、見知らぬ中年夫婦とつれだって、私の勤務していた専売公社御坊出張所へみえた。中年夫婦は東牟婁郡那智勝浦町湯川の人で、潮崎金兵衛と称し、同氏の所有地に古くから湯川直春の墓と伝える五輪塔があり、土地では「はんか様」と崇めている。しかし湯川直春について知る所がないので、その概略をききたいと、わざわざ御坊市まで出向いてきたということであった。潮崎氏はまた湯川直春の墓と伝える五輪塔の写真を私に示した。

これは意外なことであった。「はんかさま」は恐らく「判官様」であろう。直春のころまだ判官様の称があったか否か

私には分からないが、身分のあるひとの尊称としてもよかろう。秀吉の急襲を受けた直春が、小松原を落ちて西牟婁郡近露に奔り、その後、牟婁山中で屡々ゲリラ戦に出たことは諸書の一致するところであって、もし「湯川彦右衛門覚書」の記すように、「扨直春モ其砌無程病気ニテ相果被申候」が事実とすれば、近露から熊野湯川まで山伝いに行けば、さして遠い距離ではない。まして湯川の地には古来、温泉があり病気療養に赴き、同地で病没したという推理も成立たないではない。

しかし何にしても墓碑を見た上、確かな証拠を実見した上でないと、俄に断定する訳にはゆかぬ。「塔に文字があるだろうか」ときいてみた。「あることはあるが風化が強く、読みがたい」という返事であった。私は潮崎氏に「機会を見て現地を調査したい」と約束して別れた。

機会はなかなか来なかった。そのうち一年の日がたった。今年の春であった。潮崎金兵衛夫妻は再び私の許にみえた。雑談の末、湯川関係の寺々をまわり御坊に一泊して帰った。いよいよ私もこれ以上湯川行きを延ばすことを許されぬ羽目になった。そこで五月六日、思いきって小谷緑草君と、湯川温泉を訪ねた。同氏には知ってのとおり直春を中心にした力作「湯川一族興亡史」があり、かねがね湯川氏の研究に、ふかい関心を寄せているからであった。

五

湯川温泉は十数年前二回ばかり遊んだことがある。その折宿泊した喜代門楼は既に改築され、他にも大きな旅舘が出来ているが、白浜や勝浦にくらべると、その変化はゆるやかで、やはり物しずかな湯の里である。潮崎氏の家はすぐ分かった。予定時刻を早く変更した為金兵衛氏は不在であったが、夫人が墓地へ案内してくれた。小川を渡った旅舘の裏手の樹陰に五輪塔はあった。もとは現位置(那智勝浦町湯川橋之本一四八の内一号・墓地・四歩)に隣接する雑木林の中腹に安置されていたのであるが、数年前の豪雨の際、土砂崩れのため転落したのを、潮崎氏が今の地に移したという。

塔の安置している所は五〇糎ほど高く石垣を築き、塔の周囲には細かい砂利を敷いていた。成程大きい。堂々たる風格である。試みに計測すると総高一六九糎あった。五輪にはそれぞれ空・風・火・水・地と漢字で刻んであった。台石にはなにか文字らしいものがあるが、潮崎氏の言葉とおり読みがたい。私は用意の紙を取出し拓本をとりはじめた。碑面が花崗岩の風化したものときている。おまけに風があって、なかなかうまくゆかぬ。

そのうち、家から連絡があったと金兵衛氏が駈けつけてくれた。さんざん苦心の末やっと、

正保元年(一六四四年)

□□□□□□

十二月九日

と判読することができた。直春の死が通説の如く天正十四年（一五八六年）とすれば六十二年の後である。墓では無論ない。供養塔としても少し年代が開きすぎるような気がする。それに肝心の法名がどうしても読みとれないのが、致命的な弱味である。また帰宅して念のため年表にあたると、正保は五年二月十五日慶安と改元している。私には読み違いはないと確信するが、如何に草ふかい当時の熊野とはいえ、これは少し腑におちぬ。

それにしてもこの五輪塔の堂々たる風格はどうであろう。かなりの身分の人の供養塔を、相応の身分の者が建立したことを物語るものではないか。その上、潮崎家では代々、湯川直春の墓と云い伝えて崇敬し、昔直春が当地に於て病没したと伝承してきたというのをどう解釈してよいのか。

これだけ道具だてがそろえば、小説ならすぐ直春の墓としてもよい。だが歴史となるとそう簡単に運ばない。直春の法名や歿年、建碑の次第が確証されるまで何とも云えない。私の期待は空しい結果に終った。しかし見当もつかなかった湯川直春の墓碑の所在に、こう云う場合もあり得ると、一つの仮定を与えてくれたとは云えないだろうか。決して無駄ではなかった。

その夜小谷君と私は、潮岬に出て印南・南部の短歌会の人々と合流、潮岬青年の家に一泊、要海正夫所長のお世話になった。夕食後歌会あり拙詠

伝・直春の碑を仰ぎて天正の日高の覇者とうたわれし　直春もついにここに死にしか

の一首を披露したことであった。

（おわり）

尾崎光之助氏のことども

「紀州新聞」昭和四十三年五月三十日掲載

尾崎光之助氏の訃を新聞で読んで、もはや一月ばかりがすぎた。尾崎さん—大先輩の氏を様づけで呼ぶのは、いささか礼を失したきらいはあるが、氏では何かいそいそしい。敢て様の称を用いさせていただく。

尾崎さんは、ご生前名聞を好まれなかったし、ご住居が南部町山内であった関係も手伝い、御坊附近では割合馴染みが少なかったが、貝類と蟹の研究家として、いくつかの新種を発見され、この道では歴とした存在であられた。

昨年の暮れの二十五日であった。私は尾崎さんを、氏の所謂片倉山荘にお訪ねした。新しい書画帖の第一頁をこの高名な研究家の筆で飾ってもらうためであった。尾崎邸は岩代駅から国道を二十分ばかり歩き、さらに山道を数町登った所にある。前に何度もお伺いしているのに、どうしたことか国道からの登り口で道をとり違え、霜の降りた梅畑の中を、行きつ戻りつしたあげく、やっと尾崎邸の前へ出た。縁側に寝そべっていた白い日本犬が、私を見て猛烈に吠えたてた。

ここは江戸時代の熊野街道にあたり、嘉永四年刊行（一八五一）の紀伊国名所図会には、この峠の茶屋に憩う多くの旅人と、峠の向こうにひろがる千里の海が描かれている。紀伊国名所図会にある峠茶屋が、すなわち尾崎さんのお家である。明治になって新道がはるか下の方を通じるに至り、尾崎家は農業に転じ、手広く開墾などしておられた。

何の前ぶれもせず突然の訪問であったが、尾崎さんは歓迎してくれた。いつものとおり貝や蟹の標本がギッシリ並んだ、氏の研究室兼書斎で、長い間話こんだ。尾崎さんはこの二・三年少し健康を害なわれていると聞いたが、予想以上に弱っておられた。もともと静かな話しぶりの方であったが、言葉も身のこなしも、たどたどしかった。視力や根気の減退、思考力の衰えを嘆かれ、もはや研究の続行は断念の外はないと訴えられた。

それでも生涯をかけてきた研究が、そう簡単にあきらめ切れる筈がない。書架から厚い専門書や、陛下著の「相模湾の生物」を、おぼつかない手つきで取り出され、書中の尾崎さん発見の蟹の図を示された。この方面の知識の全くない私は、尾崎さんの挙措を痛ましい思いで眺め、そこに男の執念を感じた。

尾崎さんを初めてお訪ねしたのは、昭和二十四・五年（一九四九・五〇年）ごろであった。そのころ私は森彦太郎先生伝を執筆中で、先生が南部町の日高第二実業学校時代の教え子にあたる尾崎さんから、先生の行実をおききするためであった。私はこの時、一日近く尾崎さんからお話をきき、さらにやはり森先生の教え子であった南部町の方々や、交渉の深かった浜口佐四郎南部町長を紹介され、尾崎さんの自転車に同乗して、片倉峠を南部町に下ったのであった。

尾崎さんは見るからに温厚誠実なお人柄で、若くして既に君子の風格をそなえられていた。今年の正月すぎであったか、紀州路同人の浜田竜夫画伯から、こんなお話をきいた。

戦中戦後の食糧不足時代、食物にこまると、浜田画伯は決まって尾崎さんに無理を云うた。尾崎さんはその都度、浜田画伯の希望するだけの甘藷を用意したものだ。口に入る物なら、何でも公定価格の何倍かの闇値で、飛ぶように売れた時代なのだが、尾崎さんはどうしても公定値以上にとろうとしなかった。

浜田画伯のお話から、ふと幾年か前に聞いた田端憲之助翁のことを思いうかべた。

田端翁は戦時中から戦後にかけて、松原農協に勤務された。食糧と同じように肥料も極度に不足していた。肥料の配給に関係していた翁のもとへは、暮夜ひそかに手をかえ品をかえて、肥料の闇取引を依頼する農家の人が多かったが、翁はその度に「私はささやかながら農協から給料を貰っています。法をまげて不公平な取扱いをしては、組合員の皆様に申し訳ありませんから、そのご相談には応じかねます」と、かたくなに肥料の闇取引を拒みつづけた。

今から考えると尾崎さんのとった措置も、田端翁の態度も至極あたりまえのことであるが、その当然のことが、よほど正義感の強い人でないと、貫きがたい時代であった。

「南部町では尾崎さんのことを、片倉峠の聖人と尊称している位である」

甘藷の話を私に語った浜田画伯は、こう冗談とも本気ともつかず、つけ加えられた。

この誠実さが尾崎さんをある時期に南部町町会議員に推し出したり、教育委員長や農協組合長の要職に就かしめたが、尾崎さん自身はこうした政治の舞台に出ることを、そう好まれなかったのではないかと思われる。事実、合併前後の農協組合長の激職は、尾崎さんの心身に少なからぬ負担であったことを、私にそれとなく洩らされたことがある。

尾崎さんはまた郷土研究方面にも深い関心を示された。南紀郷土学会や南紀史蹟顕彰会の会合にも、しばしば参加されたし、貝や蟹の研究発表をされたこともある。昭和三十七年（一九六二年）、日高地方公民館連絡協議会が、民話伝説集の編集刊行の企画をした時、尾崎さんも委員の一人として、お忙しい中をいろいろご活躍になったし、二・三年前、県文化財協会が結成された際、御坊支部の副支部長になられた。こうして私は年ごとに尾崎さんを敬慕したのあった。

もう数年前になろうか、ある休日の午後、突然尾崎さんが茅屋へ見えられた。農協関係の会合が川辺町農協矢田支部であったのに出席した。近くまできたので立ちよったというお話であった。私はまた此の時、尾崎さんの専攻の蟹の話や、南部地方の話、共通の知人の近況などお聞きして時間の過ぎるのを忘れた。夕方近く辞去される尾崎さんを、小庭をバックに記念撮影してお別れした。できばえは余りよくなかったが、後日この写真をお送りしたところ、ひどくよろこばれたお返事がとどいた。

尾崎さんが専攻された貝や蟹の世界は、門外漢の私には知りがたいが、その温厚誠実なお人柄は、一見、村夫子然としたおだやかな御風貌とともに、何時までも思い出される。なお尾崎さんは明治三十二年（一八九九年）四月八日、南部町山内六十三番地で尾崎楠太郎・イトの長男として生まれ昭和四十三年（一九六八年）四月二十五日亡くなられたのだから、享年六十九才、私より十年の年長であった。

山の家の夜半の目覚めのさふしさに　出て見る月の蒼さかや　　未知庵

私が昨年十二月二十五日お願いした書画帖に、揮毫された一首である。未知庵はすなわちその号で、尾崎さんはしばしばこの号を用いられている。

堀内喜市郎先生著

「教育に生きる」に寄せて

「紀州新聞」昭和四十三年六月八日掲載

近ごろは殆んど用いられぬが、「六日の菖蒲、十日の菊」という言葉がある。時期におくれて役に立たぬ物事の例えで

ある。

堀内喜市郎先生の著「教育に生きる」が、日本教図株式会社から刊行されたのは、昨年の七月二十日であったから、かれこれ一年になる。今ごろその読後感を述べたりしては、六菖十菊どころではないが、万事スローモーションの私である。お許しを願いたい。

さて「教育に生きる」は、その刊行直後、著者からわざわざ郵送していただいた。当時私は田辺市の専売公社へ通勤していたので、往復の車中で愉しく読み終った。申し訳ない話であるが、「教育に生きる」が紀州新聞に連載されていた時は、初めは忠実に読んでいたが、いつとはなしに飛び飛びに読んだり、やがては全く読まぬ日が続くようになった。しかし今度は隅から隅まで目をとおした。やはり、まとめられて一冊の本となると堂々として貫禄があり、人を引きつけて離さない。

本書を読んで最初に興味を覚えたのは、先ず描かれている舞台が、私たちが日常生活をし、朝夕親しんでいる日高の地や、和歌山近在であることであった。その上登場する人物が、私たちの身近におられる誰彼である点であった。第三に著者が教育家として活躍された年代が、私の青少年時代と余りに隔たりのない所が、大きく私をひきつけたのであった。

一例を挙げると大正六年（一九一七年）四月、著者が和歌山師範学校を卒業して、希望に胸をふくらませながら、川中第一小学校に初めて赴任してゆく道中の描写、炭俵を負うた駄馬。仏串峠から菜種の花咲く川中村を眺望する頁。或いは歓迎会が終って渡し舟で、夜の日高川を教員住宅のある小釜本へ渡るところ等は、比較的このあたりの地理を知る私には、人一倍懐かしいものであった。

次に「教育思想の革命」の項で、現、川辺町長平井栄太郎氏が、颯爽たる教育家として登場してくる。この頁等も私は特殊な感慨をこめて読んだ。というのは平井栄太郎氏は私の旧師なのである。当時、氏は藤田小学校の名校長として、美しい夫人とお二人で学校の側の教員住宅におられた。私は毎夜夕食後、鈴木という一つ年長の少年とお宅へお伺いして、数学と国語を教えていただいた。二人とも甚だ出来のよくない、所謂、不肖の弟子であったが、こんな時代が四年ほど続いた。「教育に生きる」は、ゆくりなくも過ぎ去った古い昔を思い出させた。

そのほか故湯川政一郎氏と関係の深かった綴方教室の「赤い鳥」の話。また青年時代から高遇な識見で知られた宮所恒楠氏の、敗戦後の活躍ぶり。全県を二つに分けて震撼させた昭和三十三年（一九五八年）の勤評事件。これは著者が副題として掲げられた「五十年の実録」そのものであり、その記録情報の精細な点、まったく驚くべくものがある。よほど平素から丹念に資料の収集整理に心かけておられたのに相違ない。と同時にこれは、中央の高名な学者の教育史には見られない、血の通った生きた本県の近代教育史ということができる。

ことわるでもないが、初老を迎えたと云うのに、相変わらず「へま」ばかりくりかえして、一向老成も円熟もしそうに

ない私は、およそ教育には不向きな存在であって、真面目な本書の読後感など書けはしない。またそうした正面切った読後の感想は、本書の刊行直後おおくの人々によって書かれている。

ただ私の如き、この方面の素人にも云えることは、著者こそは生まれながらの教育者であると云うことである。こういう表現は著者に対して非礼になるし、誤解を招くおそれもあるが、著者は教育が好きで好きでたまらないのである。職業としての教師をやめてからも、和歌山県、いや日本の教育をだまってみておれないのである。論語に云う「之を知る者は、之を好む者に如かず。之を好む者は之を楽しむ者に如かず」の類であって、もはや著者は之を楽しむ境地に達しておられるのである。欲得をはなれた世界なのである。

私たちの周辺には立派な教育家と信じていた人が、一度教職を退くと同時に、教育的なこと柄に全く関心を示さぬ場合が往々にしてみかける。退職の後々まで教育家であれというのは無理な注文には違いないが、他の職業とは異なり、こうした様を見聞きすると、何か索然たる気持ちになるのも事実である。その点、著者はありふれた職業教育家ではなく、しんからの教育家であられる。そしてその結果が「教育に生きる」を世におくられた。のみならず今もなお本県の教育に火のような情熱をもやされ、数少ない同志の方々とともに、絶えず注意ぶかく見まもっておられる。思うに著者の如き真摯な教育者をもつ本県の教育界は、まことに幸福かつ心強い極みと云わねばならぬ。さらに先生の御健勝をお祈りする。

「先師に学ぶ」を拝読して

「紀州新聞」昭和四十三年七月二十五日掲載

津本鐵城師著「先師に学ぶ」が、美しく爽やかな装禎をこらして、京都の永田文昌堂から公刊された。

いうまでもなく本書は数十年にわたって天性寺の門前の掲示板に掲げられた先師の訓語のうちから五十五編を選んで、鐵城師がこれに解釈と感想を加えられたものである。

津本鐵城師が天性寺の門前に掲示板を設けられたのは、師のあとがきによると、大正十二年（一九二三年）のことであるという。もはや五十年ちかい昔になる。この間に掲示された訓語は、恐らくおびただしい数に上るであろうが、その一部はさきに「道味小品」と題して顕真学苑から修養叢書の一巻として刊行され、たまたま戦犯として巣鴨拘置所にいた某元将軍が、刑死の間際まで愛読し、最期には遺品袋に入れて遺族にまで伝えられたことは、余りにも有名であるが、「先師に学ぶ」はその第二集にあたる。

ひと口に四十五年・六年というが長い年月である。その間、師は毎週かかすことなくあたらしい訓語を、つぎつぎと掲げて道行く人々によびかけられた。それも金言集や名言集の中から、適当に拾い出されるのなら必ずしも難しい業ではな

いが、津本師の場合はそうしたありきたりの方法ではない。仏典を読まれた中から、或は新聞小説の中から、古人の句の中や歌の中からと、広い日常の語言の中で、これはと感じられた一節一句を、選ばれるのであるからその苦労は並大抵ではなかった違いない。

由来、金言とか名言、あるいは訓話の類は、どうかすると一種の臭みを発散して、読むものにややもすると反発さえ覚えさせるが、「先師に学ぶ」に選ばれた言葉には、さすがにそうした後味の悪さはない。

「先師に学ぶ」五十五編、どの編から読みはじめてもよい。一編一編、きわめて分かりやすく、およそ文字を解する程の人なら誰にでも理解できるように、噛みくだいて書いておられる。しかも決して調子を下げたり、俗に媚びたりはしておられない。やはり著者の深い学殖と高い識見、高雅な御人格に加えて、長い布教伝導の経験の賜りというべきであろう。

私のような者が悟り顔をしていうのは笑止の限りではあるが、いまの世の中は、余りにも騒々しい。何も彼もが狂っているような気がする。街には読むにたえない出版物が多すぎる。小冊なりとは云え「先師に学ぶ」は、まさにこのような世相に対する、好個の清涼剤であって、しかも御坊市から生まれた。心からおよろこび申上げると共に、師の益々のご健勝ならんことをお祈りしたい。

「紀州新聞」昭和四十三年七月二十六日掲載

碑巡礼こぼれ噺

昭和三十八年（一九六三年）六月十八日、碑巡礼、第一回「松尾塊亭の句碑」を本紙によせて以来まる五年、回を重ねて三百六十回ちかくなった。書く方は己れの好き勝手で続けていることだが、読んで下さる方々のご忍耐と、掲載を許容されてきた新聞社のご好意には、まったく感謝の外はない。

ところで諺にもあるとおり「阿漕（あこぎ）の浦に引く網も度かさなれば……」何とやらで、時々調査不充分のため思わぬ間違いをおかして、その都度ご迷惑をおかけしている。ついこの間（碑巡礼三四七回）も滝法寺を「古義真言宗山階派に属し」と書いて、同寺、西山性運師から高野山真言宗が正しい旨、ご訂正をいただいたが、今回また第三五四回西神ノ川の道標について、同地の桑野為一氏から次のような葉書を戴いた。私信を公開して申し訳ないが、甚だ興味ふかい内容なので、平素のお心易さに甘えて一部を掲載させていただく。

○

―過日碑巡礼、当地の巻なつかしく見せて頂きました。文中、人物、道世光弘とありましたのは、道は左右の行先につけたもので、姓称は世光弘と読まれるのが正しいです。名は藤十郎と言う人で、私が子供の頃もう相当な老翁で、

大正初期に亡くなられたと思います。その頃、神ノ川地区としては同氏が先覚だったらしく、大字関係の明治時代の書類は殆んどこの人の筆蹟です。一寸変わった人らしく維新後、明治政府が不当な金を使っていると、その調査の為単身東京へ出向いたとかで有名になったそうです。老年加持祈祷を行い、今で云えば新興宗教の様なことを始め、御坊市の小松原附近に杉の大木で十二・三間も高い標柱を建て、その筋から撤去を命ぜられたが、附近の地主はどちらの方向にも倒すことを禁じられたので、人夫を傭って頂上から一間ずつに伐り落としたという昔話を、私の父からきいたことがあります。何れにしても一寸面白い人物だったらしい。

写真をよく見ると、

右ハほん川
左ハ大たき川　道

となっている。ただし道のすぐ下へ世光弘と続いている為、私は道世が姓で光弘が名と判断を誤ったのである。いま考えてみると世光は「せこ」と読み、名は「ひろし」と読むべきであった。「せこ」は世耕代議士の「せこ」と同様「迫」が本義で、つまり谷のせばまった地形から来た姓と推定される。

（昭和四十三年七月十五日夜）

俳人塩路沂風

「紀州新聞」昭和四十三年八月二・三・四日掲載

○

塩路沂風は江戸時代の中期、御坊が生んだ俳人で、高野山奥の院の参道脇に、芭蕉翁の有名な「父母のしきりに恋し雉子の声」を建立した。沂風は「きふう」と読む。不思議なことに、これだけの業績を残した沂風について、日高郡誌も貴志康親著「紀州郷土芸術家小伝」にもとりあげられていないのみならず、所謂郷土研究家の間でも、これまで話題にのぼったことはなかった。

塩路沂風の話を初めて山中不艸氏からきいた私は、もち前の詮索癖から俄に、沂風関係の文書を漁ってみた。以下、不艸氏が沂風建碑の由来を知った「芭蕉の風土」をはじめ、諸書の記載を抄録する。

○

「芭蕉の風土」岡田利兵衛著・昭和四十一年（一九六六年）四月十五日・白河書院刊。

「笈の小文」の旅で吉野を出た芭蕉は高野山に詣でた。此処は寛文六年（一六六六）芭蕉は蝉吟公の位牌（遺髪ともいう）

を納めるために上ったお山であるから、格別感慨も深かったことであろう。

「高野の奥にのぼれば、靈場盛んにして法の灯消ゆる時なく、坊舎地を占めて仏閣甍を並べ、一印頓成の春の花は、寂莫の霞の空に匂ひて覚え、猿の声、鳥の啼くにも腸を破るばかりにて御廟を心静かに拝み、骨堂のあたりに佇みて、つらつら思ふやうあり、此の処は多くの人の形見の集まれる所にして、わが先祖の鬢髪をはじめ、親しき懐かしき限りの白骨も、此の内にこそ思ひ籠めつれと、袂もせきあへず。そぞろにこぼるる涙をとどめかねて、

父母のしきりに恋し雉子の声

（枇杷園随筆）＝井上士朗編」

右の「親しき懐かしき限りの」には蝉吟公への追慕の念も含まれていると見ていいと思うが、ともかく此の文で高野山における芭蕉の感情は十分にあらわれている。また此処は参詣と観光ブームで群衆がのぼり、よく知られているから一切の説明を省略したい。しかし奥の院ま近の藤堂家の墓所と、参道左側の奥の院よりにある芭蕉の句碑は見残してはならない。

句碑は安永四年（一七七五年）に日高郡御坊邑の塩路沂風の建立で、表の「父母の句」は大雅堂（安永五年（一七七六歿））が雄渾の筆をふるっているので有名である＝下略＝

「芭蕉名碑」本山桂川著・昭和三十六年三月五日再版・弥生書刊

芭蕉は大和路の再遊で、葛城山・三輪・多武峯と歩き、龍門への道、臍峠（細峠）をも越えた。そしてそれから更に西して紀州路へと脚をのばした。

かって芭蕉は、二十三歳の時主君蝉吟の位牌を奉じて高野に登った。それから数えて二十二年を経た貞享四年（一六八七年）の春、四十四歳にして再び高野山に詣でたのである。芭蕉の感慨はすこぶる切なるものがあったにちがいない。

父母のしきりに恋し雉子の声　　はせを翁

この一句がそのときの懐吟であった。

この「雉子の声」句碑は安永四年（一七七五）芭蕉の没後八十二年目に、紀州日高郡御坊村塩路沂風によって、高野山奥ノ院の参道脇に建てられた。高さ九十六センチの苔むした自然石が、角石二段の台石の上にいまもそのまま建っている。句の文字は池大雅の筆。碑陰の銘は大島蓼太の撰並に書になる芭蕉句碑中の逸品である。碑陰「雉子塚之銘」もまた名文の名に恥じない。

ほろ〳〵と啼くは山田の雉子のこゑ父にやあらむ母にやとおもひしたへるいにしへの良辨のかのふるうたにかよふこころの十あまり七の文字を石にいまきざみて爰にたつか弓紀の高野なる法の月雪にさらしてすゑの世も朽ちぬためし

をこの国に此道したふ沂風人のまことを書ぞとむる
右東武雪中庵蓼太
安永四乙未十二月十二日

この碑の建立者沂風は、後に義仲寺無名庵六世となった俳人である。

「句碑をたずねて」山口誓子著・昭和四十年十一月一日・朝日新聞刊

―脇参道より参道に入ってしばらく進むと、左側に芭蕉の句碑が立っている。自然石。

父母のしきりにこひし雉子の声

「芳野紀行」の芭蕉は、吉野から高野に来て、この句を作った。山中に雉子の啼く声を聞いて亡き父を想い、母を想い、逢いたくてならなかった。―中略―

句碑の字は、大雅の書。石の全面にはびこび、その彫りは大きく浅い。私は大雅の書が好きである。殊に行書が好きである。私は大雅の「行書千字文」を座右に置き、こころ貧しきときはそれを見て、恍惚となるかたからず、やわらかからざるその行書に、

そんな私だから、大雅の書いた芭蕉のこの句碑を殊の外珍重するのだ。

建立は安永四年。

「写真・文学碑めぐり(東海道外)」本山桂川著・昭和四二年一〇月二〇日・芳賀書店刊。

これは内容が前記「芭蕉名碑」と全く同じ内容で、一字一句も違っていないから省略する。

○

以上いささか冗長の嫌いはあるが、私の目についた沂風に関する諸書の文章を引いてみた。さて、これらの記述から知られることは、

高野山奥の院参道の芭蕉の「父母の」句碑は、安永四年に御坊の俳人塩路沂風が建立した。塩路沂風は後に大津の義仲寺に入り、そこの無名庵第六世となった。

というのみで、その生年も没年すら明らかでないばかりでなく、塩路沂風を御坊の人とした根拠も示されていない。そこで六月九日、立里荒神社に参拝の途中、奥の院・弘法大師の廟に詣でたのを機会に句碑をたしかめた。

句碑は丈八七㌢・幅六十㌢程の自然石で、諸書に記されているとおり角石二段の台石の上にあり、台石の正面に

「宿坊」「金剛頂院」「南紀日高郡御坊邑」「塩路沂風」「建之」

と五行に割書きされていた。また別の面には、

「催主」「那賀郡粉河」「八塚既酔」「伊都郡妙寺」「田村東甫」

とこれも五行に刻まれてあった。これで塩路沂風が御坊の人であることは、はっきりしたが、その他については依然不明であった。私は以前「芭蕉名碑」の著者、本山桂川氏に直接照会の手紙を出し、二・三の人名辞典をも検したことがあるが、やはりはかばかしい結果を見ずに終わっている。高野山から帰ってからも、絶えず沂風のことが念頭からはなれなかった。

そんなある夜、私はふと「高野山金石図説」を調べてみてはと思いついた。

「高野山金石図説」というのは、大正十三年（一九二四年）一月十日吉川弘文館から発行され、著書水原尭栄師は数年前遷化されたが学徳の誉高く、高野山近代の名僧であった。何しろ此の本は刊行後数十年を経ているため、現代では容易に入手し難いが、私は芝口先生の遺族にお願いして譲り受けていた。「高野山金石図説」の記載も甚だ簡単であったが、そこに意外な発見があった。

○

と云うのは、同書「芭蕉の碑」写真版の裏に、塩路沂風に関する故芝口先生の細字の書入れがみつかったのである。晩年にいたるも研究心旺盛であった先生は、同書で沂風の記事を読まれるや、義仲寺宛てに問合せの書状を寄せられた。写真版裏面の書き入れは、義仲寺から故先生宛書簡の写しであり、周到な先生は義仲寺から寄せられた書簡も同じ頁に挿入されていた。

前略早速御尋ねの件御報告申上げます。沂風。紀州の人で真宗高田派の僧侶、名は淋澄（りんすい）・俳諧は蝶夢門。初め沂風のち得住・方広坊・爾時庵とも号した。性質恬淡で膝を入れる草庵を持たず、行脚を好み心のままに生活した。「朝に一鉢をささげて夕べに一衣をまとひてこごへず」と前書きした「一日づつ送るがうちに今朝の春」の詠に、その性質があらわれている。安永四年高野山に芭蕉の句碑を建てたことは御存知の通りです。同七年蝶夢の命により義仲寺に入り、第六世無名庵主となり蝶夢の事業を補佐した。天明三年（一七八三）丈草八十回忌、同四年芭蕉九十回忌を七日間修行し、寛政三年（一七九一）蝶夢の発案で、義仲寺内に粟津文庫を修築した。病弱であった彼は蝶夢の事業もほぼ緒についたので、翌四年の五月無名庵を退隠し滋賀村に移り、後京都に移住した。翌五年芭蕉の百回忌は重厚（無名庵七代）が主となって営み、沂風はその手助けをしている。

同七年蝶夢没し追福集「意祈能日可麗」には序文を認め追慕し、三回忌記念会を瓦全、大江丸と共に京都五升庵で修した。寛政十二年四月廿九日（一八〇〇）、京の高田馬場で没した。年四十九、この山内に葬られた。翌享和元年（一八〇一年）「爾時庵発句集」が刊行せられた。以上が大体の略歴です。小生沂風宛の書簡を多数所持しております。現在義仲寺は芭

蕉本廟義仲寺同人会が預かりしております。年々各種行事は当会が執行しており、昨年の芭蕉翁二百五十年祭には、全国俳人九〇〇名の献詠がありました。

今月二十一日義仲寺にて奉献会を執行致しますので、御来寺賜わらば幸甚かと存じます。以上甚だ簡単乍ら沂風法師の略歴御連絡申し上げます。今後共よろしく御風交の程御願い申上げます。

六月一日

大津市馬場北町義仲寺内

北川　靜峰

敬　具

芝口　常楠様

以上が「高野山金石図説」中の書き入れの全文であって、これにより塩路沂風の僧名・俳諧上の経歴・俳号から人となり略歴とその句集、没年等が判明し、沂風の研究上大きな手がかりを得た。私は将来機会を得て義仲寺の沂風資料や、彼の句集「爾時庵発句集」により、更にその生涯を究めたいと思うが、とりあえず明瞭になった事柄だけを記してみた。

なお此の書簡の日付六月一日は、郵便スタンプにより昭和三十九年（一九六四年）であることが知れた。即ち芝口常楠先生ご逝去の八ヵ月前にあたる。

○

六月十五日は土曜日であった。私は夜に入って俳人・塩路沂風の稿を起し、十六日午前零時すぎに脱稿した。午後になって御坊に出た私は、沂風のことを初めて私に告げた不艸居を訪ね、沂風を中心に話し合う中、山中氏は彼が爾時庵と号したことから、机辺の「俳諧大辞典」を取り出したところ、その爾時庵の項にかなり詳細な記述のあることを私に示した。さきの北川靜峰書簡の欠を補うて余りあるので次に追加して示す。

「俳諧大辞典」昭和三十二年（一九五七年）七月十日、明治書院刊。

沂風（きふう）俳人・塩路氏、名は淋澄・号は爾時庵・得住・方広・宝暦二年（一七五一）生、寛政十二年（一八〇〇年）四月三十日没、四十九歳。紀伊日高郡御坊の僧、蝶夢門。安永四年（一七七五年）十月十二日の蓼太の名を得て高野山奥の院道に「父母のしきりにこひし雉子の声　芭蕉」の碑を建立。同六年義仲寺無名庵（六世）に入る。天明六年（一七八六）祥然と九州に旅行、翌年「宰府日記」寛政初年（一七八九年）「祥然祥門句帳」を上梓、同二年（一七九〇）蝶夢の援助で粟津文庫建設。同四年、母看護のため滋賀村に退隠、後京の高田馬場で修行。同十年二月蝶夢追悼「萩のむしろ」半一・瓦全跋、板行。享和元年（一八〇一）遺吟百八十を収めた「爾時庵発句集」が版行された。立川政伸の跋文にその人となりがうかがわれる（西村）

これが其の全文である。記事中、沂風の没年を北川書簡が寛政十二年（一八〇〇年）四月二十九日とし、俳諧辞典は四月三十日としている外、大きな相違はない。没年の日について今のところ、私には何れが正確なのか判断する資料がない。

○

注　金剛頂院金剛三昧院大島　蓼太　江戸中期の俳人、信濃の人。吏登の門人、雪中庵第三世と称す。著「蓼太発句集」「筑波紀行」「付合小鏡」「発句小鑑」など。空摩居士と号す。白隠禅師に参じて悟道に入る。天明七年（一七八七年）九月七日没す。七十。

良弁のふる歌

ほろほろと啼くは山田の雉子の声　父にやあらむ母にやらむ

真宗高田派

真宗十派の一。本山は三重県河芸郡一身田町選集寺。

○俳人・塩路沂風御連載有難う存じます。一般の読者には興味のうすい記事で、御迷惑であったかとも思いますが、今まで知られていなかった郷土出身の俳人ですので、分かっただけを活字にしておきたかったのです。それにしても沂風の沂が特殊な文字であった為、とんだお手数をおかけして恐縮しています。小生目下、続日高郡誌の人物篇に取りかかり、昨夜まで三十二人を一応書き上げました。書きたい人を全部書き上げると、やはり五十数人になるかとも思います。大分資料を集めておいたのですが、さて書き始めると、また不明の点が出てきて、もたもたしたりです。大体明治、大正、昭和期を対象にしているのですが、明治以前でもこれまで日高郡誌にもれていた、例えば塩路沂風とか厭離行者とかは逸しられぬと存じます。

（昭和四十三年八月八日）

鳴鶏三話

「日高新報」昭和四十四年一月一日掲載

今年の干支が酉にあたるのに因んで、鶏の伝説をかいてはと進められた。日高地方で鶏にまつわる伝説として知られているのが二つある。その一つは有名な平安時代の陰陽博士、阿倍清明に関するもの。もう一つは中年の比丘尼の物語である。

昔、安倍晴明が日高川奥地にきて宿をとった。その時、清明がもっていた大金に目をつけた一人が、この金をとろうと考え、鶏のとまり木の竹に深夜湯を流しこんだ。鶏は止まり木がぬくもったので、夜が明けたと思い一声たかく時を告げ

た。男は「鶏が鳴いた。もう夜が明ける」と清明をだまして連れ出し、日高川に臨んだ高い崖から突然つき落とした。こうして奪いとった金を家で改めると、金とみえたのは、すべて木の葉であった。

次の比丘尼の話というのは、これも矢張り日高川奥地のことである。

熊野詣の中年の比丘尼が、日高川奥のある村の宿に泊まった。比丘尼は大金を懐にしていた。宿の主人は此の金に目がくらんで、夜中に鶏のとまった竹に湯を流し、むりに鶏を鳴かせ「もう夜明も近うなった」と、比丘尼を出発さした。そして仲間の者と途中で尼を殺し金を盗った。

というのが大体の筋書きである。この二つの話は森彦太郎先生の南紀土俗資料や南方熊楠全集第二巻「十二支考」および日高地方公民館連絡協議会編の紀伊日高民話伝説集にあるが、どちらも時を告げる鶏の鳴き声を悪用した点は同じであっても、めでたい正月には不向きであるし鶏も迷惑なことであろう。別の話をしよう。

○

昔、大和国に某という材木屋の番頭がいた。年の瀬もせまったある日、某は山奥の村へ材木の仕入れに出かけた。商談が思いの外手間どって、帰りは日はとっぷり暮れていた。某はすたすたと暗い山道をいそいだ。気がつくと何か後をつけてくる気配がした。ふり返ると狼が闇の中で眼を光らせていた。

某は青くなった。そのうち狼の数は一匹・二匹と段々おおくなってきた。もう生きた心地はなかった。やっと村里ちかい所へ辿りついた。そこは貯木場で材木が山のように積んであった。某は夢中で材木置場へかけつけると、ようやく身を入れるだけの隙間をさがしてもぐりこみ、木材を立てかけて狼の入れぬように蓋をした。

やがて狼の群が後を追うてきた。木材の囲みの中から人の臭をかぎつけると、置き場の周囲をぐるぐる廻り出したが、今度は鋭い牙でガリガリと材木を囓りはじめた。某はせまい木材の隙間で身を小さくし一心に念仏を唱え神仏に祈った。材木が囓られてしまえばおしまいである。どうか一刻も早く夜が明けますように、夜が明けたら狼も山へ引きあげるだろうし、村人も助けに来てくれるに違いないと、そればかりが頼みの綱であった。

何時の間にか寒い十二月の夜というのに、油汗がジットリと滲んできた。某はふと今朝家を出るとき、あわてて煙管と間違えて、扇を腰に差してきたことを思い出して、腰の扇をとり出しバタバタと煽いだ。その時であった。突然

コケコッコウ―

と鶏が高らかに時を告げた。バリバリと材木を囓る音がピタリとやんだ。鶏が鳴いたので狼は朝がきたと、山へ引きあげたのであった。

それにしても不思議なことであった。空にはまだ凍りついた月が冷たくかかり、夜の明けた景色はなかった。某も合点

がゆかず月の光で扇をひろげてみると、そこには鶏の絵が描かれていた。某が必死の願に神仏が哀れんで、扇の鶏が時を告げたのであった。

この話は今生きておれば百歳ぐらいになる私の祖母が、私の子供の頃よくきかしてくれた。同じ鶏の鳴き声をテーマにした伝説でも、この話の方がはるかに明るく新年にふさわしい。祖母がどこからこの話をきき伝えたのか、今となっては全く問う術のないのが惜しまれる。

「紀州新聞」昭和四十四年一月一日掲載

力石

○

たしか和歌山県文化財研究会御坊支部が発足した年であったと記憶する。一日支部の行事として有田郡広川町上中野に鎮座する、広八幡神社の建造物を見学したことがある。この神社はその創建時代を明らかにしないが、河内の誉田八幡から勧請したと云い、応永二十年(一四一三)から文化四年(一八〇七)にいたる二十八枚の棟札を蔵し、古くから南紀の大社として、厚い崇敬をあつめてきた。

この日は特に有田支部の有志が参加して、吉野朝時代(一三三四～一三九二)の建立と伝えられる社殿や、文明七年(一四七五)の墨書の遺る楼門の説明に当られたが、建造物を参観した後、私は一人で樹木の多い神苑を歩いた。そして図らずも昔なつかしい力石―担げ石ともいう―を見出して懐旧の情を新にしたことであった。

○

力石はつい最近まで、当時は今のようにラジオやテレビはなかったし、スポーツも普及していなかった。余暇として精力を持て余した村の青年達は、夕食の後や休日に力石を担いで、互いにその腕力を競いあったものである。今から考えるとまったく他愛もない遊びなのだが、そこに如何にも土臭い匂いが感じられる。現に私の村の土生八幡神四十三貫という大きな力石があって、村でもこれを担ぐ青年は二人か三人しかなかったが、今も遺っているだろうか。

さて私が広八幡神社でみた力石は、長さ六十㌢、幅五十㌢、厚さ二十五㌢で、土生八幡社のそれにくらべると、やや小ぶりで目方も軽かった。

しかし神社に奉納しただけあって、石には重量、奉納年月、その他を刻んであった。先ず石の中央に大きく奉納　福石の文字があった。福石は力石と同義の美称であろうと想像する。次いで右に少し下がって、

明治廿ヌ五年閏六月吉日
世話人　前田熊吉
□杜氏

とある。□は「がんだれ」に鳥(鳫)の字を配してある。おそらく今時こんな活字はあるまいと考えて□にしておいた。辞書をみると「雁」と同じらしいが、□杜氏は人の姓なのか熟語なのか私には分かりかねる。また左には

名嶋村
上田常松持也
弐拾壱歳

と三行に彫りつけ、さらに下部に

参拾八貫

と横に刻んであった。多分重量参拾八貫のこの力石を、名嶋村の上田常松と称する当時二十一歳の青年が担いで、評判を得たのであろう。実際そのころの村々には、きまって一人や二人は力自慢の男が居ったものであった。

○

ところで話はかわるが、川辺町大字松瀬の松井家といえば、先々代の松井藤之助氏が大正初年(一九一二年)、旧丹生村長を勤めた位いで、この地方切っての名門である。のみならず松井家は代々、偉丈夫型の人物がおおく、有名な張作霖の最高参謀の一人であった松井清助大佐や、豪快な取り口で相撲ファンの血を沸かした和歌島関がこの一門の出であることを、おぼえている人もまだ少なくあるまい。

血筋はあらそえぬもので、村長を勤めた藤之助氏も快力の持ち主であった。こんな話がある。

藤之助氏の壮年時代、米を積み出すのに松瀬から川船で対岸の玄子に運んだが、ある時下男と二人で積出中に、にわか雨になった。下男は一俵ずつ担いで渡し場へいそいだが、藤之助氏は一俵を肩に一俵を小脇に抱え、二俵ずつを小走りに運んだという。

もう一人同じ松瀬に豪力の持ち主がいた。年代を聞くことを忘れたが、藤之助氏よりやや古く、たぶん明治中期ごろの人と思われる。苧原平吉という男である。

平吉はある年、入山の農家へ日雇に出た。いく日か働いて給金をもらうことになった。雇い主は平吉に、

「時に平吉、給金は米か麦で勘定したい。米なら一俵、麦なら二俵とするが、どちらがよかろう」

と聞いた。貧しい平吉は質よりも量の多い麦をえらんだ。もち論リヤカーも大八車もない。平吉は給料がわりの麦を一俵ずつ前後におうこで担い、さらに途中で塩一俵を買い添えて野道をいそいだ。藤井まで来ると店さきに数人の青年がいて声をかけた。

「おい平吉」

「お前は力も強いが酒も強いときいている。どうじゃ一升枡の酒を一息に飲むなら、わしらがおごろう」

と持ちかけた。平吉はもとより酒は好物である。二つ返事で承知すると、ググッと咽喉を鳴らし、途中で思わず「ああ、うまい」と感嘆さえ洩らして飲み干した。「御馳走だった」と礼を述べて帰りかけると、

「平吉、一息で飲むといいながら、お前はアアうまいと息をついた。約束が違う」

と文句がついた。平吉はすましたもので

「そうか、一息入れたのが悪かったのか。もう一度やってみよう」

と云うと、今度は息もつかずに一升枡を空にして、

「えらい散財かけた」

と一礼の上、また麦二俵と塩一俵を前後に担い、すたすたと松瀬へ向かった。

なお平吉の子、佐太郎も親に劣らぬ強力で、米二俵を両脇にして歩いたという。

「紀州新聞」昭和四十四年一月二十一日掲載

子孫のために記録の保存が必要

祖先の歩みを残そう

御坊市史編纂事業が四十四年度から活溌な活動を進めるべく準備が進められると聞いてたいへん嬉しく思う一人だが、是非この事業を完成させるよう祈ってやまない。

御坊市がまだ市政をしていない御坊町時代、たしか島崎さんが町長の頃であったか、井上豊太郎さんから町誌をつく

れと町からいわれるのだが、ということを聞いた。その後同氏にその後のなり行きを問うと、「君、町誌なんてものは、そうやすやすとできるものではないよ」と酒杯をかたむけながら語られていたが、一向に完成されたと聞かない。

また、芝口常楠先生というすぐれた郷土史家が居られて、ちょい〳〵お訪ねして有益なお話をうかがっかりもしたが、この先生も故人となってしまわれた。近郊には和田喜久男さんが居られ、田端憲之助という斯道に造詣の深い方も、その他かっての森彦太郎先生などと共に日高郡誌を編纂された得難い郷土の宝ともいうべき方々が現存されていた時代であるのにこの事業は遅々として進展を見せなかった。

戦後間もない混乱期であったことや、つづいて大洪水に見舞われたことや、何やかや、時代が時代であっただけにやむを得ない事情もあったことと思うが、（一九五四年）未完成のまゝ、今日を迎えることは残念でならない。

そのなかにあって昭和二十九年から足かけ六年にわたって、昭和三十五年二月一日、清水長一郎先生が、矢田村誌を編纂出版された。そのあとがきに

「矢田村にはじめて村誌がつくられたのは、明治十三・四（一八八〇・八一年）年のことである。この時は明治政府の方針であったのであろう。……その後明治四十二（一九〇九年）年、県は県誌編纂のため、先ず郡市町村誌をつくり、これにより県誌を作成すべく、同年九月郷土誌編纂要項を定め、各市町村に示した。しかし郷土誌の編纂は役人が机上で考えるように、一片の指令でだけで出来る程やさしいものではない。中には註文通り郷土誌をつくった所もあるが、たいていの町村はものにならず……云々」

といって居られる。事実、芝口先生ところで見せていただいた日高郡各町村誌のうつしは、わずかに六、七ヵ村程度であったかに記憶する。そのなかを清水先生のような篤学の士があってはじめて村誌を発刊し得たことは大書激賛に価するものだ。

昨日の本紙には九年間の努力を結実して見事な寒川村誌が完成したと報ぜられた。寒川道典委員長、林貞助委員、大沢浅男氏の助力まことにその人を得たという感がする。こういう仕事は本当に縁の下の力もちになる心がまえ、それよりも宗教心に似た心がまえがなくてはならない。

昔から、平安仏教に「記家成仏」（？？）という思想がある。主に寺院だが日々の歴史を克明に記すことが仏の道に通じるといういうのだ。このことは元亀年間（一五七〇―七三年）織田信長によって全山廃絶の叡山の中にあっても続けられた。これが二百五十一世代にわたる天台座手記となって今もなお続行されている。日高の町村の中には町村合併前の村長の名すら記録を残さないところもあるやにきく。

「温故知新」祖先の歩んだ道をふり返ることによって今後の進展を図るならば、是非しっかりした記録の保存が必要かと思う。それには職掌変転のはげしい役人では駄目だ。好きこそものゝ……こうした人を得ることた。日高平野の中心

御坊の市誌の完成を願ってやまない。

寒川村誌について

「紀州新聞」昭和四十四年二月二日掲載

十日ばかり前、大谷書店の前で突然、林貞助翁に声をかけられた。長い間、編集に専念していた「寒川村誌」ができ上がったという事であった。それから数日して、あいにく私は不在であったが、同誌の編集委員長寒川道典氏がわざわざ、拙宅まで見えられ、まだインクの香も新しい村誌の御恵投に預かった。

寒川道典氏の同誌の後記によると、寒川村誌の公刊を考らえて、ぼつぼつ資料の蒐集に着手されたのは、昭和十年頃（一九三五年）ごろで、正式に編集委員会が発足したのは昭和三十五年六月一日であったというから、随分ながい間苦労された訳である。一口に村誌とか町誌とかいうが、さて取りかかってみると実に面倒な根気のいる仕事である。ことに専門家がその仕事に専念するのと異なり、いわばアマチュア研究家が事余の間に成そうというのであるから、並大抵の苦労でない。幸いにして旧寒川村には林貞助翁の如き、無類の博覧強記の適任者がおられ、校訂には大沢浅男氏という教養深き士が居られた。また出版費その他経済的な面には、同地切っての素封家で、村民の信望厚い寒川道典氏が当たられるというように、適材が適所にあって、努力を続けられたのであった。寒川村誌が名実ともに見事に刊行されたのも故なきに非ずである。

○

寒川村誌の概略については、すでに本紙一月十八日附けで報じられているが、A五判・クロース厚表紙・五百十六頁に及び、まことに堂々たるもので、手にするとずしりと快よい重みが感じられ、関係者各位の今日の大きなよろこびが、ひたひたと伝わってくるようである。

さて私は矢田村誌・上南部村誌とつづいて、郡市内で三番目に公刊された此の村誌を、しみじみと手にとりながら、私の悪い癖なのだが、先ず面白そうな所から目をとおしているので、その中の一・三を拾ってみる。

「大殿様と寒川」寛政五年（一七九三）、俗に大殿様とよばれた紀伊藩主第八代徳川重倫公が、地方巡察の途中寒川にきて、寒川家に一泊された。これは大変なできごとで、寒川邸の周囲を竹矢来で囲むやら、村中総出で道路修理に当たったが、大殿様は翌日駕籠で寒川辻を越えて有田郡清水荘へ向かった。大殿様が龍神から梅津呂越しに寒川に来る途中休憩した所を、今も「殿休場」というとある。

「祭典及び神賑行事」寒川神社の獅子舞は、昭和四十年四月十四日、本県文化財の指定を受けた位で、まことに優美典雅なものであるが、本誌ではその他の祭礼行事とともに詳記されている。ことに特殊神事として二月十七日（旧正月十五日）

粥占いの行事のあることや、お弓祭(旧正月九日)が行われていることを、本誌によって初めて知ったのは有りがたいことである。

こんな風に書きならべると切りがないが、わけても参考になったのは、産業編中の林業の項で、ここには林業作業の用具や原木の川出しの模様が、挿絵を加えて詳説している。これまで日高地方で木材の川輸送については、続日高郡誌編集委員の谷口恒一・尾浦浩巳・清水静志の三氏によって、かなり行届いた調査記録が行われているものの、これはまだ公刊には至っていない。木材の川輸送についての記録公刊は、恐らく本誌が最初のものであろう。甚だ貴重な資料と敬服した。

次に比較的新しいものであるが、「百万遍念仏記録帳」の抜粋も、興味ふかい庶民資料と云えよう。即ち同地下西野川念仏講に伝わる記録帳で、それにわ天保六年(一八三五)から昭和二十七年(一九五二年)に至る間の、村内の大きなできごとや諸物価・災害が記されている。中でも椎茸の価格が毎年記されているのは、いかにも山村らしい趣がある。

○

以上、思いつくままに寒川村誌の内容の一部を紹介してみた。妄言をおわびして。ペンをおく。

「紀州新聞」昭和四四年五月五日掲載

美浜町入山の三宝寺で
湯川直光の墓発見

本誌の依嘱で郡市内の碑(いしぶみ)巡礼を続けている、川辺町小熊清水長一郎氏はこのほど、美浜町入山三宝寺墓地で、湯川城主、第十一代の猛将として知られた、直光の墓碑を発見、郷土史研究の上に貴重な資料を提供した。

先月末、同氏は三宝寺の墓地を訪ねたところ、古い宝篋印塔の残欠に文字らしきものが刻まれていることに気づき、苔を落とすと「永禄五年(一五六二年)」「五月廿日」「祥岩宗吉大禅定円」の文字が現れた。詳岩宗吉は第十一代湯川城主、湯川直光の法名。永禄五年五月は直光が河内の教興寺で四国の三好勢と戦って戦死した日である。直光の墓でこれまで知られているのに、昭和十五年(一九四〇年)和田喜久男氏発見の、御坊市湯川町小松原法林寺の宝篋印塔があるが、それには「永禄五年壬戌」「五月廿日」「源祥岩宗吉大禅定門神儀」とある。三宝寺は承応年間(一六五二～五五年)、湯川の血族裕賢が継いで今日に至っている。従ってこの宝篋印塔も徳川初期に菩提追善のため、造立したものとみられているが、この塔の存在が現代まで世に知られていなかったのは、不思議だ—と清水氏は語っており、二つの直光の墓をめぐる史実の研究の上にこの新発見は、郷土史研究家達に

新たな話題を提供している、

法灯国師の自賛画像

最晩年の書　妙光寺蔵と瓜二つ

「紀州新聞」昭和四十四年十月三日掲載

由良町畑、念仏寺（正しくは正善寺）で発見された自賛法灯国師画像を詳さに調査した郷土研究家、川辺町小熊清水長一郎氏はその結果について次のような一文を寄せてくれた。

〈念仏寺の自賛法灯国師画像〉

本紙既報のとおり由良町畑の念仏寺―日高郡誌もこの寺の名を念仏寺としているが、正善寺が正しいようである―において今回発見された絹本墨画法灯国師覚心像は、いま郡市民の間で話題になっているが、実は私もこれについては画像を拝み、調査を重ねた上で卑見を述べてみたいと考えていた。ところがそれよりも先に私の短い談話が新聞に出たりした。速報が生命である新聞としては無理のないことであるが、話は何しろ走っている車の中であったり、事務所の騒音の中であったりしたため、多少聞き誤りがあるようなので、いささかその欠を補いたい。

すでに報じられていたように、この画像は縦七〇チセン・幅二四チセンの軸仕立で、絹地に国師が曲彔（きょくろく）に坐し、払子（ほっす）を把り、説法の姿を写し、図絵の上部に

心即是仏
仏即是心
心仏如如
亙古亙今

の偈文と

永仁六年（一二九八年）九月二十日
鷲峯開山
覚心書　印

の墨書がある。

さてこの「心即是仏」の偈文であるが、これは国師が入宋して建長六年(一二五四)四十七才の時、仏眼禅師(無門和尚)に初相見の際、仏眼から附与されたものという。また国師筆の賛は興国寺旧蔵の正応六年七月十七日(一二九三)年記のものや、京都宇多野の妙光寺蔵の墨画にもみられる。十月二日附本紙記事中の「京都美術館の永仁六年六月七日のもの……」とあるのは、「京都妙光寺蔵の……」の誤りである。

ところで妙光寺というのは弘安八年(一二八五)藤原師継がその長子忠季の早世を痛んで、別業を寺院とし妙光寺と名づけ、国師を開基としたと伝えるから、国師とは極めて因縁がふかく、ここに国師の自賛画が遺されているのは不思議ではない。その上この画像は「白描に近い線描本位で、わがくに禅林初期水墨画のうちでも、もっとも早い秀れたものの一つ。—中略—威儀端然、教団の頭首としての気魄に充ちている寿像である。とくに顔や肉身・手・爪が鋭く生きいきしている。法灯派教団の中心となるべき秘宝」と専門家は絶讃しているのである。

いま念仏寺発見の国師絵像を妙光寺蔵のそれとくらべると、図絵も賛も殆んど異なるところなく、妙光寺蔵が縦七四・四㌢、幅三四・八㌢とやや大幅である。その上、自賛の月日も同じ永仁六年で一は七月十五日であり、一つは九月二十日と、その間に約七十日の相違があるに過ぎぬ。国師の示寂は同年十月十三日であるから、まさにその死にさきだつ二十日余に当たり、最晩年の書というべきである。

またこの画幅の裏面には

授与　畑上六斎講
明治三十一年(一八九八年)戊七月
畑上六斎中

その他の文字があって、この画像が興国寺伝来のもので、明治三十一年七月に同寺から畑上六斎講中におくられたことが知られ、その出所はたしかである。しかし講中の人々の話によると、何分にも無住の荒廃した念仏寺に、明治三十一年以来昼夜の別なく掛けておいたということで、保存は悪く早急に補修の必要がある。

以上、先日来の新聞記事を補足するためあわててペンを取った。機会を得てその不備を訂したい。

昭和四十四年十一月二十日

「紀州新聞」昭和四十四年十一月二十日掲載

○法灯国師自画自賛像の発見に関連して、その時分でも絹に絵を描いていたかなど話題になり、その時は永仁ごろはどんどん描かれていたとお答えしたものの、絹本はどこまで遡り得るのか確かめてみたいと思いながら、不勉強でそのままになっていました。今夕寸暇を得たので美術全集などを見たところ、西暦九〇〇年前後の作と伝えられる、両界

曼荼羅（京都教王護国寺蔵・国宝）が、私の知り得た範囲では最古の物とわかりました。もっと調べるとこれより古いものがあるかも知れません。

法灯国師の自画像掛軸
奎（けい）文えどる

「紀州新聞」昭和四十五年四月二十二日掲載

由良町畑、念仏寺で昨年発見された法灯国師自筆とみられる自賛画像掛軸調査が、二十日午後一時から県文化財保護審議委員会の和高委員、県文化財課梅村文化財保護主事により行われた。同掛軸は既に郷土史家清水長一郎氏が種々の資料から法灯国師自筆のものに間違いなく、国宝的価値という結論を出しているが、この調査で新しく発見されたのは、図絵の上部にある墨書の偈文が薄くなったためか、後に誰かが墨でえどった跡が認められたことで、調査に立会った町教委関係者も実に残念と文化財指定を危ぶんでいる。なお調査資料は一旦関係者が持ち帰り、更に文献等を使って調べることになり、今月中に文化財保護審議会を開き指定を検討することになる。

法灯国師の直筆か
正善寺で和高氏等鑑定

「産経新聞」昭和四十五年四月二十三日掲載

日高郡由良町門前、法灯派本山の興国寺を開いた法灯国師の自筆とみられる掛け軸が、同町畑の正善寺でみつかり、このほど、県文化財専門審議委員和高伸二副委員長▽県社教文化財係、梅村善行主事▽県文化財研究会の小山豊理事らが予備鑑定を行った。

同町教育委員会事務局の後藤重承主事が、町内の文化財資料を調べていたさい、その昔、興国寺の末寺だった正善寺＝無住＝の仏壇わきからみつかったもの。タテ八五㌢、ヨコ三五㌢の掛け軸で、「心即是仏　仏即是心　心即如如　亘古亘今」「永仁六年九月二十日　鷲峯開山覚心書」と書かれ、画像と印もある。

近く鑑定結果がでるが、永仁六年（一二九八年）は、国師のなくなった年で、十月十三日が命日にあたるので、この掛け軸を書いたとすれば絶筆になるものとみられる。

和高氏は「法灯国師の関係資料として価値がじゅうぶんある。画像は版画とみられ、この種のものがかなりつくられたようなので、当時のことを知るためにも、資料集めが必要だ」と話している。

新春随筆

かねは天下のまわりもの

「日高新報」昭和四十五年一月一日掲載

「金まわりがよい」とか「金まわりがよくない」とか、日常よく使われる言葉であり、「金は天下のまわりもの」という諺もある。

このように金というものは、とかく社会を流動して、久しく一ところに留まらぬ性質をもっているようである。されば、

これ小判たった一晩いてくれろ

と、江戸の川柳子は溜息をもらしたのであった。

ところで金と鐘では、読みは同じ「かね」であっても、その形状も用途もまったく異なるが、おもしろいことに流動性に富んでいる点は、実によく似かよっているのである。

一例をあげると有名な道成寺の鐘は、天正十三年(一五八五年)豊臣秀吉の紀州南征軍が、裏山から掘り出して、陣鉦がわりに使ったが、その後諸所を転々したあげく、天正十六年京都寺町二条上ル本門法華宗本山妙満寺に移り、今も同寺に伝えられていると聞いている。

また、川辺町大字土生に鎮座する土生八幡神社の鐘も、明治初年(一八六八年)の神仏分離の際に不用となり、後、同町和佐の光源寺に金三百三十円で買いとられ、現代も同寺に納まっているし、同町大字平川雄山権現社の別当寺にあたる高山寺の鐘も、明治末年の神社合祀の際、海草郡内の某寺に売られ現存するというが、これはまだ確認していない。

さて話は、いろいろになるが、いま日高高等学校のグランドになっている辺りに、島村の氏神である春日神社が鎮座していた。

この春日神社は、明治末年か大正初年に、神社合祀によって、小竹八幡神社に遷祀されたが、今も高校通りを別に春日通りといい、島の会場を春日会場とよぶのは、いずれも旧春日神社のゆかりによって、つけられた名称であることは、説明を加えるまでもない。

それはともかく、この春日神社の鰐口が流転して、今では島とはまるで縁のとおい、印南町大字西神野川の薬師堂の表にかけられているのである。

西神野川というのは、もとの真妻村の一大字で、切目川の中流をさらに枝谷に入った戸数三十戸ばかりの山村である。

薬師堂の由緒は明らかでないが、紀伊続風土記には、

○薬師堂、入口境内周三十間。村の入口にあり、と記されている。

私に春日神社の鰐口が、西神野川の薬師堂に遺っていると話されたのは、たしか本誌とも馴染みの深かった故芝口常楠先生であった。

以来、もう十年ほどになるが、昨年の十一月ようやく自分の目でたしかめ、拓本にもとることができた。鰐口は青銅製で、大きさは直径二十㌢あり、次の文字が刻まれていた。

春日大明神社
村中奉加施主多人
日高郡嶌　木下
元禄十七年（一七〇四年）
申三月吉日

即ち、今から二百六十余年前の元禄十七年三月に、嶌村の名門木下氏の発起によって、多くの人々の浄財をあつめ、この鰐口を鋳造のうえ、村の氏神春日神社の宝前に寄進したことが窺われるのである。

ところが、その後星うつり人かわり、明治・大正の代におよんで神社合祀のことかあり、自然、神前の鰐口も無用のものとなって、なにがしの値段で西神野川の薬師堂へ譲渡したものであろうと思われる。

それにしても日高川筋のものが切目川筋にうつり、しかも神社のものが仏堂にかけられることなど、考えてみると興味尽きぬ思いがする。

まさに「かねは天下のまわりもの」である。

註　逸見萬壽丸源清重が正平14年（1359年）道成寺に寄進した二代目釣鐘は、天正十三年（一五八五年）豊臣秀吉の紀州征伐の折大将仙石権兵衛に没収され、天正十六年妙満寺に奉納され、以後京都妙満寺に安置されていたが、元治元年（一八六四年）に兵火で焼失し、その後鋳造したものである。

新春随想

こ　ま　犬

「紀州新聞」昭和四十五年一月一日掲載

今年の干支、庚戌から狛犬を思い出した。狛犬は日本中のどこの神社にも置かれているので、昔から私たちには、きわ

めて親しみの深い美術品である。

いつであったか私は本紙の碑巡礼で、狛犬の起源を略述したことがあるが、話の順序としてもう一度、その由来を景山春樹著「神道の美術」によって、要点のみをくりかえしてみると、

獅子や狛犬は古典神話の海幸彦の子が、代々皇宮の御門の辺りを狗吠(いぬぼえ)した故事にかたどったものとか、神功皇后の朝鮮出兵の際、高麗の犬が戦いの手先をつとめたことにはじまるというが、何れも付会の説である。もっとも歴史的に信頼できるのは、もともと大陸の宮殿内の凡帳の鎮子に用いられたものが最初で、中国ではこれが後に帝陵などの石獅子の彫刻となり、日本に入って唐獅子とよばれ、朝鮮半島の文化を伴ってきたので、高麗犬ともよばれるに至った。したがって獅子といい狛といっても、動物学的には左程の区別があったとは思えない。藤原時代ごろから宮廷風俗が盛んに、神社の宗教的儀式の中に取入れられはじめた時、凡帳の鎮子が神殿の外郭部におかれ、神殿の守護と荘厳のために、造られるに至ったと考えられる。

とある。

ところで、このような起源をもつ狛犬も、はっきり造立年月のわかっている古いものは、全国的にみてもその数は意外に少なく、殊に和歌山県では今のところ、伊都郡九度山町大字河根の河根丹生神社のそれ位ではないかと思われる。この狛犬は紀ノ川流域で出る片岩系の、黒味勝ちの濃い緑色の石に、台座ともに一石に丸彫りにし、阿像・吽像いずれも二二・五㌢と小形なものである。

昭和三十八年(一九六三年)二月一日、和歌山県教育委員会の編集発行した「和歌山県の文化財」には、この狛犬の説明と写真が掲載されているが、阿・吽の両像ともに丸まっちく、甚だユーモラスな姿をしており、みていると思わずおかしさがこみあげてくる。またこの阿像の台石の上面の両側に

金

応永二十六年(一四一九年)十一月十三日

金

大九三文四ろ

と陰刻銘があって、五五〇年前の作であることが知られるのである。また外の金の意味は不明であるが、大九は多分「大工」の宛字ではないかと考えられる。

この外にも同書には、伊都郡かつらぎ町字上天野丹生津比売神社の二対の木像狛犬も収録されており、高さはいずれも八五㌢以上で堂々たる作品であるが、ともに紀年銘を欠いている。しかしその作風からみて、鎌倉時代を下るものではあ

るまいとしているから、県下に現存する狛犬では、最古のものといえよう。

さて、話が思わず遠い伊都郡の狛犬に終始したが、それというのも残念なことには、現代までのところ、日高地方かいわいでは、あまり古い紀年銘をもつ狛犬や、すぐれた作品が知られていないのである。ただ時代はずっと新しいが、すこし趣のかわった注目すべきものとしては、隣郡広川町に鎮座する広八幡神社所蔵の、南紀男山焼の狛犬一対をあげる事ができる。

男山焼はいうまでもなく八幡神社にちかい広川町上中野字尾山で、江戸時代の末期の文政十年(一八二七)から、明治十一年まで五十一年間にわたり、紀州藩の手厚い保護のもとに、雑器をはじめ、置物・文房具・茶器類など幅ひろく制作したのであって、広八幡神社の狛犬も、恐らくこの時期に窯元から地元の八幡神社の神前に奉納したものであろう。

この狛犬は現代、八幡神社の神官佐々木氏の氏邸の床の間に置かれているが、阿・吽の両像ともに、高さ八〇㌢。緑を主にして黄釉を配し、体躯は雄偉にして力勁く、威風あたりを払う趣あり、然も落ちついた光沢が美しく感じられる。今も各地に残る男山の遺品中でも、量感といい技法といい最高傑作の一つと考えてよい。作者は男山第一の名工とうたわれた光川亭仙馬で、その右脚部に彫銘があるときいたが、何しろ相当重量のある、しかも損じやすい陶器のこととて、持ち出して確認することはためらわれた。何にしてもこの広八幡神社の狛犬は、日高地方のちかくに現存する狛犬中の、最も異色に富む名品として戌年の初頭にあたり、語るにふさわしいものである。またこの作者の光川亭仙馬が、一般に日高の生まれといわれていることも、何か一層興味をそそるものがある。

「紀州新聞」昭和四十五年一月二十二日掲載

だいだい

新しい年を迎えて、ひと昔前の正月の飾りに使った橙を思い出した。橙は「だいだい」とよむ。広辞苑の「だいだい」の項を見ると、

橙・回青橙・臭橙・ヘンルーダ科の常緑喬木、幹は高さ三㍍ばかりで、葉は互生し卵形、透明な小油点を有し、葉柄に翼を持つ。初夏の頃、葉のつけ根に白色五弁の小花をつける。漿果(しょうか)は冬熟して菫色になるが、翌年にはまた緑色にもどる。暖地に栽培、食用・苦味健胃薬。また正月の飾りにも使用。などと説明している。

橙の文字は、むろん当用漢字にはない。いまどきの大学生では、この文字を「だいだい」と正しく読める人は、そう沢山あるまい。そればかりではなく若い人の間には、実物の橙の実や木を知る者も、ほとんど居らぬのではないかという気がする。亡びゆく植物などといえば、少し大げさな形容になるが、事実「橙」の木は、昭和初年ごろから急速に、私たち

の周辺から姿を消しはじめ、現代ではもう余程の山村へでも出かけぬ限り、めったと見られない。
橙のことを私たちが子供のころは「かぶち」とよんだ。私の居村、川辺町矢田地区には、いまも「かぶち田」という小字名が遺っている。恐らく橙の古木があったから生まれた地名であろうが、そんな訳で「かぶち」は橙の別名であろうと、辞典で調べたが一向に見つからぬ。試みに方言辞典をさがしたところ、
「かぶち」は橙の方言で、三重県志摩郡や和歌山県で使用される。
旨の記載があった。国語辞典には見えぬ筈である。
ところで、私どもが子供の時分は、広辞苑の説くように、正月の「しめ縄」には、きまって赤く色づいた橙を飾りつけたものであった。「だいだい」と「代々」の語呂がまったく同じであるところから、新しい歳の初めにあたって、代々の子孫が永く繁昌するようにと、日本人らしく縁起をかついで寿いだのであった。
話はかわるが橙には、もう一つもっと実用的な用途として、その豊富な果汁による橙酢のあったことも忘れがたい。橙は臭橙の別名がある程で、その果汁にはさわやかな芳香と甘い酸味があって、それがひなびた田舎料理の大根膾(なます)に、ぴったりと調和した。その頃の農山村の食生活は、今から考えると極めて質素であった。四季折々の休日には、里芋を入れた五目飯や大根膾(なます)、それに鰯やさんまの酢?が、精一杯の御馳走であったが、それらはすべて橙酢で味をつけてあった。もっと高級な料理では白魚にも橙酢がよくふさうというが、それはとうてい農山村人の口に入る食物ではなかった。
「橙を一つもらって来て」
私の家の裏手に、橙の老木が一本あった。それは近所の寺のものであったが、まだ若かった母は大根膾をとんとんと刻みながら、よく私にいいつけた。幼い私はそう云われるといきおいこんで裏の畠まで一散に走り、竹竿で橙の実をたたき落としたものであった。今のように人工調味料が豊富に出回らなかった当時は橙酢も大切な調味料であり、橙はいわば生活必需植物の一つであった。農山村のどこの家庭でも、畑の隅や門はなに一・二本は必ず植えていたのも、そんな必要からであった。
しかし世の中はかわった。化学調味料が洪水のように氾濫しては、橙酢などはもはや時代おくれになった。橙の木は邪魔物でしかない。いつの間にやら一本伐られ二本伐られ、すっかり姿を消した。国をあげての工業化によって日本中の河川が汚染し、早春の風物詩であった白魚が、有田の広川や由良町の川口でも、年々、少なくなりつつあるのと同じように、橙の木も今に、幻の植物になるのではないかと気になる。
社会生活の変遷で、正月飾りに橙を用いる風習がすたれても、人工調味料の普及で、橙酢が無用の長物と笑われても、やはりどこかとぼけた味のある橙の実や、橙の木がなつかしい。家々にとまでは無論のぞむつもりはないが、部落に一・二本はこの木をのこしておきたい。文化社会とは、本来そのような無能無用のしろものも、あたたかく包容してそれぞれ

に、場所を得さしめるところにあるのではないかと思うのだが、どうであろうか。

桃の花

「紀州新聞」昭和四十五年四月二十二日掲載

日高地方の雛節句に当たる四月三日も、裏節句の四日の日も、今年はあいにく雨だった。

三日の朝、雨の小やみを見て例年の通り、桃の花をさがしに出かけた。そこは私の家からいくらもない、日高川の堤であった。桃の木は今ではもう誰のものとも分からないし、普段は近所の者も一向にかまってやらないのだが、これは人間とちがって不平一ついうではなく、季節ごとに花を咲かせるのである。

思いおこすとこの桃の木は、私の少年時代から既に植えられていたような気がする。そのころの花時には堤に腰をおろして、子供は子供なりに、花の美しさに感じ入ったものであった。しかし昭和二十八年（一九五三年）の水害後の堤防の嵩置工事以後は、附近の様子がかわって、容易に近づきにくくなった。

桃李もの云わざれども下自ら径をなす……の言葉もあるのに、これはまた何たることか……。

私は大きなゴム長靴をはいて、身の丈ほども伸びた笹の繁みを踏み分け踏み分け、ぶつくさいいながら、桃の木に近づいた。

桃の花は満開であった。年によると雛祭りには、もうすっかり落花しているのだが、今年はいつもより春がおそかったため、ちょうど花盛りであった。鋏を片手にふり仰いだどの枝にも、花はすきまもなく咲き競うていた。そして花も枝も夜来の小雨でしっとりと濡れ、一層の風情をそえているのであった。

ものの本によると、桃はもともと中国の原産で、わが国では早く古事記に桃が現われているし、万葉集にもこの花が詠まれている程で、非常に古く渡来したらしいとある。

それはともかく、どういう訳か私は桃の花を見ると、きまって一昔前の村の娘たちの姿を連想する。どこか生い生いしく素朴で、可憐な点が共通しているせいかも知れぬ。数多い花の中には、美しくあるが、ツンととりすましたものもみかけるが、旧式な頭の私はそうした花は好きではない。花でも女性でも美しさと共に、自らなるやさしさしおらしさがあってこそと考えるのである。

笹を踏みしだき茨をわけて、二、三本の桃を手にした私は、昨夜急に取り出した御坊天神と、鯛抱人形ばかりの雛壇の前に、銚子にさして供えた。欲を云えばこの枝に雛菓子を吊したかったのだが、俄のこととて間に合わなかった。さて正直な話こうしてみると桃の花は、美しく可憐であるが、どこかに田舎びた匂を感じさせる。これは御坊天神や鯛抱人形も

同じことで、近年郷土玩具として好事家の間で珍重されているものの、やはりそのどこかに農村できらしい泥臭さのあることは否むべきもない。勿論そこにこそ御坊人形独特の持ち味のあることは断るまでもないが。

話は妙にややこしくなった。私はただ土臭い御坊人形には、ひなびた感じの桃の花が、まったくよく似合うと云いたかったのである。

戦後は雛人形も年と共に豪華になって、土や紙でつくった天神様などはめったに飾っていない。すべて硝子ケース入りの高価な人形ばかりとなった。雛祭りとは元来そうした贅沢なものではなかった筈なのだが、流行というものは致方もない。いくら私などが愚痴をこぼしたところで、どうにもなるものではないが、硝子ケース入りの人形に桃を飾ったのでは、何かそぐわない気がする。

ところで今年は飾りそびれたが、雛祭りになると、きまって取り出す、貧しい私には自慢の軸がある。それは幕末、紀藩の画家として高名をうたわれた野際白雪の、紙雛の半切りである。

野際白雪は名を徴と云う。安永二年(一七七三)若山で生まれ、長じて表具を家業とした。そのため壮年の頃から古画名蹟に接することが多く、機会あるごとにこれを臨模した。後に野呂介石に師事して山水画を嗜なみ、ついに師の塁を摩するに至った。その後しばしば藩君の命を受けて大作を描いたが、その技の非凡なるにより、藩侯の画員に加えられた。嘉永二年九月(一八四九)七十七才で病没した。

以上がざっとした白雪の生涯なのだが、私の所蔵する白雪の小品には、淡彩で二個の紙雛が描かれ、それに紀藩の国学者として知られた本居大平が

かみひなを神とまつりて草の餅
桃の花酒今日ぞそなふる

の一首を讃しているのである。大小二体の紙雛は素朴可憐、実に愛すべきであるが、それと同時に大平の一首によって、雛祭りの古い形は、御坊人形よりももっと質素な紙雛を飾ったこと、また桃の花を供える風習は江戸時代にすでに、はじまっていたことか知られて、興味ふかいものがある。

「紀州新聞」昭和四十五年五月二十二日掲載

湯川神社の楠

例年であると今ごろは、さわやかな五月晴れの日が続くのだが、あいにくなことに今年は春先から雨が多く、五月に入ってからも初めのうちは、からっと晴れた日は、ほんの数える程しかなかった。しかしそれだけに、たまさかの晴天の日

のすがすがしさは格別で、雨に洗われた後の若葉の緑は、目にしむばかりの鮮やかさであった。

ところで人には夫々の好みがあるため、一概には云いにくいが、ひょっとするとわが国の四季の中で、五月、六月がもっとも自然の美しい季節ではないかと考えるのである。少なくとも私は百花の咲き乱れる春よりも、新緑の五月に、一層の美しさをおぼえるのである。

五月初旬のある晴れた一日、私はにわかに思いたって、湯川町小松原に鎮座する湯川神社を訪ねた。周知の通り当社は子安神社とも称し、安産の神として近在の人々の信仰を集めているが、実はこの神社の境内に、郡市内第一といわれる樟の大木がある。その新緑をみたかったのである。

日高郡誌によればこの社地は、もと亀山城主湯川氏の舘のあった所で、湯川氏の盛時その一部に神明の小祀を奉祀していたが、天正のころ湯川直春はその女の安産を浅間神社に祈願し、分霊を亀山城中に祀った。その後これを城中から邸内の神明社に合祀したが、天正十三年(一五八五)紀州兵乱で全焼、乱の後に再興した。明治四十二年(一九〇九年)九月村内の各神社を合祀して、同年十月より子安神社を湯川神社と改め、今日に至る—とある。

社地はあまり広くはないが、町外れに位置しているので車の往来もなく、時折ちかくの湯川中学校や御坊商工高校の方から生徒達のざわめきが潮騒のようにきこえてくるのみで、ひっそりとしていた。

鳥居をくぐると其処は芝生の広場で、数本の樟の若樹が並んでいて、そのすぐ北に湯川氏時代の遺構であろうか、濠が東西にめぐらされ、濠にはこの地方では数少ない花崗岩の見事な切石を組んだ見事な橋が架かっている。濠はよどんだ水を湛えて社地の東で、かなり広くなっているが、先年この泥中から古い土器が出たことがある。石橋を渡って十歩ばかりで一段高く、そこに数十株の雑木の若葉におおわれた社殿がある。

御坊市の指定文化財の樟は、この社殿のやや西南よりの林中にあるのだが、市教育委員会がたてた標柱には

記念物　湯川神社の樟

高さ　一五米

樹周　八米

くすの木はアジア暖地の特産で、

樹令は永く大木となる。

この木は郡市内では最も大きく、

樹令、一千年と推定される。

御坊市教育委員会

と記してあるのが読まれた。

ところで、ひとくちに樹令一千年というものの、思えば随分ながい年月である。試みに手もとの歴史年表をひらくと、一千年前の九百七十年は円融天皇の天禄元年（九七〇年）に当り、藤原氏の全盛期である。湯川一族どころの話ではない。むろん藤井の堤防などはなかっただろうし、日高川はいく筋かに分かれて、平野部を流れていたに違いない。

されば湯川神社の老樟は、平清盛の熊野詣をはじめ、護良親皇の熊野落や、上皇・法皇のの熊野御幸、さては天正の兵乱や、数々の天変地変、人の世の興亡を、のこらず見てきているのである。そしてその樟は今も樹勢さらに衰えをみせず、年ごとに瑞々しい青葉を生い繁らせている。まったく驚くべきことである。

樟の周辺は今は柵がめぐらされて近づきにくいが、以前の記憶をたどると、幹の中は大きな空洞になっていた。少し大げさかと思うが、昔はこの空洞の中で、よく賭博が行われたともきいているし、昭和十年（一九三五年）発行の本県史蹟名勝天然記念物報告第十集には、芝口常楠委員から

―胸高周二丈四尺、根廻り三丈三尺、主なる幹高さ五間、内部腐朽して空洞となるも若枝は相当繁茂せり―中略―小児の遊び場として木に攀り又は空洞内を抜け云々―

の報告がよせられている。以てその大きさが想像されようというものである。

→　子安神社の樟

→　日高川町船津の樟
（高さ三十メートル・太さ胸高七・二メートル）

さて湯川神社の樟をみたのを機会に、県下の樟の大木を調べたところ、伊都郡笠田町東十五社（いせご）・妙薬寺のそれが最大で幹周十三米、つづいて同郡信太村・信太神社の十一米、粉河町・大神社の九・四米があり、私たちになじみの深い和歌山城のは六・六米、田辺市の闘鶏神社のそれは七・八米であることがわかった。

してみるとわが湯川神社の樟は、他都市のそれにくらべても、決して劣るものではない。

「子安の樟よ、がんばれ！」

私はさんさんと降りそそぐ晩春・初夏の日ざしの中で、かがやくばかりの若葉の樟を仰いで、思わず、こう話しかけた。

御崎神社の「うばめ樫」

「紀州新聞」昭和四十五年八月二十二日掲載

もう半月ばかりも前になろうか、私は美浜町和田に鎮座する御崎神社の「うばめ樫」の老樹をみてきた。

立秋の声をきいて幾日かたっていたのに、相変わらず暑さのきびしい午後であったが、神社に近い旧道のあたりは、左右に老若の松を中心にした雑木林がつづいて、その間を自転車を走らせていると、冷んやりとした風が吹き通い、少年のように思わず口笛が出そうなほど心がはずんだ。

私は神社の前の大鳥居の側に自転車を置いて境内に入った。最近敷きかえたらしい細かい砂利がさくさくと快よい音をたてた。境内は森閑としていた。神殿で鈴を鳴らしていると、にわかに水着姿の若い二組の男女が、がやがや話ながらやってきた。煙樹ヶ浜でキャンプをしている若者達らしい。

「おやおや」

私はこの突然の闖入者に興味をそそられた。

「ちょっと！ 細かいお金もっている」

一人が云った。連れの若い女がビニール袋から小銭を取り出した。もう一人の女がそれを受けとると神殿に進んで、ガチャンと賽銭箱に投げて、神妙に何事かを祈念した。

「俺は無神論者だから、拝まないよ」

男はそう云って横を向いていたが、やがてまた賑やかに談笑しながら浜の方へ引揚げた。

境内は再びもとの静けさにもどった。私はゆっくりと、

天然記念物

姥目の老樹　二株　樹令千百余年

第五十六代清和天皇

貞観元年（八五九年）植栽

と立札のある「うばめかし」の方へ歩を運んだ。

「うばめ樫」は二株とも神木にふさわしく、注連縄がめぐらされていた。太い方の一株は、すでに主幹の内部が腐朽して殆んど空洞化しているが、外皮から大小の枝が長くのびて玉垣を越え、いく本かの支柱がその枝を支えていた。

この二株の「うばめ樫」が、はじめて本県の天然記念物の指定を受けたのは、大正十四年（一九二五年）七月のことで、それにさきだつ大正十三年三月発行の、和歌山県史蹟名勝天然物調査報告第三集に、芝口常楠委員から詳細な報告が寄せられている。即ち、

甲株　根廻り二十一尺七寸　地上五尺ニテ周囲十四尺三寸　地上七尺ニテ周囲十四尺六寸　高サ五間

乙株　根廻リ十五尺　地上五尺ニテ周囲十尺　高サ七間

樹令　清和天皇貞観元年和田村宮ノ脇ヨリ今ノ地ニ遷座セルトキ庭樹トシテ植栽セルモノニシテ樹令一千六十余年ト称セラル―下略―

現状　甲株ノ如キハ上部既ニ腐朽シ樹勢稍衰ヘタルノ観アリ。乙株ハ甲株ニ比スレバ樹令稍若キガ如ク樹勢猶ホ盛ナルヲ認ム―後略―

調査報告書の奥書をみると、芝口委員がこの両樹を実地調査されたのは、恐らく大正十二年のことで、先生が日高高等女学校教諭時代と想像される。そうとすれば既に半世紀の昔になる。その間には戦争があったし、何度かの天地異変があった。樹令一千百余年にくらべると、いうに足りないとしても長い年月である。

私は出がけに目をとおした報告書の記事と写真を思いうかべながら、「うばめ樫」の木を見あげた。写真よりも樹高、樹周ともにいくらか小さくなっているように感じたが、後、堀勝先生にお伺いすると、甲種は地上二㍍で周四・五㍍。乙種は同じ箇所で二・三㍍と、大正十二年ごろと余り変わっていない。もっとも樹高は度かさなる台風の襲来で、かなり低くなっている模様である。それにしても巨きい。樹周では日本一かも知れぬ。その盛んなりしころの、天高くそびえ立った勇姿が、しきりにしのばれた。

昼さがりの御崎神社の境内は、相かわらず静まりかえって物音一つしなかった。私はふとさきほど急に神苑をさわがして、風の如く去った若者たちのことを思い出した。そして粗野ではあるが、はち切れるばかりの若さと未来のある彼らを、好もしいと思った。と同時に千年の年輪を刻んでも、もはや何事にも動じることのない、巌のような「うばめ樫」の風格にも、やはり捨てがたい老年の美しさがあると、再び二株の「老うばめ」を仰いだのであった。

和佐山の二本松

「紀州新聞」昭和四十五年九月二十二日掲載

話は少しさかのぼるが、今年の梅雨は雨が多かった。六月十一日も前日来の雨が、朝から降りつづいたが、午後四時前かねて連絡のあった毎日新聞社の田中武文記者が、堀勝・阪本祐二の両氏と、切目重夫氏の車で私の勤め先へみえた。

田中武文氏は今年の三月ごろから、毎日新聞に連載中の「ふるさとの植物風土記」の担当記者で、そのころは特に各地の老松の実地踏査をつづけていたのであった。

ところで最近、各地で公害や自然破壊が、やかましく論議されているように、割合に変化のおそいこの地方でも、あちこちの山が削られたり、川のよごれがぼつぼつ目につきはじめた。そうした折からだけに「ふるさとの植物風土記」は、私にはまさに一服の清涼剤の感があった。のみならず田中記者のペンは、単に樹木の大きさばかりではなく、その老木の生い育った土地の歴史や、名木にまつわる伝説から習俗にまで及んで、興趣ははなはだふかいものがあった。

田中記者が、わざわざ私を訪ねてきたのは外でもない、実は拙宅から近い野口山の鳶松や、和佐山の二本松への案内を私に引き受けさせるためであった。一同が町役場で小憩の後、野口山の方は時間の都合で断念して、和佐山へ出かけることになった。さいわい雨はやんでいたものの、相かわらずどんより曇って、厚い雨雲がたれこめていた。

切目氏の車で一行が上和佐へ着いたのは、もうかれこれ五時半に近い時刻であったが、そこから早くも二本松の姿が望まれた。私たちは念のため近所の老爺に道をきいた上、夏草の生いしげった畦道を進んだ。途中で一度道を間違えたりしたが、やがて山道になった。低い雑木の間を通ったり、禿げ山を上ったりしたあげく、目ざす二本松の根もとへたどりついた。

そこは五万分の一の地形図に、四八八・八㍍と記された和佐山のずっと裾の方で、海抜六、七〇㍍の所なのだが、松の根もとからは山下の和佐の集落をはじめ、日高川をへだてて入野の部落から、さらに大山の向こうには土生・藤井・野口と、日高平野一帯がひろがって見えた。

田中記者は早速、松の木の大きさを測ったりカメラを向けたりした。ほぼ同じ太さの黒松なのだが、東西に二本並んでいた。「東側・胸高幹周二一・六七㍍、西側・胸高幹周二・七〇㍍」と、計測の結果を読みあげる記者の声がきこえた。樹高は何れも目測で十㍍内外と思われた。田中記者も私たちも、まったくのところここへくるまでは、この二本松にかなりの期待をよせていたのだが、実見して一寸がっかりした。

というのは、その中の西側の方はすでに枯死していたのである。これは下山後にきいた話なのだが、五、六年前の落雷

の結果であるとのことであった。またのこった一本の方も樹勢がすっかり衰えて、もはや余命のいくばくもない様子が、素人目にも明らかに感じられた。

「鳥のまさに死なんとするや、その声かなし。人のまさに逝かんとするや、その言やよし」という言葉があるが、すべて生命あるものの亡びゆく様は悲しく痛ましい。私は枯死にひんした松の下にたって、いつのころから生い育ったかは知るすべもないが、この山上に幾十百年にわたって、あたかも兄弟のように並び立って、五万分の一地形図にさえ「二本松」と記され、朝に夕に村人達から仰ぎ親しまれた、いわばこの地方の名松も、すでに一本は雷火にうたれ、残った一本も今や土にかえる日が近づきつつあるのかと、しばらくは時のうつるのを忘れ、感慨つきぬものがあった。

それにしても最近、日高地方の村々を歩いても、趣のある老松はみかけることが少なくなった。戦時中の濫伐によるものと思われるが、今となっては惜しまれてならぬ。まことに百本の大木も一夜にして伐ることができるが、一本の成木を見るまでには数十年の歳月が必要である。ましてや老樹や名木と仰がれるまで成長するのは、人の二代や三代でできることではない。各地にのこった樹木は大事にいくつしみたい。

さて、私たちが和佐山へ上ってから三ヵ月余りを経たが、二本松の記事は「ふるさとの植物風土記」にはあらわれなかった。恐らく今後も紹介されることはあるまい。二本松がこの欄をかざるには、樹高も樹周も不足であったものと想像される。しかし、それでは折角の二本松が可哀相である。せめてこの地方の人々にだけでも、現状をお知らせしたい。こう思ってペンを取った。

日高別院の公孫樹

「紀州新聞」昭和四十五年十月二十二日掲載

第二次世界大戦後、御坊市にも銀行や官公署をはじめ、巨大な洋風建造物が数を増したため、今ではそれ程に感じないが、以前は日高別院の本堂を、随分大きな建築物であると思った。

実際、私たちが子供の時分、たまたま母や祖母につれられて御坊の町へ出かけた場合、勿論、現代のように自動車はなかったし、自転車でさえそう多くは走ってなかった。大型輸送機関では未だ牛車や馬力車が幅をきかしていた時代なのだ。歩くより外はなかった。子供の足で出島堤までくると、もうそこから大御堂の名にそむかず、立ち並んだ町家の家並みから一きわぬきんじた、高く大きな日高別院の大屋根が、さながら町全体を圧するように見えてくるのであった。

と同時にその大屋根の前方に、冬なれば箒をさかさにした形の、春夏の侯なればこんもりと繁った大いちょうの樹の高

々とそびえ立つ姿が望まれて、もはや御坊の町も近いと、疲れた足も自然にはずんでくるのであった。

ところで「いちょう」の樹も別院ほどの大木になると、三十年や四十年では見た目には殆んど変わっていない気がする。いま日高別院の表門の側に表示板があって、それには、

県指定文化財　天然記念物

日高別院のいちょう

高さ三〇・〇米　幹周四・五米

文禄年中（一五九二～九六年）、坊舎移建の時植栽されたもので、

樹令約三百七十年を経過しているものである。

御坊市教育委員会

と記してある。

そこで念のため古い本、県の史蹟名勝天然記念物調査報告書をみたところ、それには樹高は記載されていないが「胸高幹周四・五米」と芝口常楠委員の報告がみえる。もっともこの報告書発行は昭和十年であるから、調査の行われたのはその一年か半年ぐらい前のことと推定される。してみるとこの三十四、五年の中に、別院の大いちょうは大きさにおいて〇・一米だけ成長した計算になる。

何れにしても堂々たる大木で、御坊生まれでない私でさえ一方ならず懐かしい。ましてや御坊で育った人々には、さまざまな思出があるに違いない。

私の生家は、本派本願寺派の日高別院の表門の真正面にある。―中略―別院の表面を這入ると、直ぐそこに天に冲する大銀杏がある。肌目の荒い老幹からは幾つもの大乳房が長く垂れて、その傍らに又幾つかの寄生木が栄えてゐる。余程の年代を経たものであろう。四方八方に延びた大枝小枝が境内の半ばを蓋うてゐる。真夏には、その青葉の下に藁蓆やゴザを布いて、大勢で寝ころんだり、戯けたりして遊んだ。又秋から冬にかけては、銀杏落ち葉を掻き集めて来てはどんどの山を築いて火にあたった。つまり四季を通じ、小学時代を通じて、其庇護に馴れ、其恩愛に親しんだ。私には、この黙々たる銀杏の大樹のみが生みの親代わりのような気がした。―後略―

これは御坊出身の法学博士、故津村秀松著「随筆道成寺」の中の「公孫樹」の抄出である。津村秀松は法学博士という堅い専門ににず文に長じ、素雨と号し俳句を嗜み、句集「花野ゆく」をはじめ、随筆集に「社会小景」や前出「道成寺」・「春秋割（とう）記」等があり、常に流麗な筆で御坊や日高地方を中心に、紀州の美しい風物人情を紹介しつづけたが、昭和十四年（一九三九年）十二月六十二才で敗血症のため急逝した。また津村一家は揃って文才に富み、長男秀男は映画評論家としてきこえ、二男信夫も詩人として将来を嘱望されつつ若く死んだが、「津村信夫詩集」のほかに散文集に「戸隠の絵本」・「荒地野菊」の

二著があり、書中しばしば御坊の町が登場する。父子ともに早く御坊をはなれたせいで、割合に当地方では知られていないが、お国自慢ではなく随筆家としては一流である。

話は前後したが津村の生家は東町和佐屋とよばれた御坊の旧家であった。秀松の兄英三郎は大正から昭和にかけて、御坊の財界に君臨した日高銀行の頭取であった。しかしその津村家も昭和九年の金融恐慌による銀行倒産のため没落し、残っていた豪壮な家屋敷も、二、三年前とり払われた。樹令三百七十年と云われる別院の大いちょうは、いくたびこのような町家の盛衰を眺めてきたであろうか。

上富安の大榎

「紀州新聞」昭和四十五年十一月二十二日掲載

御坊市湯川町の上富安に、榎の大木が遺っているときいて、ある日の午後、自転車を走らせた。

原木商人でも植物の研究家でもないのにと、自分でもその物好きがおかしかったが、榎に限ったことはない。長い歳月をきびしい風雪に耐えてきた巨木や老樹の姿には、どこか古武士にもにた趣があって、妙に私をひきつけるのである。昔の人はこのような大樹を、しばしば神木として崇めてきたが、今の私は高く繁茂した枝葉を仰いだり、太い幹にふれるだけで、心にやすらぎを覚えるのである。

榎の所在はすぐ見当がついた。富安の集落に入ると、間もなく北よりの山手の方に、こんもりと一叢の木立のそびえるのが目についた。私はその森を目あてに自転車のペタルをふんだ。榎は「せんご橋」と書いた橋の袂から、数㍍かみ手の富安川畔に、青木や樟その他の喬木にまじって、初冬の空をおおうばかりに枝をひろげていた。なるほど大きい。用意の巻尺をあてると、胸高で周三㍍八〇(一丈二尺五寸)あった。樹高は十㍍にも及ぼうか、確かな数字はつかみようもなかった。

榎は橋の上にのしかかるような形で、やや東南に傾いているが、幹はまっすぐにのびて、数㍍の上まで枝が伐り払われていた。幹の頂上からは、幾つかの太い枝が四方にわかれ、そのつき根にはあたかも仁王像の肩の力瘤を思わせる瘤々が、あちこちに盛り上っているのが、樹の下からでも眺められた。幾十百年間にわたる自然との戦いのかたみに違いない。

私が飽きもせず榎の姿にみとれていると、近くの農家の主婦が通りかかった。

「見事な榎ですね」

感嘆のあまり思わず声をかけた。

「榎ですか。この辺の人は「よのみ」とよんでいます。大きな木でしょう」

とその主婦は答えた。気さくな質(たち)なのであろう。榎はこの隣りの古田春三家のものであることや、古田家は「かわしろ」の屋号で知られる旧家であること、戦前は広い屋敷内の米蔵へ、年貢米が盛んに運び込まれた。当主の春三氏は現在内原駅前で開業医をされている。榎は以前はもっと大きかったが、昭和三十六年(一九六一年)九月の第二室戸台風で、大枝が折れて道路をふさぎ、その片付けに何日もかかった。また榎や樟は業者が盛んに買い求めにくるが、古田家ではなかなか、「うん」といわぬことなど、次から次へと話しつづけた。

それから数日たって、私は榎のお話を聞くため、私は古田氏をお訪ねした。古田氏は榎にまつわる格別の伝承はないが、六十ぢかい氏の子供時代と、見た目には少しも変っていない。推定樹令三百年ぐらいではなかろうかと話された。

ところで、先の主婦の言葉にもあったとおり、日高地方では榎を「よのみ」とよんでいるが、これは榎の実の「えのみ」がなまったものであり、「ヱノキ」の「ヱ」は元来、吉の字で、もともと縁起のよい木とされ、信州川中島あたりの旧家では、屋敷の鬼門に植えてあると、これは宇都宮貞子著の「草木覚書」の中にある。

さて話は古いことになるが、私の村の庚申山にも榎の木があった。小学校に隣接していたため、榎の実の熟する晩秋になると、元気のよい子供達は、よく木に登って実を採っては間食した。榎の実は小さい。黒く熟れても口に入れると砂のようにざらざらとして、決して美味いものではなかった。それでも当時の子供達は「よの実が熟した」とよろこんだものである。

旧版の広辞苑を見ると「えのき」の項に、

「これ科の落葉喬木で暖地に多く、高さ十㍍、直径一㍍から三㍍に達し、材は薪炭や器具などに用い、江戸時代には一里塚に植えた　云々」

とある。榎が一里塚に植えられたのは、恐らくこの木の成長が割合に速く、しかも喬木となって、目標とするのに適したためと思われるが、それにしても上富安古田家のそれのような巨樹に成長するには、やはり容易ではあるまい。私は興のおもむくまま、県内の榎の巨樹を調べてみた。次の表がそれである。

所在地	樹周	樹高
海草郡楠見村九頭神社跡	一丈二尺	十六間
那賀郡龍門村杉原	一丈六尺	七間半
和歌山城内	九尺五寸	十一間
〃	一丈一尺八寸	十二間
那賀郡粉川町西山常三郎邸	一丈二尺	七間
新宮市下熊野地五五四の二	九尺一寸	八間

これでみると榎は成育が速いというものの、巨木として現存するものは、極めて稀であることが知られる。成長が速いだけに樹令が短いのであろうか。何れにしても不思議である。もっともこの調査資料は、大正末年から昭和二十四、五年ごろへかけての、和歌山県史蹟名勝天然物調査報告書のみなので、或は調査もれや記載された中でも、既に枯死したり伐採されたものがあるかも知れぬ。

古田氏は古木のことで、大事に保存したいと話されたが、いずれにしても幹周一丈二尺五寸といえば、県下に現存する榎では有数の名木である。上富安の榎よがんばれと声援をおくりたい。

「紀州新聞」昭和四十五年十二月三日掲載

森彦太郎著の奇書
「奇僧の片影」に就いて

話は少しさかのぼるが、去る十月二十九日、県文化財研究会御坊支部役員会が市立御坊図書館の閲覧室で開催された。午後五時半の開会予定であったが、少し早めに出席したため、まだ池本多万留御坊中学校長がみえていただけであった。所在がないので書架に並んだ本を、漠然とみてまわった。

御坊図書館には郷土関係の本だけを、別におさめた書架がある。私の眼はその本棚の前で釘づけになった。

「奇僧の片影・森彦太郎著」とある一冊が目にとまったからである。自分の口から云うのはどうかと思うが、私は昭和二十七年（一九五二年）に「森彦太郎先生伝」と題する小著を公刊した。当然のことながら私はこの一書をなすに当たって、先生の諸書に目をとおすことは勿論、御夫人をはじめ井上豊太郎・芝口常楠・神田耕一郎・和田喜久男・田端春三・田端憲之助・山田栄太郎・浜上楠松・片山隆三・玉井玉楠・尾崎光之助・浜口佐四郎・田中敬忠等々、およそ先生と御親交のあったと思われる諸先生を歴訪して、森先生についての様々なお話を伺った。また御所蔵の書簡、その他の資料をお借りして参考にした。しかしこれらの諸先輩のうち、森先生に「奇僧の片影」の著書のあることを語られた人は一人もなかった。また先生は非常に筆まめな方で、公刊された諸書のほかに、新聞や雑誌に多くの記事を発表されているが、それらの中にも、私的な書簡の中にも、この書にふれた文章は一つもみられなかった。だが現に私の目の前の書架には、森彦太郎著「奇僧の片影」があり、しかも郷土関係書として特別に保管されているのである。先生の小伝を公刊しているだけに、私のショックは大きかった。

ところがあいにくなことに、貴重本扱いになっているこの著書をおさめた書架は堅く施錠されて、手にして確かめる術もなかった。仕方なく翌日、早速図書館を訪ねてみた。

森彦太郎著「奇僧の片影」はＢ６版・紙装仮綴で二二〇頁、内容は書名のとおり桃水・霊巌をはじめ、良寛・惟然坊等、古今の奇僧四十六人の行状を、一人各一頁から二頁半ぐらいに、簡単な文語体で記したものであった。また奥書によると「明治三十五年一月二十三日印刷、同年一月二十五日」（一九〇二年）に発行されており、発行所は「東京市神田錦町一丁目十番地文学同志会」「定価二十五銭」となっている。また肝心の著者は「東京市下谷区入谷町百七十五番地・著述業・森彦太郎」とあって、住所が東京市になっているのは腑におちぬが、森彦太郎の氏名は、かの日高郡誌や南紀土俗資料・日高近世資料・鷲峯余光の著者と、一点一画もちがっていない。なおこの発行書店は大阪にも支店があったとみえ、「大阪市西区江戸堀南通二丁目・文学同志会大阪支部」とも記してある。

さて、御坊図書館所蔵の森彦太郎著「奇僧の片影」は以上の点だけから考えると、一応、日高郡誌の著者森彦太郎先生の著としてもよさそうである。この著書は私のみるところでは普通の商業出版ではなく、文学愛好者の自費出版である。発行所名が文学同志会となっている点、さらにそれが大阪にも支所を設けている点など、たしかにそのように感じられる。恐らく全国の文学青年層を相手にした、利にさとい商人の事業であったと想像される。そして森先生は後年、郷土史家として勝れた業績をのこされたが、少年時代は多感な文学青年であられた。

ここで、著者の住所が東京市であるのは少々気になるが、これとても自費出版の都合上、一時名目だけ東京市に寄留されたと考えて考えられぬことはない。また先生は簡潔な文語体が得意であられたし、後に法灯国師の伝記「鷲峯余光」をのこされた位で、宗教界の偉人・名僧の伝にも精通しておられた。これだけ条件が揃うと関係者が郷土人・森彦太郎先生の著と思いこむのも無理はない。しかしだからと云って、この書をわが森先生の書とするのは早い。

第一、私事のようになるが、以前私が森先生伝を書くため諸先輩方を訪問した際、誰一人としてこの著について語られなかったのは何故か、各氏はいずれも森先生とは親交があり、殊にその御生前、志を郷土研究によせられた方が多かった。まさか忘れたという訳ではあるまい。人一倍記憶力の強い方々なのだ。

第二に、あのように筆まめであられた先生が、恐らく処女出版であろう印象ふかき筈の「奇僧の片影」に関して、どこにも記されていないのは何故か。

まだある、第三に奇僧四十六人のうち紀州の名僧・奇僧が一人も取りあげられていないのは何故か。明恵上人・法灯国師は郷土に関心のふかかった先生の著書とすれば、当然とりあげられてよい筈である。

以上の三点がどうしても私には納得できないのである。

しかし、これとても「奇僧の片影」が森先生の著書でないと、断定するきめてにはなりにくい。そこで家に帰って先生の年譜をあたってみた。「奇僧の片影」が出版された明治三十五年一月（一九〇二年）は、先生は田辺中学在学の時で十五才の少年にすぎなかった。しかも著述の事業は例え小著であっても、三ヵ月や半年でなるものでない。かりに半年でできたとしても、

先生はようやく十四才の少年である。いかに先生が文学的に早熟であられたにしても、十四才で奇僧四十六人の伝記をまとめることは至難であろう。

よしやそれができたとしても、相当な金額にのぼったであろう自費出版が、中学一年生では調達し得る道はない。こう考えてくると森彦太郎著「奇僧の片影」は、まったく同名異人の著と断定して誤りはあるまい。しかし私はまだ一抹の不安があったので、先生の御長男の日高高等学校教諭森彬氏に電話でお伺いした。

「父にそんな著書があったとは、聞いたことがありません。まして中学一年か二年の時でしょう。同名異人ですよ。奇僧でなくて奇書ですね……」

森彬氏は電話の向こうで明るく笑われた。

上人松

「紀州新聞」昭和四十五年十二月二十二日掲載

この冬の寒さの訪れは、いつもの年にくらべて早かった。十一月の末ごろには、もうきびしい寒波が何度も日本列島をおそった。

ところがどんな気圧配置になったのか、十二月七日はめずらしく風もおさまり、おだやかな天気になったので、午後になって御坊まで出かけた足をのばし、美浜町吉原の浜にある上人松をたずねた。

上人松はこれまでも度々みているのだが、新浜界隈は近年にわかに人家が増えて、すっかり見当がちがっていた。おりからの暖かな冬の日を浴びて、家の前で近くの主婦と世間話をたのしんでいた若い夫人に、上人松の所在をきいてみた。

「上人松？」

夫人は、きょとんとして聞きかえした。恐らく近年になって、ここに移ってきた人なのであろう。またしばらく自転車を走らせて、今度は道端の漁師らしき年配の男に声をかけた。

「上人松なら、もう少し先の方だ。枝ぶりのよい一本松で、すぐわかる」

と、その男は答えた。

上人松の位置は詳しくいうと、美浜町大字吉原字大松原九五八番地である。そこは煙樹浜の大樹海から百米ばかりはなれた砂浜で、上人松だけが一本、あたかも傘をひろげたように、枝葉をしげらせて孤立していた。昭和十二年（一九三七年）ごろの報告では幹周七尺三寸とあるが、形ばかりの柵を越えて、用意の巻尺をあててみると二米九〇を示した。

私は冬とも思えぬ明るい砂浜の日ざしの中で、寛政の昔、しばしばこの樹下において、五体投地の念仏勤行を修せられ

たと伝える、近代紀州日高が生んだ、稀世の念仏行者、徳本上人の行蹟をしのんでみた。松の幹には大きな傷痕があった。胸高ぐらいのところで岐れた太い枝も、暴風に吹き折られたためであろう、切りとられた痕跡がみられた。昭和三十六年（一九六一年）の第二室戸台風の被害であるときいたことがあるが、徳本行者の修行以来でも樹令は百七十年を越えるこの松にもやはり衰えの影が感じられた。

さて、私は徳本上人とゆかりの深い松を仰いでいるうちに、この地の人田端憲之助翁（明治二十二年（一八八九年）六月～昭和四十年（一九七〇年）三月）に、上人松と題する謡曲の未定稿のあったのを思い出した。それは表紙とも六枚の半紙二つ折りに墨書したものであった。これまで余り知られていないので、この機会に紹介しておきたい。

〈上　人　松〉

末はてしなき海原や、末はてしなき海原や、碧色濃き日高浦、立並（な）む松の枝繁く、御代も栄ゆく春のいろ、春のいろ、「これは紀州日高の郡、久志の里に住む徳本とはわがことなり。我この程は念仏修行のため千津川の奥深く、落合のほとりに庵（いほり）を結び、即身成仏の祈願に日もなほ足らざりしが、さいつ頃本の脇の浦に難破の舟あまたありて、命を失ふよし承はり候程に、非業の亡霊（りょう）をも弔（とぶら）はじやと思ひ、只今この処まで参りて候。これより本の脇の浦に向はうずるにて候が、あまりにこのわたりのけしきただならず覚え候程に、これなる松の木陰に立ち寄り、暫くここに休らはうずるにて候」

紀の国の日高の浦の春なれや、枝もならさぬ大御代の、末松山の浪越さぬ治る海のおもてかな、いざこと問はぬ都鳥の、うきねの様に似たる舟、あまのしわざもいとまなき、老人といへど年を経て、この浦里にしほじみし、齢も千代やかさぬらむ。霞に浮ぶ阿波の島、浪も静けき塩屋浦、三穂の浦わや日の岬、沖飛ぶ鴎うちわたず、日高松原日高浜渚を洗ふ浪のおとも、讃仏浄土の声すなり。

「抑々（そもそも）この松山と申すは、西は本の脇浦より東は浜の瀬浦に至る一里に渡る大松原なり、老松若松参差（しんし）として影を競ひ、緑翠四時滴るが如く、蓬来（とこよ）の島のおもかげとても、これには過ぎじと覚え候なり。とりわけ茲に一木（いちき）の松の候が、枝ぶり殊にみごとにて候ほどに、これなる木陰に暫しがほどを、浦のけしきをもうち眺めつつ、尚念仏の功績をも積まばやと思ひ候」

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏の声にまぎれて松風もなし浪の音もなし。浦のけしきもそのままに仏土と現じ、身はそのまま阿弥陀如来と現じける。阿弥陀如来と現じける。

田端翁作の謡曲「上人松」はこれであるが、私の写本の裏書には、

これは吉原の人、田端憲之助の旧作である。一日氏を訪ね四方山話の末、この一文を取り出された。未定稿であるからと固辞されるのを、強いて借用の上、漸く今夕筆写を終わる。

昭和二十九年（一九五四年）八月三十一日

と記してある。それから既に十有六年を経た。上人松樹下に佇って今昔の感尽きぬものがあった。

新春随想　猪のはなし

「紀州新聞」昭和四十五年一月一日掲載

畔田翠山は寛政四年（一七九二）若山で生まれ、医をもって業をする傍ら、本草学の研究に生涯をかけ、安政六年（一八五九）ごろ、熊野山中で薬草採集中に病を発し、本宮村で六十八歳をもって客死した。

翠山には「古名録」・「水族志」・「紀南六郡志」・「熊野物産初志」・「野山草木通志」・「紫藤園考証」・「吉野郡山記」その他数十冊にのぼる紀州の本草に関する著述があるが、公刊に附せられたのは「水族志」ぐらいで、他の著述は熱心な研究家の手から手へと、写本として伝えられているに過ぎぬ。

もう大分前になるが、ある古書店の目録に、これら翠山の著書が一括して十数冊、掲載されたことがあった。古書の値段は格別高いという程でもなかったが、それでも下級サラリーマンの私としては、かなり大きな負担であった。目録の中には久しく私が捜していた「紀南六郡志」や「熊野産物初志」があった。咽喉から手が出るほど欲しかった。いく日も思案したものの、どうにも金の算段が付きかねて、残念ながら見送らざるを得なかった。この時ほど安サラリーマンの悲哀を感じたことはない。借金してでも注文すべきであったと後で考えたが、もう機会を失っていた。

ところで昨年の春であったが、美浜町和田の故・和田喜久男氏のお宅をしばらくぶりでお訪ねした。未亡人と四方山話のあげく、故人の蔵書の一部を拝見した。和田氏はその晩年、郷土研究に専念しておられたため、私はしばしばお伺いしては研究談をおききしたものであった。

蔵書は氏の在世中と変わることなく、整然と書架におさめられていたが、和書の中には少々虫が入ったり、湿気のおびたのもまじっていた。私はその一冊一冊をとり出してみて行ったが、中から思いがけず、かねて私が求めあぐねていた「紀南六郡志」一秩全八冊があらわれて、あっと私を驚かした。和田氏の御生前についぞみたことはなかったし、かってこの本を御持ちであると、おききしたこともなかった。

以前まだ和田氏や芝口先生がお元気であった時分、若輩の私を加えた三人で、終始、蔵書を交換しあっては、めいめい写本に励んだものであった。両先学にくらべると私の蔵書などは、無論ものの数ではなかったが、それでも中には何かの

拍子で両氏のお持ちでないものが私のもとに揃っていることもあって、互いにその欠を補いあっていた。にもかかわらず和田氏は存命中、「紀南六郡志」を所蔵せられるとは、一言もお漏らしにならなかった。それほど和田氏はこの一書を、大事に秘蔵されていたのであった。愛書家或は蔵書家和田氏の心情が、この書をみて、私には分かりすぎる程わかるのである。

さて話は又もとへもどるが、医家であり高名な草本学者であった翠山は、紀州一円はいうまでもなく、東は甲斐・信濃から、西は周防・長門、北は越前・越中・越後と、あまねく各地の山野を跋渉して、動植物の踏査をつづけたと伝えるが、その見聞録というべき「紀南六郡志」の中に、次のような記事がのせられている。

○ 野猪（いのしし）

―日高郡佐井の人いう、山中にてその母子を連行すれば、後るるものを狸己が穴の口に窺いて、その後るる子の後足を咬えて、穴の中に引入れて食う。―

昔から滑稽な人たちを例えて、狐と狸の寄り合いなどというが、猪と悪かしこい狸の巧まずして甚だユーモラスである。それにしても何か嘘のようであり、本当の話のようでもある。

もう一つ

○ 白野猪（しろいのしし）

日高郡佐井の人いう。寛政年中（一七八九～一八〇一年）、船津村と佐井村の山中に、白野猪山中より出で来る。大きさ三歳牛の如し。白色にて雌なり。両村の猟師あい集まりて之を狩る。被害者おおし身に数十の砲丸をうけ、印南浦に走り、海中に入りて斃さる。

中津方面は今も猪の多い所であるが、寛政ごろは更におおく、中にはこの記事のように年を経た大猪もあったに違いない。それにしても手負いになったとはいえ、船津から印南浦までとはよく走ったものである。まさに猪突猛進型である。

亥年にちなんで、ふるい猪の話をぬき出してみた。

新春随想

かねは天下のまわりもの(2)

「日高新報」昭和四十六年一月一日掲載

いつまでも若いつもりでいるうちに、もはや六十幾歳と数えられるようになった。昔なら翁とよばれる齢なのだが、相

かわらず物心ともに、ゆとりのない毎日のくりかえしで、はずかしい限りである。

ところで人間も六十台に入ると、月日の流れが驚くほど速く感じられる。「かねは天下のまわりもの」と題する雑文を、本紙の正月号に寄せたのは昨日今日のように思うのだが、早くも一年がすぎた。平素は一向に縁のとおい「かね」なのだが、せめて正月だけでも景気よく、昨年同様「かね」談議を披露したい。というのものの私の「かね」談議は、「かね」は「かね」でも富貴を象徴する「金」でなく、相かわらず色気のない「鐘」である。

さて日高町谷口に即生寺という浄土真宗の寺がある。日高郡誌によると、

元和四年三月(一六一八年)この地に小庵を営んだのがはじまりで、嘉永三年六月(一八五〇年)ちかくに移転して小堂を再建し、慶応四年七月(一八六八年)寺号が免許された。さらに明治十二年(一八七九年)に今の地に移った。

とある。私は昨年十一月初めの某日、ふと思いたってこの寺を訪ねた。折よく住職が表の方にみえていたので、しばらく寺の由緒などをお伺いした。

そのうち気がつくと本堂の軒下に半鐘がかけられていた。鐘の錆び色からどうやら戦前のものと思われたので、近よってみると、

安永八亥年四月吉日。
紀州日高　若野村、
極楽寺。一誉円成代。
同村津村正重作

と彫りつけてあった。安永八年は一七七九年に当たるから、今から約二百年前のことで、さして古い作ではなかった。しかし銘によると、この鐘は、もともと私の居村である川辺町若野の旧極楽寺のもので、しかも、その作者もまた同村の津村正重であることが、一方ならず興味をかきたてた。

津村正重の所伝は明らかでないが、江戸時代の初期から明治初年にかけて、若野村に居住した鋳造師で、日高地方の社寺の鐘や釜をいくつか作っており、私のたしかめただけでも十数個を数える。その製作年代も川辺町江川の江川八幡神社の「お湯釜」の、寛永廿一年(一六四四年)から御坊市上野口の旧法林寺の半鐘の、明治九年(一八七六)の前後二百三十年間にわたっている。

ところで若野村、旧極楽寺の半鐘が、どのような経緯で即生寺へ移ったのであろうかと、私の興味はますます深くなった。それについて即生寺の住職の話によると、明治廿二年(一八八九年)の大洪水によって、若野村の極楽寺はあとかたもなく流された。無論その際半鐘も流失したが、後日、日高河原に埋まっているのが発見された。しかし、総戸数四十戸のうち三十八戸までが流失し、漂流者七十名・死者三十七名を出した若野村の人々にとっては、生きることが精いっぱいで、とうてい寺の

再建どころではなかった。事実、極楽寺は今に至るも再興されていない。河原から出てきた半鐘は、こうして即生寺へ身売りされたのである。

それにしても安永八年の亥年に作られた旧極楽寺の半鐘に、それからめぐりめぐって十六回目の亥年も近い秋の一日、日高町の即生寺で相見ようとは、全く思いがけぬことであった。やはり「かねは天下のまわりものか」と、私はあらためて本堂の軒下につるされた、正重作の半鐘を感慨ぶかく仰いだ。

道林寺の石段で

小谷緑草

「紀州新聞」昭和四十六年一月十二日掲載

抱えている酒と弁当が面倒くさいので、腹は空いていないが「弁当にせんか？」と云った。格好の坐り場所がないので、少し後もどりして、いまさき詣ってきた道林寺の石段に三人並んで腰をおろした。一月二日南部川村熊岡である。

十二月二十六日御坊で忘年秘会があり、その席で清水長一郎が、

「一月三日に、穂手見街道を案内してくれ」と云った。紀州新聞の藤田武蔵も誘って行くというので、案内を引き受けた。

一月一日の晩、清水から電話がかかって、「明日行こら、穂手見はやめた。上南部の一本松と、関本上人の碑を案内してくれ」と云った。

勝手なことをいう奴だ。僕は、正月三日間は、郷土史の調査に専念する予定だったのを、外ならぬ清水の頼みだから引き受けたのだ。穂手見峠へ日頃健脚を自慢している早苗ちゃんと和ちゃんを誘って、足腰立たんほどくたびれさせ、清水と武蔵に一人ずつ背負わせて、僕は馬子唄でもうたいながら下って来ようと計画していた。それがオジャンになった。

一月二日早朝起きて、日課の郷土史をやりながら、二人の来るのを待った。九時になっても十時になっても来ない。二日を三日と聞き違えたのかと心配になって、十時半電話をかけた。清水の奥さんが出て来て、新年の挨拶をしていると、玄関で二人の声がした。

「お前等、今ごろまで何してたんな……」とけしきばみながらも、友が来たことは嬉しい。

大急ぎで、着物を服に着換え、妻が詰めてくれた寿司折りをひっつかんで汽車に乗った。二人とも弁当すら持っていない。上南部の山の中に食堂があると思ってんのかコンチクショウ。

汽車が南部駅につくなり、売店で二合瓶二本を買い、駅前の松寿司に飛び込んで、

「いまバス出んね、すぐ弁当出来んか」とせきたてた。出来たての寿司折が一つあった。
「そい、こっちへ回してくれ」と、先客のを横取りして、バスに飛び込んだ。それが、これから開く、酒と弁当である。
ここに辿りつくまで寒かった。超世寺の手前でバスを降りたら、うまい工合に、舗装道路が熊岡の方へ伸びている。その道路が、南部～上洞線に突きあたると、さて、どっちへ行ったらよいか。折よく通りかかった車を清水が呼び止めて道を聞いていた。こんな時、清水は一番気軽に行動する。武蔵は、新聞記者のくせに「よきにはからえ」といった態度である。
めざす関本上人の碑はどこにあるのかは知らんが、熊岡（くまおか）へ行けばわかるだろうと、無責任な道案内だが、先頭にたって、田の畦道を進んだ。
「熊岡は、平野の隅の岡という意味だろうナ」と清水がいう。学者は理屈を付けたがる。「熊がいたから熊岡だろう」と僕は単純だ。
平野の中に家がなく、山際と山の傾斜面に集落をつくっている。風がこわいのか、田圃を屋敷にするのがもったいないのか。
南面した石段は暖かい。色白の三人の顔が、日焦けするほどだ。道端に水仙が咲いている。こんな日当たりのよい寺の墓地に葬られたら、よかろうと思う。
僕は、死は無だと思っている。魂が甦るとは信じていないが、この世で悪いことをしたくないし、死んで埋められるなら、見晴らしのよい陽のあたる墓地にしてほしいと思う。どうも今年中に死にそうだが、日蔭の墓地に葬るのは御免蒙る。女房よおぼえておけ。
清水も武蔵も好きな男だ、僕は、いい友人を持って倖せだ。こんな友人とは、何を話しても、何を聞いても、手答えがあってたのしい。
上人の碑は、想像していたより、大きく立派であった。清水が碑を写真に撮った。この男、近年になって、写真の撮り方を会得したのだが、墓や石碑ばかり撮して、これまでに同行する僕を撮してくれたことはない。親友のことだから、男前のモデル料をよこせとは云わないのに、遠慮しているらしい。
「関本諦承という人は世渡りが上手だったんだろうナ。出世した人は、たいていそうだから―」と、僕が云った。清水は黙して答えなかった。武蔵も黙っていた。二人の沈黙に、僕は、はしたないことを云ったと気がつき、二人を沈黙させるほど、えらい坊さんだったんだナと思った、そして、井上豊太郎が生前僕に話したことを思い出した。「関本上人が、引導を渡す時の声ちゅうたら、そんじょそこらの坊主共のとは違ごて、魂かピリピリしたぞ―」
帰りは白急（白浜急行バス）に乗って武蔵が、「今日は順調でよかった。バスにも乗れたし……」と、巌流島の果たし

合いに間に合ったようなことを云った。何がよいものか。僕は、南部の珊瑚の道ちゃんの百万ドルの笑顔を二人に見せてやって、それから、松寿司の寄せ鍋で一杯飲むつもりだった。そんなに早くお嬶の顔を見たいんならトット帰りくされ。一日中、お寺と三昧を引きまわしといて、ほんまにもう―。

熊岡の一本松

「紀州新聞」昭和四十六年一月二十二日掲載

正月三ヵ日のうちの一日、気のおけない二、三人で、郡内の適当な地をえらんで、歩きまわることが、ここ数年つづいて、あたかも私の新年行事のようになった。

昨年はどういう訳か、各自にそれぞれの差しつかえがあって実現しなかったが、一昨年は藤田草宇・小谷緑草の両君と、田辺駅から南部町まで歩いたし、一昨々年は藤田草宇君と二人で、ときどき横なぐりに面をたたく吹雪の中を、中津村高津尾から同村八軒道まで往復した。その前年も前々年もやはりどこかえ出かけているのは確かなのだが、すっかり記憶を失った。古い日記帳を取出せば分かることだが、それほどのことではあるまい。

さて今年は例によって、藤田・小谷両君と、南部駅からバスで筋まで行き、そこから南部平野を横断して、熊岡・晩稲方面を歩いた。実は昨年であったか小谷君が、清川から晩稲まで、いわゆる穂手見を大勢でハイキングした話を、本紙の随想によせていたのを読んで、私も一度そのコースを辿ってみたいと考えていた。折から旧年末に彼と逢う機会があったので、その席上で道案内を頼んであった。ところがその後、段々調べてみると、これは少々行程が長く、正月の足ならしには荷が重すぎるように思えた。そこで急に筋～熊岡～晩稲コースに変更したのであった。

実は南部平野の所々はこれまでもしばしば訪ねているのだが、そのおおくは県道竜南線以西の地で、熊岡や晩稲一体には殆んど足を入れていない。時たま龍神自動車でこの街道を上下するときも、いつも車窓から田辺市芳養との境界をなす、なだらかな丘陵上に点在する平和そうな村々のたたずまいを眺めては、いつかはあの辺りを歩いてみたいと、一種のあこがれに似たようなものを、久しく抱いてきたのであった。

その上、昨秋、熊岡の地に同地が生んだ高徳、関本諦承上人生誕地の碑が建てられたときいた事や、同地から大分はなれた丘上に、一の札松とよぶ名松があるとの新聞記事を読んだことも、私のそうした思いを、一層かきたてたのであった。

筋の停留所のちかくから熊岡の方へ、広々とひらけた田圃中を、舗装した道が長くのびていた。部落を目の前にしたところで、その道は大きく迂回していた。私たちは無駄口をききながら、田圃の細い畦道を危なかっしい足どりで近道した。見渡す限りの水田はすべて稲の取り入れたあとで、どこにも裏作をしている気配はなかった。たった一枚だけに麦が作ら

れていた。
「よく麦ふみをしたものだな」
緑草君がいった。麦ふみをしようにも一枚の畑もなかった私にはその経験はない。けれども寒い吹きさらしの田圃に、しがみつくようにふるえている麦をみると、藤村の「千曲川抒情の歌」ではないが、
浅くのみ春は霞て　麦の色わづかに青し
と遠い少年の日のことが思い出された。
あるかないかの風は、それでも頬に冷たかった。すきとおるような青い空に、凧がうかんでいた。長い尾を引いた大きな凧であった。ちかごろでは余り見かけない光景であった。しばらく歩いて行くと農家の表で、少年が凧を作っていた。
「あの凧は君の凧か」ときくと、少年は「そうだ」と答え、「あれは水門の杭にゆわえてある」とつけ足した。凧の手入れをしている少年は愉しそうであった。器用な少年に違いない。もともと不器用であった私は、この少年のように自分で凧を作ったことはない。けれども不器用は不器用なりに、自分で紙鉄砲をこしらえたり竹馬を作った。鎌がそれて指を切ったり手の皮をむいたりしたが、それはそれで結構たのしかった。戦後の少年たちにも、いわばこんな野趣に満ちた歓びがあるのだろうかと考えたりした。
行く手の丘上に形のよい松の大木がそびえていた。今日の目的の一つである「一の札松」は、まだまだ遠いはるかな山中にあるという。せめてあの松でも見ておこうと丘を登ったが、そこは部落の葬場であった。六地蔵がならんでいた。この地方は土葬の習慣が守られているとみえ、一本松の周囲には簡単な竹を囲らせた土盛りが、いくつも列をなしていた。
藤田君も小谷君も、「何だ、やっぱり葬場か」という顔をした。妙なことに人一倍臆病もののくせに、私はどうしたことか葬場や墓地に足を入れるのは、そんなに嫌いではない。というより一種の親しさというか、心のやすらぎを覚えるのである。誰もが最後は来なければならぬ所なのだ。
松の木は二人の手を借りて巻尺をあててみると、幹周五・二㍍あった。樹高は十数㍍をこえようか。大木という程ではないが、枝ぶりも見事だし、樹勢も盛んである。樹令は勿論知るすべもないが、百年や百五十年ということはあるまい。熊岡・晩稲で生まれ恋をし、子供を育て老いてこの木の下で永遠の眠りについた、いく人の生涯を見まもってきたであろうか。新年には不似合いな、こんな感傷にふけりながら、私は二人の後について丘を下った。

あとがき

清水長一郎遺文集(五)、昨年の初冬から活字化を初め、もうすぐ初夏という今やっと一四四頁を終わった。

今年の冬は年のせいでそう感じたのか寒さがきつかった。また関東や雪国では豪雪の被害も出た。

父が主に地方紙に投稿した記事を活字に起こしながら感じたことは、五十年前でも忘れられていたこと、市町村誌などに記載のない、チョットしたことが記録として記されている。

また先学の郷土史家の裏話など、今では知る人も殆んどいないのではないと思われる。

こんなことに時間を潰しているのなら、もっと他のことを調べる方が余程役に立つと笑われるかも分からないが、もう少し続けたい。

平成二十六(二〇一四)年四月十七日

清水　章博